

豊後大野市所在

かみ た ほら ひがし
上田原東遺跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2) —

（第2分冊）

目 次

【第2分冊】

第5章 3区の発掘調査成果	1
第1節 調査区の設定と基本層序	1
第2節 縄文時代の遺構と遺物	6
第3節 弥生時代の遺構と遺物	28
第4節 古墳時代の遺構と遺物	95
第5節 古代・中世の遺構と遺物	105
第6節 その他の遺構と遺物	116
第7節 3区出土遺物	119
第8節 旧石器時代の確認調査	142
遺物観察表	147

【第1分冊】

序文

例言

目次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

- 第1節 調査に至る経緯
- 第2節 発掘調査（本調査）の方法と経過
- 第3節 整理作業・報告書作成の経過
- 第4節 調査組織の構成

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 遺跡の地理的環境
- 第2節 遺跡の歴史的環境

第3章 1区の発掘調査成果

- 第1節 調査区の設定と基本層序
- 第2節 縄文時代の遺構と遺物
- 第3節 弥生時代の遺構と遺物
- 第4節 古墳時代の遺構と遺物
- 第5節 古代・中世の遺構と遺物
- 第6節 近世以降の遺構と遺物
- 第7節 その他の遺構と遺物
- 第8節 包含層その他の出土遺物
- 第9節 旧石器時代の確認調査

第4章 2区の発掘調査成果

- 第1節 調査区の設定と基本層序
- 第2節 縄文時代の遺構と遺物
- 第3節 弥生時代の遺構と遺物
- 第4節 古墳時代の遺構と遺物
- 第5節 古代・中世の遺構と遺物
- 第6節 その他の遺構と遺物
- 第7節 包含層その他の出土遺物

遺物観察表

【第3分冊】

第6章 4区の発掘調査成果

- 第1節 調査区の設定と基本層序
- 第2節 縄文時代の遺構と遺物
- 第3節 弥生時代の遺構と遺物
- 第4節 古墳時代の遺構と遺物
- 第5節 古代・中世の遺構と遺物
- 第6節 その他の遺構と遺物
- 第7節 包含層その他の出土遺物

第7章 5区の発掘調査成果

- 第1節 発掘調査の概要
- 第2節 調査区の基本層序
- 第3節 出土遺物

第8章 X線CTによる上田原東遺跡の土器圧痕調査報告

第9章 総括

- 第1節 遺跡の年代の変遷
- 第2節 縄文時代の遺構と遺物
- 第3節 弥生時代の遺構と遺物
- 第4節 古墳時代の遺構と遺物
- 第5節 遺跡の評価

遺物観察表

遺構一覧表

【第4分冊】

写真図版

報告書抄録

插图目次

第211图	上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1,500) … 1	第257图	SH2出土遺物実測図⑨ (1/3) …… 46
第212图	3区遺構配置図 (1/300) …… 2	第258图	SH2出土遺物実測図⑩ (1/3) …… 47
第213图	3区北半遺構分布図 (1/200) …… 3	第259图	SH2出土遺物実測図⑪ (1/3) …… 48
第214图	3区南半遺構分布図 (1/200) …… 4	第260图	SH2出土遺物実測図⑫ (1/3) …… 49
第215图	3区土層断面図 (1/60) …… 5	第261图	SH2出土遺物実測図⑬ (1/3) …… 50
第216图	SH200実測図 (1/50) …… 6	第262图	SH2出土遺物実測図⑭ (1/3) …… 51
第217图	SH200出土遺物実測図① (1/3・1/1) … 7	第263图	SH2出土遺物実測図⑮ (1/3) …… 52
第218图	SH200出土遺物実測図② (1/2) …… 8	第264图	SH2出土遺物実測図⑯ (1/3) …… 53
第219图	SH276実測図 (1/50) …… 10	第265图	SH2出土遺物実測図⑰ (1/3) …… 54
第220图	SH276出土遺物実測図 (1/3・1/2) … 11	第266图	SH2出土遺物実測図⑱ (1/3) …… 55
第221图	SK499実測図 (1/3・1/2) …… 12	第267图	SH2出土遺物実測図⑲ (1/3・1/4) … 56
第222图	SH280実測図 (1/50・1/30) …… 13	第268图	SH2出土遺物実測図⑳ (1/4) …… 57
第223图	SH280出土遺物実測図① (1/3) …… 14	第269图	SH2出土遺物実測図㉑ (1/4) …… 58
第224图	SH280出土遺物実測図② (1/3) …… 15	第270图	SH2出土遺物実測図㉒ (1/4) …… 59
第225图	SH280出土遺物実測図③ (1/2・1/3) 16	第271图	SH2出土遺物実測図㉓ (1/4・1/2) … 60
第226图	SH496実測図 (1/50) …… 17	第272图	SH3実測図 (1/50) …… 61
第227图	SH496出土遺物実測図 (1/1) …… 17	第273图	SH3出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1・1/4) 62
第228图	SH503実測図 (1/50) …… 18	第275图	SH5出土遺物実測図 (1/3) …… 63
第229图	SH503出土遺物実測図 (1/3) …… 19	第276图	SH6実測図 (1/50) …… 64
第230图	SH530実測図 (1/50) …… 20	第277图	SH6出土遺物実測図 (1/3・1/1) …… 65
第231图	SH530出土遺物実測図 (1/2・1/3) … 20	第278图	SH7実測図 (1/50) …… 65
第232图	SK100実測図 (1/30) …… 21	第279图	SH7出土遺物実測図 (1/3) …… 65
第233图	SK100出土遺物実測図① (1/3) …… 22	第280图	SH10実測図 (1/60) …… 67
第234图	SK100出土遺物実測図② (1/2) …… 23	第281图	SH10焼土・炭化材出土状況実測図 (1/60) … 68
第235图	SK362実測図 (1/30) …… 23	第282图	SH10出土遺物実測図① (1/3) …… 69
第236图	SK362出土遺物実測図 (1/3・1/2) … 24	第283图	SH10出土遺物実測図② (1/1・1/2) … 70
第237图	SK408実測図 (1/30) …… 25	第284图	SH10出土遺物実測図③ (1/2) …… 71
第238图	SK408出土遺物実測図① (1/3) …… 26	第285图	SH12実測図 (1/50) …… 71
第239图	SK408出土遺物実測図② (1/3・1/2) … 27	第286图	SH12出土遺物実測図 (1/3・1/2) … 72
第240图	SK516実測図 (1/30) …… 28	第287图	SH28実測図 (1/60) …… 73
第241图	SK516出土遺物実測図 (1/4・1/3) … 29	第288图	SH28出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/4) … 74
第242图	SX250実測図 (1/20) …… 30	第289图	SH32実測図 (1/50) …… 75
第243图	SX250出土遺物実測図 (1/3・1/2) … 31	第290图	SH32出土遺物実測図 (1/3) …… 75
第244图	SH1実測図 (1/50) …… 32	第291图	SH260実測図 (1/40) …… 76
第245图	SH1出土遺物実測図① (1/3) …… 33	第292图	SH260出土遺物実測図① (1/3) …… 77
第246图	SH1出土遺物実測図② (1/2・1/1) … 34	第293图	SH260出土遺物実測図② (1/2) …… 78
第247图	SH2実測図 (1/60) …… 36	第294图	SH268実測図 (1/30) …… 79
第248图	SH2上層遺物出土状況実測図 (1/50) … 37	第295图	SH268出土遺物実測図 (1/2) …… 80
第249图	SH2出土遺物実測図① (1/3) …… 38	第296图	SH315実測図 (1/50) …… 81
第250图	SH2出土遺物実測図② (1/3・1/2) … 39	第297图	SH315出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2) … 82
第251图	SH2出土遺物実測図③ (1/1) …… 40	第298图	SH367実測図 (1/50) …… 83
第252图	SH2出土遺物実測図④ (1/2) …… 41	第299图	SH367出土遺物実測図 (1/30) …… 83
第253图	SH2出土遺物実測図⑤ (1/2) …… 42	第300图	SH423実測図 (1/50) …… 85
第254图	SH2出土遺物実測図⑥ (1/2) …… 43	第301图	SH423出土遺物実測図① (1/3・1/2) … 86
第255图	SH2出土遺物実測図⑦ (1/2) …… 44	第302图	SH423出土遺物実測図② (1/2) …… 87
第256图	SH2出土遺物実測図⑧ (1/3) …… 45	第303图	SH423出土遺物実測図③ (1/2・1/4) … 88

第304図	SH423出土遺物実測図④ (1/4) ……	89
第305図	SH430実測図 (1/50) ……	90
第306図	SH430出土遺物実測図 (1/3) ……	90
第307図	SK555実測図 (1/30) ……	91
第308図	SK555出土遺物実測図 (1/3) ……	91
第309図	SK106実測図 (1/30) ……	91
第310図	SK106出土遺物実測図 (1/3) ……	92
第311図	SK312実測図 (1/20) ……	92
第312図	SK312出土遺物実測図 (1/2) ……	93
第313図	SK443実測図 (1/30) ……	94
第314図	SK443出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2) ……	95
第315図	SK462実測図 (1/30) ……	96
第316図	SK462出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2) ……	97
第317図	SD427実測図 (1/30) ……	98
第318図	SD427出土遺物実測図 (1/3) ……	98
第319図	SH25実測図 (1/50) ……	99
第320図	SH25出土遺物実測図 (1/3) ……	100
第321図	SH30実測図 (1/50) ……	101
第322図	SH30出土遺物実測図 (1/3) ……	102
第323図	SH240実測図 (1/50) ……	103
第324図	SH240出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	104
第325図	SK4実測図 (1/30) ……	105
第326図	SK4出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2) ……	106
第327図	SK11実測図 (1/30) ……	107
第328図	SK11出土遺物実測図 (1/2) ……	108
第329図	SK87実測図 (1/30) ……	108
第330図	SK87出土遺物実測図 (1/3) ……	108
第331図	SK210実測図 (1/30) ……	109
第332図	SK210出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	109
第333図	SK220実測図 (1/30) ……	109
第334図	SK220出土遺物実測図 (1/2) ……	110
第335図	SK245実測図 (1/30) ……	111
第336図	SK245出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	111
第337図	SK300実測図 (1/50) ……	112
第338図	SK300出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	113
第339図	SK412実測図 (1/30) ……	114
第340図	SK412出土遺物実測図 (1/3) ……	114
第341図	SK413実測図 (1/30) ……	114
第342図	SK413出土遺物実測図 (1/3) ……	114
第343図	SK429実測図 (1/30) ……	115
第344図	SK429出土遺物実測図 (1/2) ……	115
第345図	SK441出土遺物実測図 (1/30) ……	115
第346図	SK441出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	115
第347図	SK275実測図 (1/30) ……	116
第348図	SK275出土遺物実測図 (1/3) ……	116
第349図	SK428実測図 (1/30) ……	116
第350図	SK428出土遺物実測図 (1/3) ……	116
第351図	SP307・SP327実測図 (1/20) ……	117
第352図	SP307・SP327出土遺物実測図 (1/3) ……	117
第353図	SB1実測図 (1/50) ……	118
第354図	SK27実測図 (1/30) ……	119
第355図	SK27出土遺物実測図 (1/3・1/2) ……	120
第356図	SK81実測図 (1/30) ……	121
第357図	SK202実測図 (1/30) ……	121
第358図	SK202出土遺物実測図 (1/3) ……	121
第359図	SK246実測図 (1/30) ……	121
第360図	SK431実測図 (1/30) ……	122
第361図	SK431出土遺物実測図 (1/3) ……	122
第362図	SP216実測図 (1/20) ……	122
第363図	SP216出土遺物実測図 (1/3) ……	122
第364図	SP243実測図 (1/20) ……	122
第365図	SP243出土遺物実測図 (1/3) ……	122
第366図	SP330実測図 (1/20) ……	122
第367図	SP330出土遺物実測図 (1/3) ……	122
第368図	SK265実測図 (1/30) ……	123
第369図	SK265出土遺物実測図 (1/3) ……	123
第370図	SK444実測図 (1/30) ……	123
第371図	3区遺構実測図① (1/20) ……	124
第372図	3区遺構実測図② (1/20) ……	125
第373図	3区遺構出土遺物実測図① (1/3・1/2) ……	126
第374図	3区遺構出土遺物実測図② (1/2) ……	127
第375図	3区出土遺物実測図① (1/3) ……	128
第376図	3区出土遺物実測図② (1/3) ……	129
第377図	3区出土遺物実測図③ (1/3) ……	130
第378図	3区出土遺物実測図④ (1/3) ……	131
第379図	3区出土遺物実測図⑤ (1/3) ……	132
第380図	3区出土遺物実測図⑥ (1/1・1/2) ……	133
第381図	3区出土遺物実測図⑦ (1/2) ……	134
第382図	3区出土遺物実測図⑧ (1/2) ……	135
第383図	3区出土遺物実測図⑨ (1/2) ……	136
第384図	3区出土遺物実測図⑩ (1/2) ……	137
第385図	3区出土遺物実測図⑪ (1/3) ……	138
第386図	3区出土遺物実測図⑫ (1/3) ……	139
第387図	3区出土遺物実測図⑬ (1/3・1/4) ……	140
第388図	3区出土遺物実測図⑭ (1/4) ……	141
第389図	3区出土遺物実測図⑮ (1/4・1/2) ……	142
第390図	旧石器時代確認調査トレンチ配置図 (1/300) ……	143
第391図	旧石器確認トレンチ土層断面 (1/300) ……	144

表 目 次

第9表	上田原東遺跡(3区)遺物観察表(土器・陶磁器)	147
第10表	上田原東遺跡(3区)遺物観察表(石器)	154
第11表	上田原東遺跡(3区)遺物観察表(土製品)	160
第12表	上田原東遺跡(3区)遺物観察表(金属製品)	160

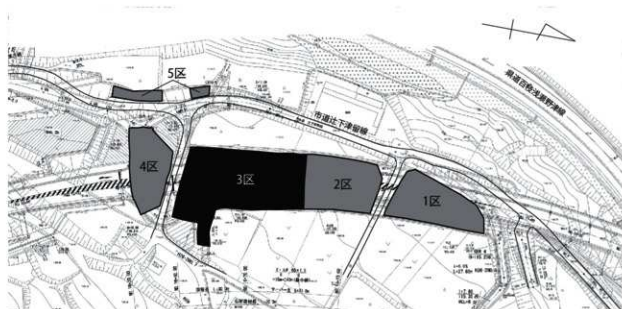
第5章 3区の発掘調査成果

第1節 調査区の設定と基本層序

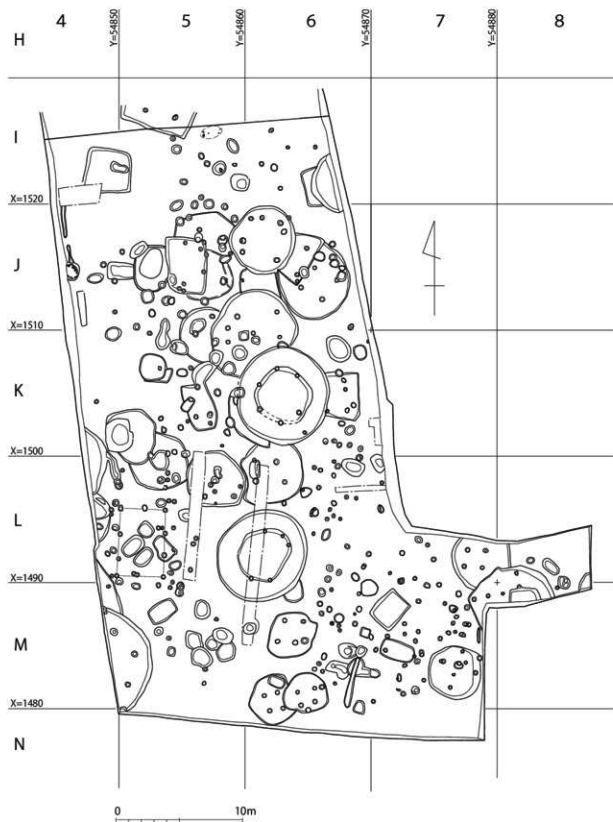
県道三重新殿線(牟礼前田工区)道路改良事業に伴う上田原東遺跡の発掘調査は、調査前の土地形状に応じて1～5区の調査区を設定して実施した。3区は2区に北接し、里道を挟んで南に4区が、市道辻下津留線を挟んで南西に5区が位置する(第211図)。調査地の地番は大字上田原字辻1688-2・3、1689-2、1690-2、1691-3、1696-3の一部、1697-2の一部で、調査前の標高は116.3～118.7mを測る。南東側から北西側にかけて緩やかに傾斜する地形で、そこを段々に造成した畑地が広がる場所である。発掘調査区は道路形状に合わせて設定し、生活道路に接続する南東部では一部が東に張り出す形状となっている。

発掘調査では縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の遺構を確認したが、3区では縄文時代・弥生時代の遺構・遺物が多く、古墳時代以降のものは少ない。全体的に遺構の重複が激しく、また遺構埋土と基盤となる土層が類似しており遺構プランや切り合い関係の把握は困難を極めた。そのため遺構の発掘中にそれを切る遺構を新たに把握するなど、切り合い関係を十分に押さえられなかったものも少なからず存在する。従って遺物の混在は完全には排除できていない。

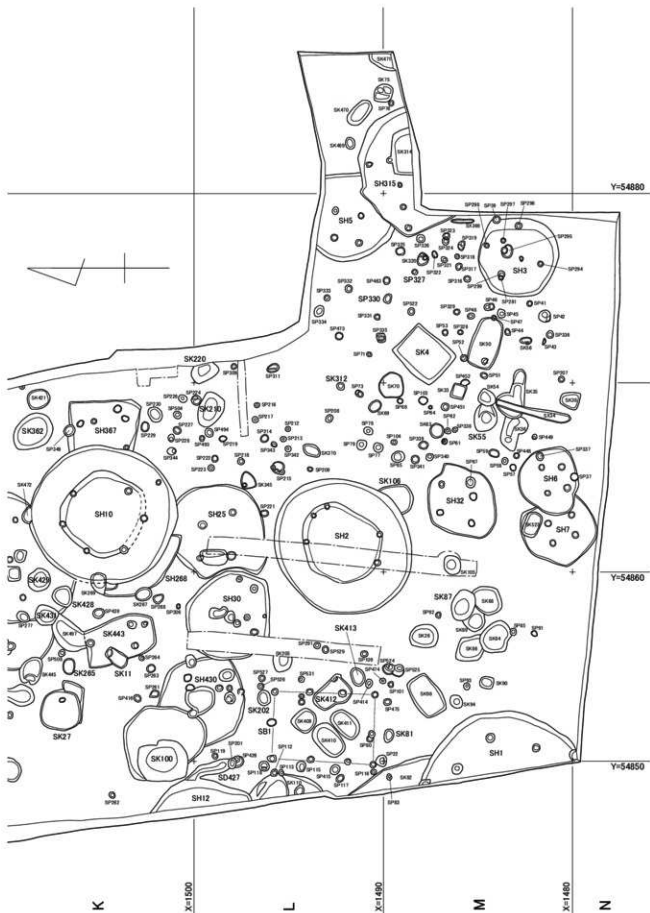
3区の土層断面図を第215図に示す。第1層は現代の耕作土で、概ね10～20cmの厚さで堆積する。畑地の境界で段が付く部分では部分的に60cm程と厚くなっている。第2層は暗褐色を呈する旧耕作土で、層厚は約15～60cmと幅があるものの層界は概ね平らである。第3層は黒褐色を呈する土層で、クロボクと称される。層厚は約15～50cmと幅がある。縄文～中世の遺物を含み、特にIV層に近い部分で比較的大破片の土器や石器が出土している。第IV層はアカホヤ風化土の混じる土層で、2層に細分される。IV A層は暗褐色土で、アカホヤ風化土のブロックが少量混じる。IV B層は黒褐色土やアカホヤ風化土が斑状に混じる黄褐色土である。IV A層は遺構埋土と極めて近似しているため、遺構の大部分はこのIV B層の上面まで下げた段階で検出しているが、IV A層の上面から掘り込む遺構もあり、遺物の出土状況から見ても本来はIV A層上面が遺構検出面である可能性が高い。第V層は約7,300年前の鬼界カルデラの噴火により飛来したK-Ah層、いわゆるアカホヤ火山灰である。粘性がなくサラサラとした明黄褐色土で、堆積は部分的に認められる。特に3区の南東部では面的にも広がり認められた。第VI層は粘性を帯びる黒褐色土で、縄文時代早期に相当する。



第211図 上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1,500)



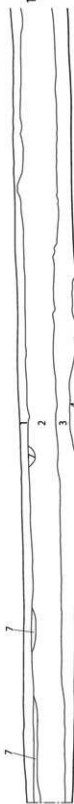
第 212 图 3 区遗构配置图 (1/300)



第 214 图 3 区南半遗址分布图 (1/200)

118,000m

117,000m



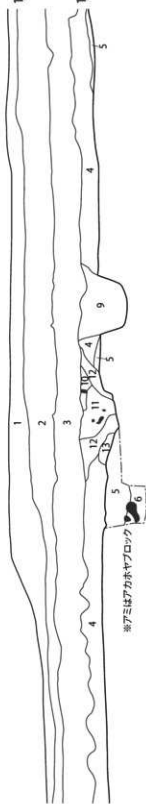
118,000m

117,000m



118,000m

117,000m



※アミはアカホヤブロック

118,000m

117,000m



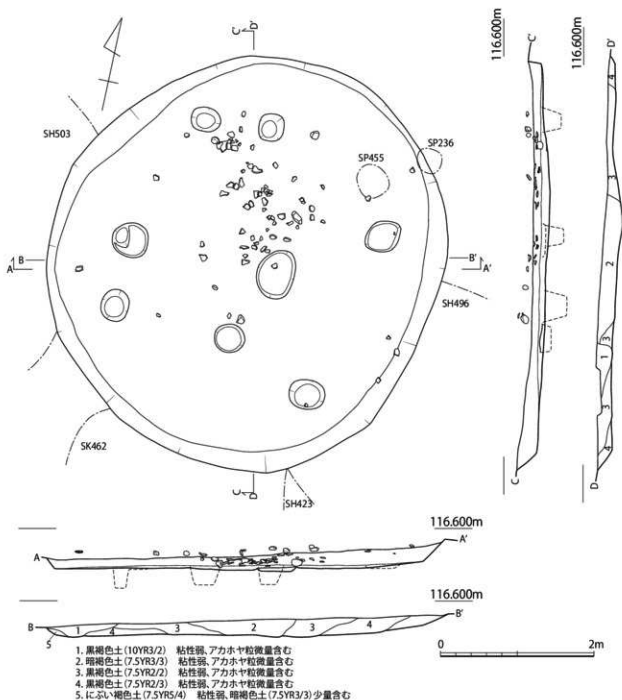
0 2m

- 基本層序
1. 褐色土 (10YR4/3) 粘性弱、全体に粗粒さ丸潤い (第I層)
 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性の強い旧耕作土 (第II層)
 3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性の強いワロボク層 (第III層)
 4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・黒褐色土ワロボクが斑状に混じる (第IVA層)
 5. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、アカホヤ風化土・黒褐色土ワロボクが斑状に混じる (第IVB層)
 6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性強く硬く締まる (第IV層)
 7. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、白色砂粒少量含む
 8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土・細粒少量含む (SK2.20)
 9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土・細粒少量含む
 10. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土が斑状に混じる
 11. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、暗褐色土とアカホヤブロックの混合土
 12. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、黄褐色土ワロボクが斑状に混じる
 13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土ワロボクが斑状に混じる

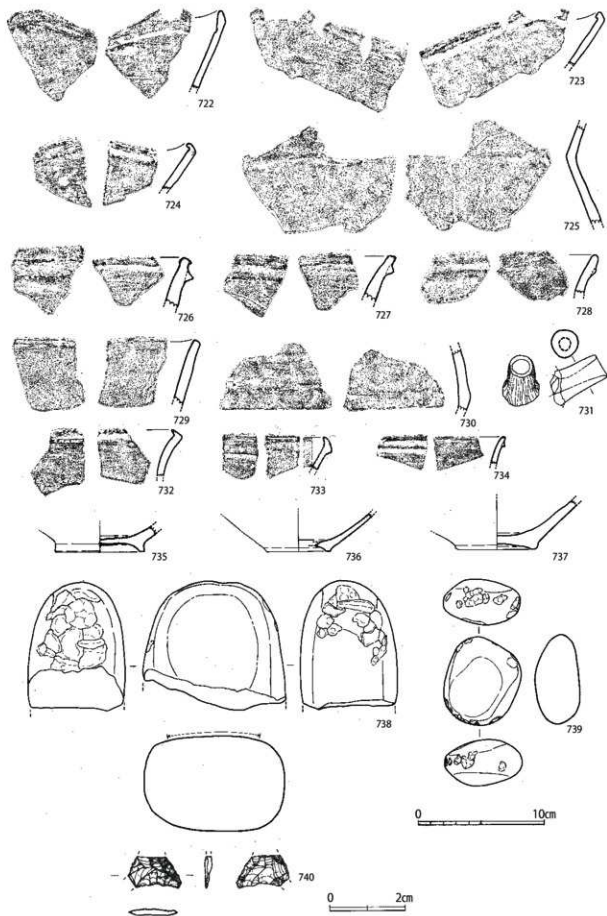
第215図 3区土層断面図 (1/60)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

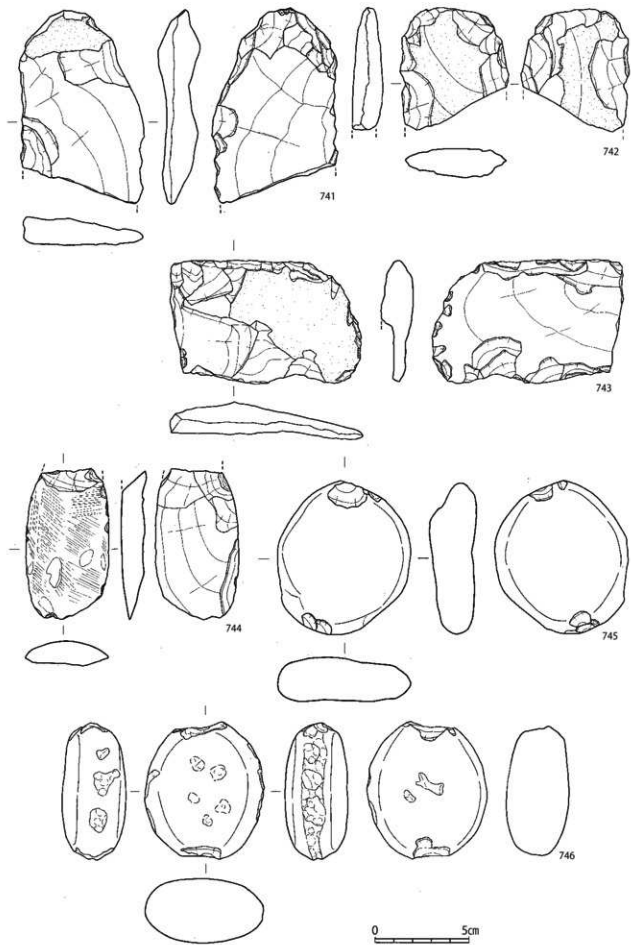
縄文時代の遺構としては、竪穴建物9棟、貯蔵穴を含む土坑5基、デボの可能性のある遺物集中部1箇所を検出している。全体的に遺構の重複が激しく、遺物が混在しているものも少なからず存在するため、遺構の数はこれより前後する可能性もある。縄文時代の遺構の特徴として、他の調査区と同様に埋土が他の時代の遺構と比べ赤みがかっている点が挙げられる。遺構の分布は、3区のほぼ全域に及んでいる。



第216図 SH200 実測図 (1/50)



第217图 SH200 出土遺物実測図① (1/3・1/1)



第 218 图 SH200 出土遺物実測図② (1/2)

SH200(第216図)

3区の北部、J・5・J・6グリッドで検出した竪穴建物である。平面形状は略円形を呈し、長径5.50m、短径5.31m、深さは最大で0.41mを測る。埋土は5層に分層され、2～5層はレンズ状の堆積状況を示す。SH200の堆積層はこの4つで、1層はSH200の埋設後に掘り込んだもので、埋土の色相も縄文時代の層とは異なる。床面では中央付近に楕円形を呈する浅い掘り込みの土坑と、ピット7基を検出している。ピットは20～30cm程度の深さのあるものが主柱穴になると思われるが、配置が不規則で特定できていない。遺物は縄文土器、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錘、叩石・磨石の他、弥生土器や土師器の小片が出土している。遺構の重複が著しく、縄文時代の竪穴建物であるSH496・SH503、弥生時代の竪穴建物SH423、弥生時代の土坑SK462、その他SP236・SP455と切り合い関係にある。このうちSH496・SH503はSH200より古い遺構で、SH423・SK462・SP236・SP455は出土遺物や埋土の違いから本来SH200を切る遺構であるが、SP236を除いてSH200の方を先に発掘してその後に検出しているため、前後関係の把握ができていない。遺物に弥生土器や土師器など後世のものを含むのは、これらの遺構に帰属するものが混在したものである。

遺構の時期は、出土土器から晩期後葉(上菅生B式期)に位置づける。

SH200出土遺物(第217・218図)

722～737は縄文土器である。722～724は波状口縁を呈し、内面口縁下に1条の沈線を施す無文の深鉢で、後期中葉の太郎迫式に比定される。725は722～724と同時期の頸部～胴部の破片である。726～728は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、晩期後葉の上菅生B式土器に比定される。727は外面に沈線文を施す。729・730は無文の深鉢である。731は注口土器の注口部で、全体にミガキを密に施す。732～734は浅鉢である。732・733は口縁部が内屈し、733は丸く肥厚する。734は外面に細い無刻目凸帯を巡らせる。735～737は底部で、いずれも底部周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。

738～746は石器である。738は砂岩製の叩石・磨石で、側面に敲打痕が、上面に磨面が残る。739は砂岩製の叩石で、側面の上下両端に敲打痕が残る。740は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、上部を欠失する。741・742は打製石斧で、いずれも素材は安山岩である。743は泥岩の横長剥片を素材とした横刃型石器である。744は安山岩製の磨製石斧の残欠で、表面は研磨により平滑となっている。745は安山岩製の打欠石錘で、重量は206.7gを測る。746も砂岩製の打欠石錘であるが、側面に顕著な敲打痕を残すことから、叩石を転用したものである。上下両端を打ち欠いて縄掛け部を作り出す。重量は213.7gを測る。

SH276(第219図)

3区の中央北寄り、J・5グリッドで検出した土坑である。西半部を弥生時代の竪穴建物であるSH260に切られる他、東部はSK256・SK498・SK499と、南北の壁際にはSP225・SP435に切られている。平面形状は隅丸方形気味の円形で、長径4.05m、短径3.90m以上、深さは最大で0.19mを測る。埋土は暗褐色土で、黒褐色土ブロックやアカホヤ風化土の混じり具合から3層に細分される。床面に付属する柱穴等の遺構は確認できなかった。遺物は縄文土器と打製石斧が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。SH276を切る土坑SK499からは晩期後葉の上菅生B式が出土しており、それよりは古く位置づけられよう。出土土器と切り合い関係から晩期前葉に位置づける。

SH276出土遺物(第220図)

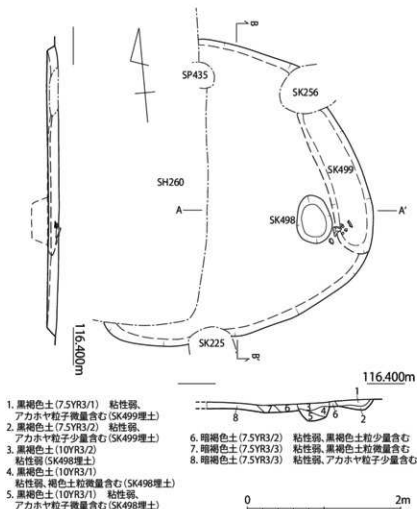
747は波状口縁の深鉢で、口縁部は断面三角形に肥厚し外面に2条の沈線を施す。後期中葉の太郎迫式土器である。748は深鉢で、外面に粗い細沈線を施す。晩期前半の深鉢か。749は浅鉢で、外に開きながら立ち上がり上部で強く屈曲する。750は打製石斧である。周縁部に細かい調整割離を施す。

SK499出土遺物(第221図)

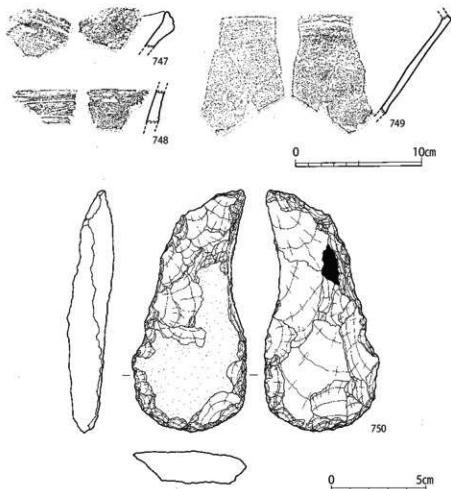
751は縄文土器の深鉢で、外面口縁下に無刻目凸帯を貼り付ける上菅生B式である。752は安山岩の剥片で、打製石斧製作に伴う残滓であろう。753は安山岩製の打製石斧で、上下両端の大部分を欠失する。残存部が少ないため確実ではないが、剥離が粗く未製品の可能性もある。これらの出土遺物から、SK499も縄文時代晩期後葉(上菅生B式期)の遺構と判断される。

SH280(第222図)

3区の北部西寄り、J-5グリッドで検出した竪穴建物である。東端部を弥生時代の竪穴建物SH260に切れ、また周囲を古墳時代の土坑SK505や古代の土坑SK275等に切れ、西壁では縄文時代の土坑と推定されるSK506を切っている。平面形状は南北に長い隅丸長方形形状を呈し、長辺3.68m、短辺2.57m以上、床面までの深さは最大で0.20mを測る。埋土は地山の黄褐色土ブロックやアカホヤ風化土の混じる黒褐色土で、やや粘性を帯びて締まりがある。この竪穴建物の中央で、鶏卵形の平面形状を呈する土坑(SK280A)を検出しており、これをSK280Aとし、竪穴建物をSH280Bとして区別した。土坑SK280Aは長径2.52m、短径1.68m、床面中央までの深さ1.274mを測る。床面の周囲には壁際に沿ってドーナツ状に浅い溝状の掘り込みがあり、さらに杭状の痕跡とみられる小ピットが12基巡っている。この小ピットも深さが0.40m前後あるものもあり、上屋を支えるなど何らかの目的をもって設置されたものであろう。土坑の機能としては貯蔵穴と考えたい。埋土はいずれも暗褐色土で、混入物の違いや土質によって3層に細分される。再上層の1層にはぶい黄褐色土の小塊混じりで、下半部に特に多く混じりが認められ



第 219 図 SH276 実測図 (1/50)



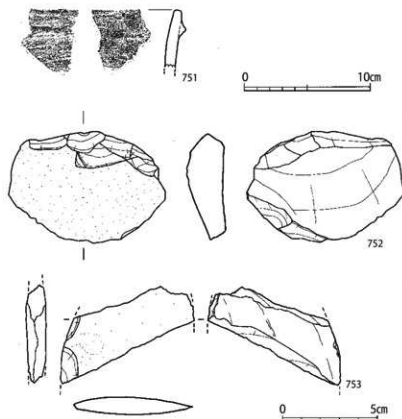
第220図 SH276出土遺物実測図(1/3・1/2)

た。2層はこのにぶい黄褐色土塊の混じりが少ない。最下層の3層は混じりのない暗褐色土で、やや粘り気のある土質である。1・2層は掘り直しの可能性もあり、腐絶後は自然堆積ではなく人為的に一度に埋めたものとみられる。土層断面の観察からこの土坑がSH280を切っていることが分かる。

SH280からは多量の縄文土器とともに、打製石斧や石錘、叩石・磨石等の石器類が出土している。その大部分はSK280Aからの出土であり、SH280Bから出土したものは少ない。土器の大半は晩期後葉の無刻目凸帯文土器で、後期末葉～晩期前半頃の土器がわずかに出土しているものの、どちらもSK280Aからの出土である。遺物から貯蔵穴SK280Aは晩期後葉(上菅生B式期)に比定されるのは間違いなく、この時期差がSK280AとSH280Bの年代を示す可能性がある点を指摘しておきたい。

SH280出土遺物(第223～225図)

754～781は縄文土器である。754は外反する口縁で端部が上方に折れ内面口縁下に沈線状になる深鉢で、後期末葉に比定される。755は外面に多条の横位沈線を施す。晩期前半に位置付けられよう。756～770は晩期後葉の深鉢で、756～766は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。756～758は内面口縁下に沈線状の段を持ち、757・758の口縁部には鱗状の突起が付く。759は波状口縁状を呈するが、これも鱗状突起の基部の立ち上がりであろう。760は胴部屈曲と凸帯の間に斜格子状の沈線文を施す。761・762は胴部屈曲部や頸部の破片で、外面に沈線を施す。これらは瀬戸内地域の影響を受けたものか。763は口縁部が強く外反し、胴部で屈曲する。凸帯は口縁からやや下がった位置に付される。764・765は口縁に接して凸帯を貼り付ける767は胴部屈曲部の破片で、内外面に粗い条痕を施す。768は胴部片で、外面に種子状の表出圧痕が認められる。769・770は底部で、770は底面中央が凹



第221図 SK499実測図(1/3・1/2)

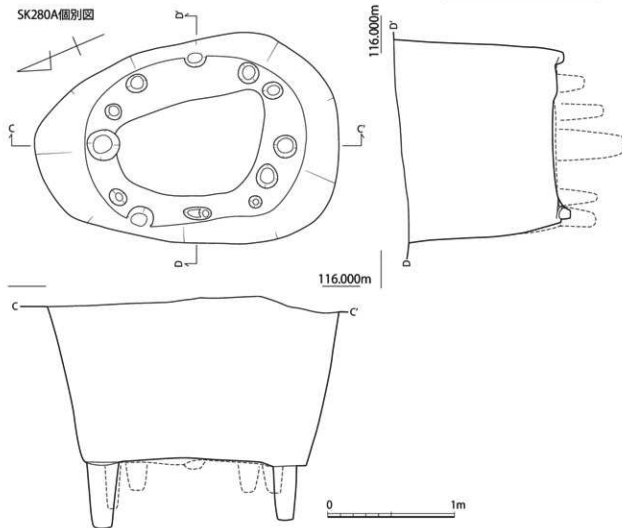
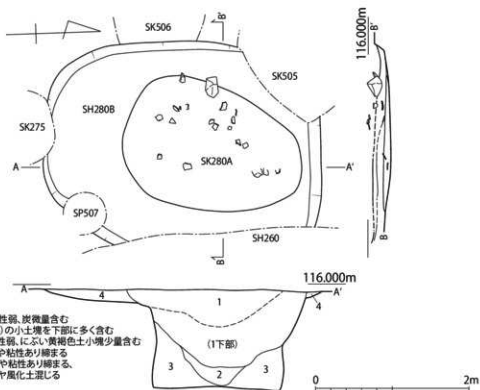
む上げ底形態となる。771は内外面に粗い条痕を施す鉢形土器である。772～781は浅鉢で、771はボウル形の器形を呈する。773～775は外反する口縁で端部を屈曲・肥厚させるもので、774には補修孔を穿つ。776も同様の器形をとる胴部屈曲部の破片である。777・778は胴部屈曲部から内傾したのち、口縁部を短く外反させ端部を丸くおさめるもので、口縁部に鱗状の突起を貼り付ける。779は頸部が内傾し口縁部を短く外反させるもので、内面に1条の沈線を施す。口縁端部は先尖り状となる。780・781は口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させて拡張するもので、780には鱗状の突起がつく。

782～789は石器類である。782は金山産とみられるサヌカイトを素材とした、打製石鏝の未製品である。783は安山岩製の打製石斧で、背面には自然面があり、母岩から剥ぎ取った横長剥片を素材として周縁に調整剥離を施している。784は粘板岩製の横刃型石器で、刃部となる下辺に連続的な調整剥離を施す。785は姫島産黒曜石の剥片で、下部を折損する。786・787は打欠石錘で、対向する上下端を打ち欠いて縄掛け部を作り出す。石材は786は凝灰岩質砂岩、787は砂岩である。788・789は叩石・磨石で、背面及び腹面を磨面とし、周縁に敲打痕が残る。石材はいずれも安山岩である。

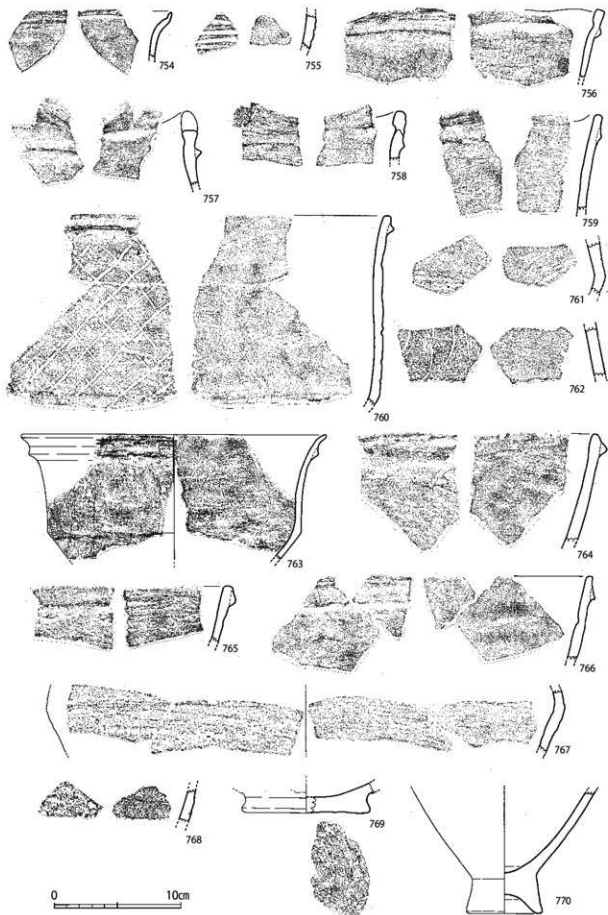
以上のうち、770はSK280AとSB280Bから出土したものが接合している他は、SK280Aからの出土である。777はSK280Aの最下層からの出土で、276は弥生時代の竪穴SH260から出土した破片と接合している。

SH496(第226図)

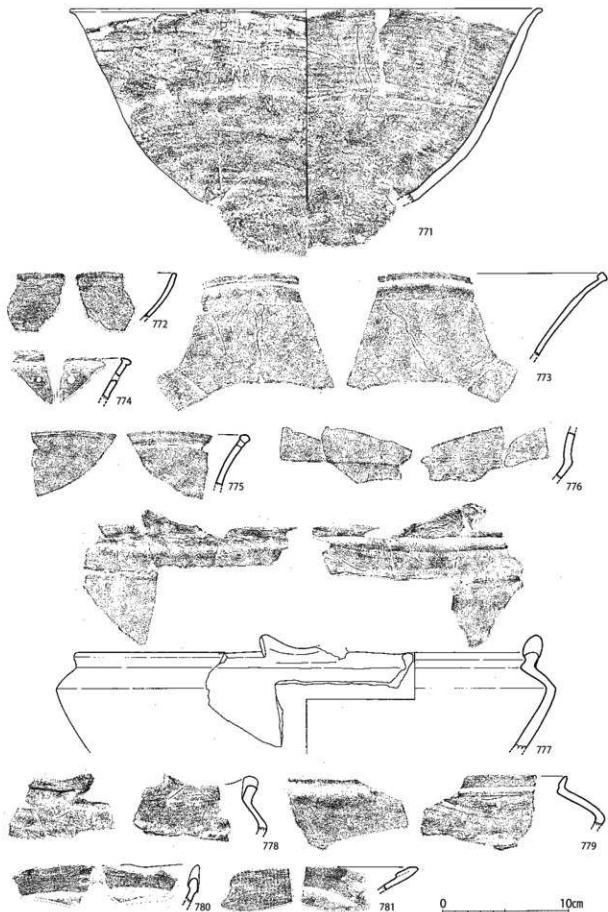
3区の中央北寄り、J-6グリッドで検出した竪穴建物である。西側をSH200に、東壁の一端をSK510に切られており、さらに上部はSH423と重複している。SH423を掘り下げる過程でその存在を確認できた。平面形状はやや歪な方形を呈し、長辺4.17m、短辺2.22m以上、深さは最大で0.26mを測る。床面は比較的平坦で、ビット2基を検出している。主柱穴になる可能性があり、柱の位置から勘案すると4本の主柱穴で上屋を支える構造となる可能性が考えられる。遺物は土器の細片の他、打製石鏝が1点出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、SH200に切



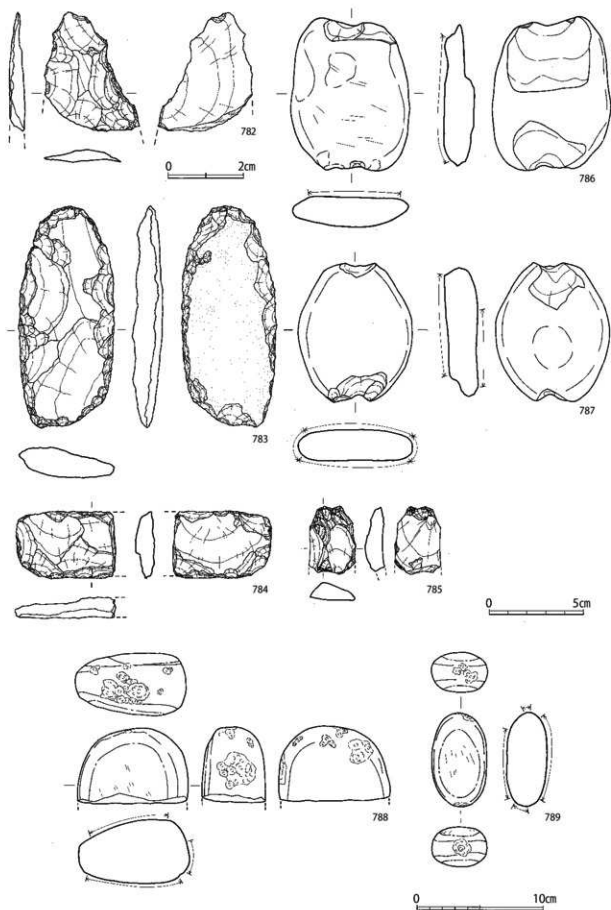
第 222 図 SH280 実測図 (1/50・1/30)



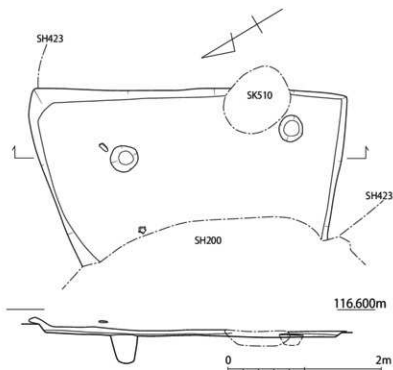
第 223 図 SH280 出土遺物実測図① (1/3)



第 224 图 SH280 出土遺物実測図② (1/3)



第 225 図 SH280 出土遺物実測図③ (1/2・1/3)

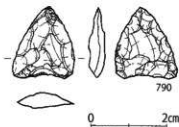


第 226 図 SH496 実測図 (1/50)

られることからそれよりは古く、晩期後葉以前に位置付けられる。

SH496出土遺物(第227図)

790は打製石鏃である。形状は正三角形形状を呈し、基部はわずかに抉れる。石材は金山産サヌカイトである。



第 227 図
SH496 出土遺物実測図 (1/1)

SH503(第228図)

3区の中央北寄り、J-5グリッドで検出した竪穴建物である。南半部をSH260・SH276、東側の一部はSH200に切られ、さらにいくつかの土坑やピットと重複している。そのため全体の規模は明らかにできないが、平面形状は丸みをもつ隅丸方形とみられ、長径4.98m以上、短径3.50m以上、深さは最大で0.20mを測るが、全体的に削平を受けている影響で大部分は0.1m前後と浅い。床面はフラットで、ピット1基を検出した他に付属する遺構は確認できない。埋土は褐色土の単層である。遺物は縄文土器の他、土師器、叩石・磨石、砥石が出土している。晩期の土器が出土しているが、これがSH503の年代を決めるものか、あるいは重複遺構からの混入であるのかの判断が難しい。土師器は重複するピットや土坑からの混入であろう。SH200やSH276に切られることからそれより古いとみられるが、年代比定できる遺物に乏しく、決め手を欠く。後期までさかのぼる資料が見られないので、縄文晩期の遺構と考えたい。

SH503出土遺物(第229図)

791・792は縄文土器の浅鉢である。791は口縁部は内側に短く折れ、端部は丸くおさめる。792は口縁部に鱗状の突起が付く。793は土師器壺の胴部破片で、外面に種子状の表出圧痕が見られる。794は砂岩製の叩石・磨石で、正面及び腹面を磨面とし、腹面及び周縁部に敲打痕が認められる。795は凝灰岩製の砥石で、上面が使用面で平滑になっている。

SH530(第230図)

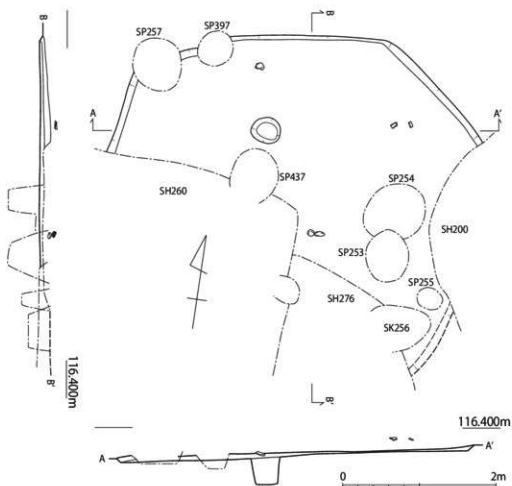
3区のJ・5・K-5グリッドで検出した竪穴建物である。東半部を大きくSH28に切られており、さらにSK277・SK431・SK441・SK445・SK497や3基のピットに切られている。平面形状は略円形を呈するとみられ、長径4.37m、短径2.70m以上、深さは最大で0.21mを測るが、全体的に上部を削平されており、大部分は0.1～0.15m前後しかない。床面は平坦で、付随する炉穴や柱穴等の遺構は確認できなかった。遺物は石鍾、叩石が出土している。土器の出土がなく帰属時期は明らかにできないが、赤みがかった色相の埋土から縄文時代の遺構と判断される。

SH530出土遺物(第231図)

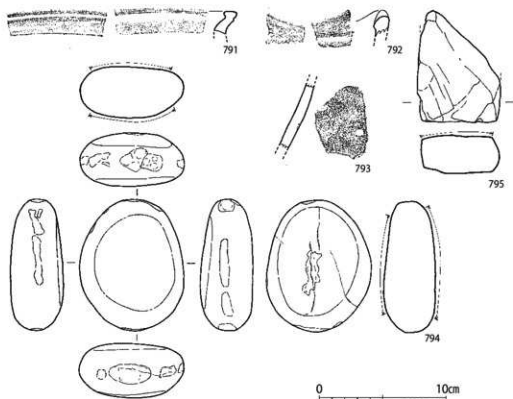
796は粘板岩製の切目石鍾である。上端の縄掛け部はスリット状の切り目と打ち欠きの両方が見られるが、切目を打ち欠き切っている。もともと切目石鍾であったものを、摩耗等により縄掛け部が機能しなくなったために打ち欠いてリダクションしたものとみられる。797は砂岩製の叩石である。側辺を中心に敲打痕が認められる。

SK100(第232図)

3区の中央西寄り、K・4・K・5・L・4・H・5グリッドで検出した土坑である。東側を弥生時代の竪穴建物SH430と重複しているが、SH430はSK100の完掘後に検出しており平面での前後関係を把握できなかった。SK100の平面形状は隅丸長方形形状を呈し、長辺2.61m、短辺0.45mを測る。掘り込み角度は緩やかで、床面は丸みを持って窪む。遺物は縄文土器の他、打製石斧が出土している。出土土器から、晩期後葉(上菅生B式期)に位置づける。



第228図 SH530実測図(1/50)



第 229 図 SH503 出土遺物実測図 (1/3)

SK100出土遺物(第233・234図)

798～804は縄文土器である。798は外面に凹線文を施すもので、後期初頭の西和田式土器に比定される。799は胴部屈曲部に1条の沈線を施す深鉢で、後期後葉に位置付けられる。800は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上管生B式土器である。801は800と同様の器形をとる深鉢で、胴部屈曲部から上位に曲線状の粗い沈線文を施す。802は外面口縁下に1条の刻み目をもつ凸帯を巡らせる。803は浅鉢で、外に開きながら立ち上がり胴部で強く屈曲する。804は深鉢の胴部細片で、内面に種子状の圧痕が認められる。

805・806は打製石斧である。いずれも背面に自然面が残り、母岩から割りとった横長剥片を素材として周縁に調整剥離を施している。806は調整剥離が粗く、未成品の可能性がある。石材はいずれも安山岩である。

SK362(第235図)

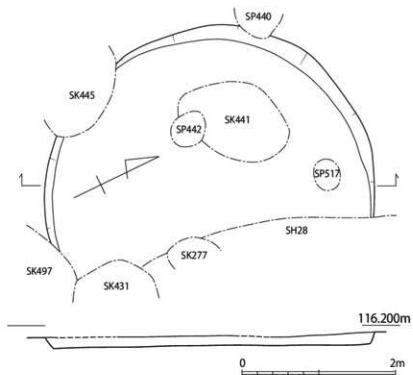
3区の中央東寄り、K-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は鶏卵形を呈し、長径2.52m、短径1.75m、深さ0.14mを測る。内部の掘り込みは緩く、底面も緩やかに窪んでいる。遺物は縄文土器の他、打製石斧や叩石・磨石が出土している。出土土器から後期後葉の遺構の可能性がある。

SK362出土遺物(第236図)

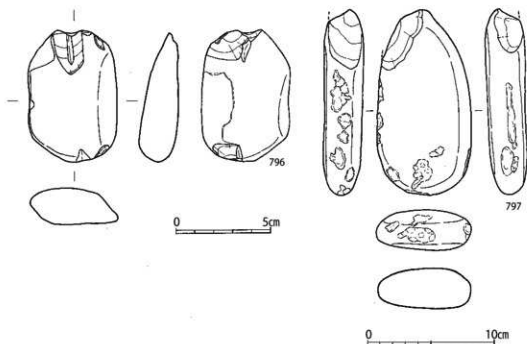
807は縄文土器の深鉢である。口縁は外反し端部は短く上方に折れ、内面に1条の沈線が巡る。後期後葉の無文土器である。808・809は叩石・磨石で、背面・腹面を磨面とし、周縁に敲打痕が残る。石材はいずれも砂岩である。810は安山岩製の打製石斧で、下部を折損する。

SK408(第237図)

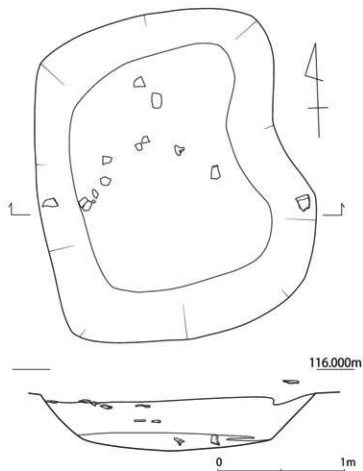
3区の北部西寄り、J-4グリッドの調査区端で検出した土坑である。平面形状は円形ないしは楕円形状を呈するとみられ、長径1.45m、短径1.05m以上、床面までの深さ0.44mを測る。床面は中央が若干高く、壁際に歪な溝状の



第 230 図 SH530 実測図 (1/50)



第 231 図 SH530 出土遺物実測図 (1/2・1/3)



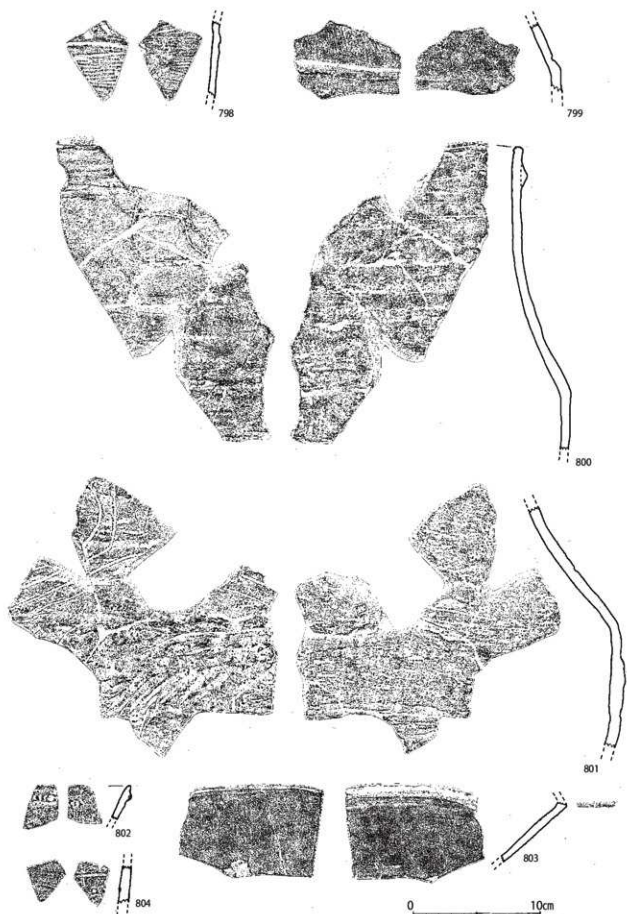
第232図 SK100実測図(1/30)

窪みが回り、その傍に数基のビット状の掘り込みが認められる。形状としてはSK280Aと酷似しており、SK408も貯蔵穴の可能性が高い。遺物は縄文土器や石器類が検出面から床面にかけて出土しており、扁平な石材が中央に向かって落ち込むように出土している。出土した土器から、遺構の時期は晩期後葉(上菅生B式期)に比定される。

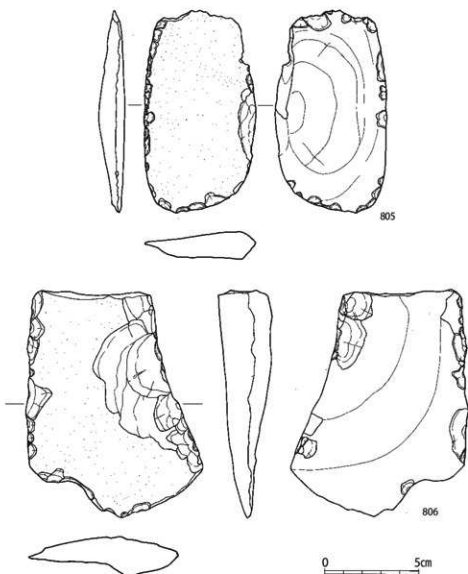
SK408出土遺物(第238・239図)

811～822は縄文土器である。811～820は外面口縁部下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、上菅生B式土器に比定される。811は凸帯が水平ではなく、口縁部の一端から緩くカーブしながら延びており、口縁部を水平に一周するのではなく、連弧状になる可能性がある。内面口縁部下にはわずかに沈線が痕跡化した段が付いており、上菅生B式の中でも古相を示す可能性が高い。なお、内面には1箇所に種子状の圧痕が認められたが、本資料は分析していない。813・816・817・818・819・820は凸帯が口縁部からやや下がった位置に付され、口縁部は上端を面取りしている。817には補修孔を穿つ。821・822は浅鉢である。822は内面の一部に袋状の突起が付き、その突起部の上部に貫通する穿孔が認められる。内外面ともに調製は密なミガキである。

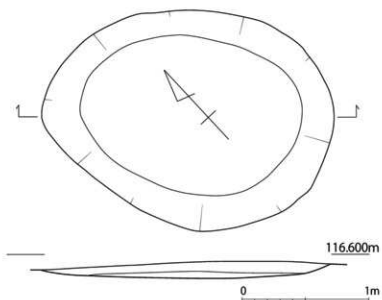
823～828は石器である。823・824は砂岩製の叩石で、特に周縁部に顕著な敲打痕が認められる。825は砂岩製の叩石・磨石で、背面及び腹面を磨面とし、この両面及び周縁上下端及び左面に敲打痕が残る。特に下端部に顕著な痕跡が認められる。826は砂岩製の砥石で、上面が平滑になった使用面で、わずかに擦痕が認められる。827は姫島産黒曜石の二次加工剥片で、上端部に打点と打瘤が観察され、下部には微細な剥離痕が認められる。828は粘板岩製の切目石錘で、長軸上下両端にスリット状の切目を入れて縄掛け部を作り出す。重量は31.6gを測る。以上の資料は上菅生B式期の良好な一括資料として評価されよう。



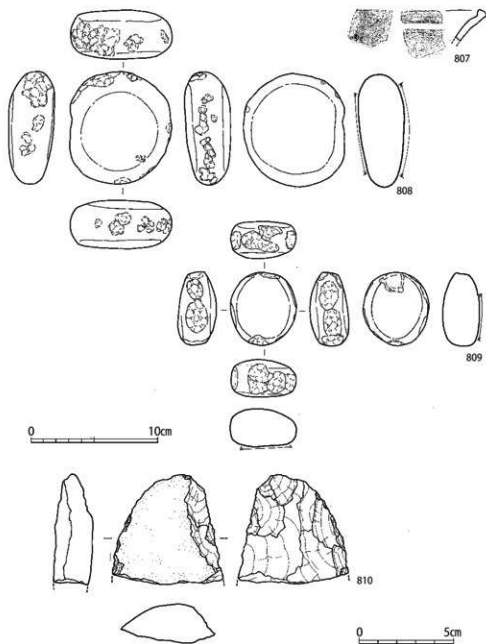
第 233 图 SK100 出土遺物実測図① (1/3)



第 234 図 SK100 出土遺物実測図② (1/2)



第 235 図 SK362 実測図 (1/30)



第236図 SK362 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK516(第240図)

3区の中央北寄り、J-5グリッドにある弥生時代の竪穴建物SH260の床面で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.48m、短径1.40m、床面までの深さ1.06mを測る。掘り込みは直に近く寸胴形を呈し、床面はほぼ平坦で壁際に7基の小ピットが巡る。ピットの深さは10～20cm前後である。埋土は暗褐色土の単層で、褐色土や地山の黄褐色土粒を微量ながら含んでいる。遺物は縄文土器が出土しており、遺構の時期は晩期後葉(上菅生B式期)に比定される。

SK516出土遺物(第241図)

829～832は縄文土器である。829は復元口径70.0cmを測る大型の深鉢で、胴部で屈曲して口縁部は内傾する。口縁部には鱗状突起が付く。外面口縁下に1条の無刻目凸帯と、凸帯から胴部屈曲部の間に流水状の意匠の沈線文を施す。晩期後葉の上菅生B式土器に比定されるが、このような文様を施す類例を知らない。830～832は同じく無

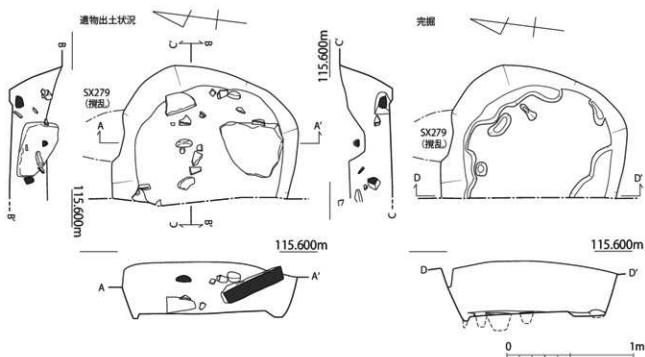
刻目凸帯文土器の深鉢で、830は口縁部に鱗状突起が付き、内面口縁下に段が残る。831は内面口縁下にわずかに沈線上の段の痕跡が残る。832は口縁端部を丸くおさめる。833は浅鉢で、胴部で屈曲・内傾したのち口縁部が外反する。胴部屈曲部に1条の沈線を施す。これらの資料は上菅生B式期の良好な一括資料である。

SX250(第242図)

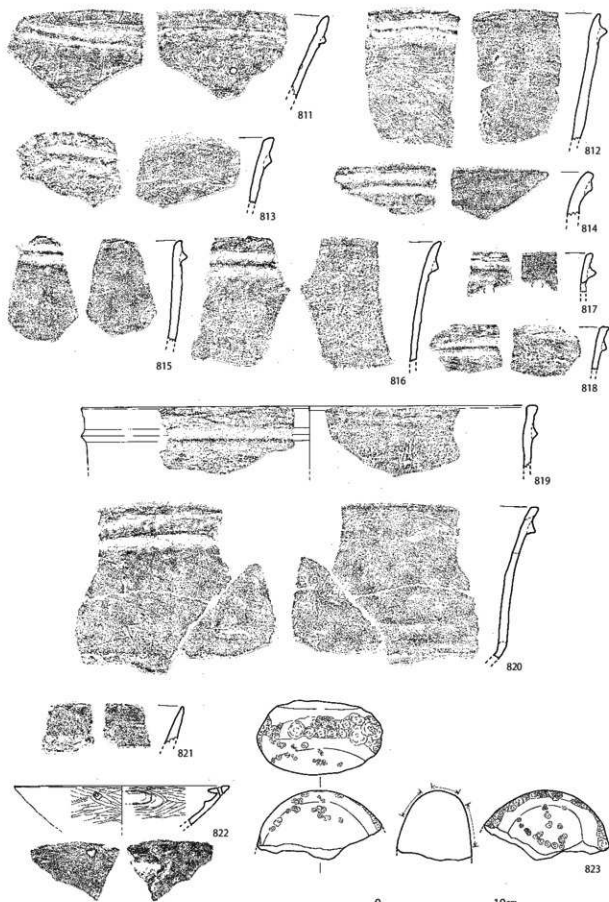
3区の北端部付近、1・5グリッドで検出した石器の一括埋納(デポ)である。打製石斧3点と叩石1点が、東西約0.2m、南北約0.5mの範囲に集積された状態で出土している。また、その周辺から数点の礫や土器が出土している。周囲を精査したが、明確な掘り込みプランは確認できなかった。周辺の検出時に出土した土器から、晩期後葉(上菅生B式期)の遺構の可能性を考えたい。

SX250出土遺物(第243図)

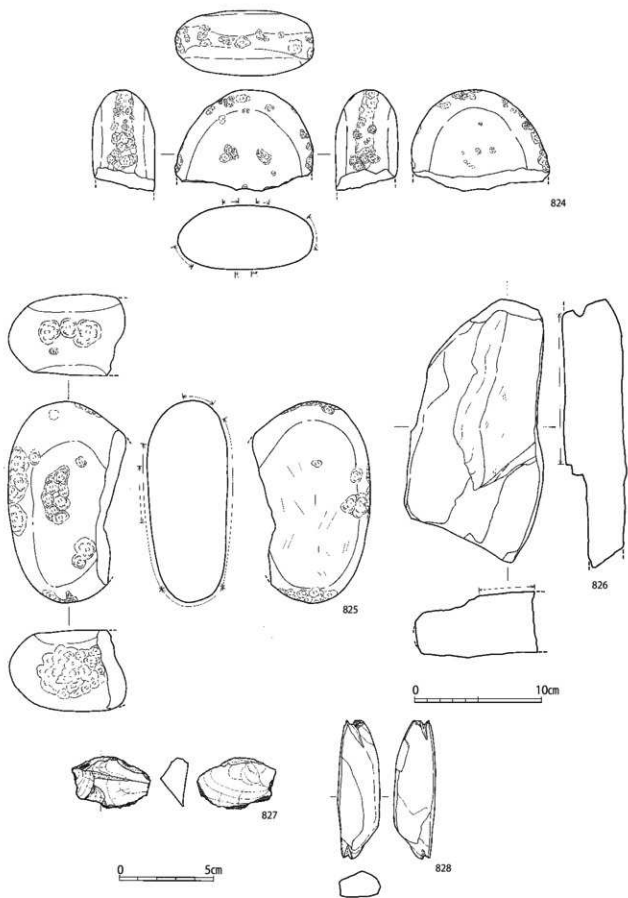
834~838は縄文土器である。834・835は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。836・837は無文の深鉢。838は深鉢の底部である。839は砂岩製の叩石・磨石で、背面・腹面を磨面と叩面とし、上端側面に敲打痕が残る。840~842は安山岩製の打製石斧で、840・842は横長測片を素材として周縁部に丁寧な調整剝離を施す。



第 237 図 SK408 実測図 (1/30)



第 238 图 SK408 出土遺物実測図① (1/3)



第 239 图 SK408 出土遺物実測図② (1/3 · 1/2)

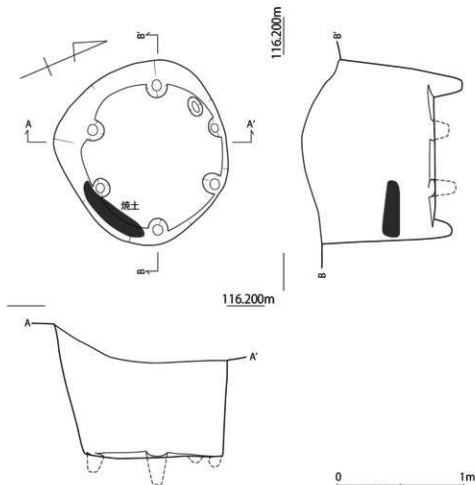
第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、竪穴建物16棟、土坑5基、溝状遺構1条を検出した。竪穴建物の数に対して土坑があまりにも少ないが、土坑については出土遺物がなく帰属時期を明確にできないものが多く、実際にはこれより多いとみられる。いずれにしても弥生時代の遺構としては3区が最も量が多く、弥生時代の生活の中心的なエリアであったとみられる。

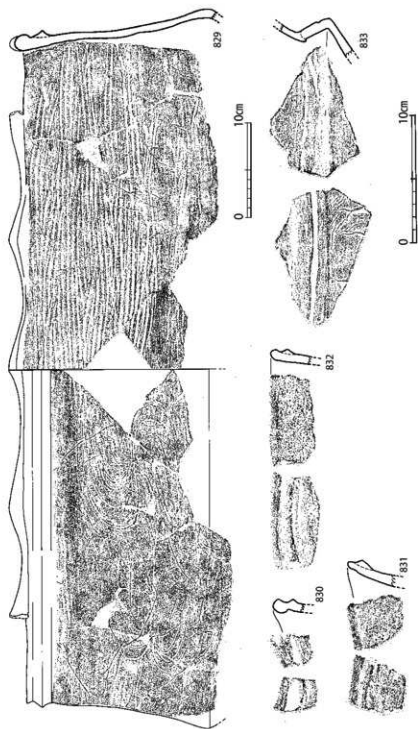
竪穴建物は平面形状が円形のものと同方形のもの、そして不整形のものがみられる。また、掘り込みが浅く、4本支柱穴となるものが3区では多くみられるのも特徴である。この浅く不整形の竪穴建物は3区の南部を中心に、ややまとまって分布する傾向が認められる。

SH 1 (第244図)

3区の南西隅部、M・4・M・5・N・5グリッドで検出した竪穴建物である。西半部が調査区外に続いたため全体の形状及び規模は明らかにできないが、平面形状は円形を呈するとみられ、長径8.50m以上、短径3.52m以上、深さ0.50mを測る。埋土は3層に分層され、上層は地山ローム層に由来する黄褐色土小粒が全体に混じる暗褐色土、下層の2層は1層と同じ暗褐色土で、黄褐色土小粒の混じりが少ない。3層は褐色土でやや粘性を帯びる。標準層序の第VI層を床面とし、起伏の少ない平坦な面となっている。この床面上で、壁のカーブに沿うように3基のピットを検出している。支柱穴を構成するものと見られ、壁のカーブに沿って全体に7～8基程度が配列するものとみられる。遺物は縄文土器、弥生土器、土鍾、磨製石鏃、打製石斧、剥片、磨石・叩石が出土している。遺構の時期は、出土遺物から後期初頭頃と推定する。



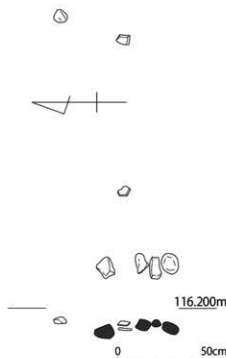
第240図 SK516 実測図 (1/30)



第 241 图 SK516 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

SH 1 出土遺物(第245・246図)

843は縄文土器の浅鉢である。外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせ、口縁部には鱗状の突起が付く。晩期後葉の上菅生B式に比定される。844~847は弥生土器である。844は北部九州的な甕で、外面に煤の付着が認められる。845・846はいわゆる粗製甕である。845は口縁部で、頭部の外面に多象の平行凹線を施す。846は胴部下半の破片で、横位の区画凸帯に縦位の凸帯が接続する。847は甕の底部、848は素焼きの管状土鍾である。849~855は石器で、849・851は円礫を素材とする叩石・磨石で、上下両面の広い面を磨面とし、側縁に顕著な敲打痕を有する。850は叩石で、上面に敲打痕が密に残る。石材は849・850が砂岩、851は安山岩である。852は黒色粘板岩の大型剥片で、磨製石材の素材として剥離されたものの可能性が高い。サイズからみてまだ粗製段階のものと思われる。853は泥岩を素材とする打製石斧で、側縁部に調整剥離を施す。854は黒色粘板岩製の磨製石鏃で、先端部を欠失する。基部は平坦で、全体研磨した擦痕が残る。855は黒色粘板岩製の磨製石鏃で、先端部と基部を欠失する。両面に調整剥離痕が顕著に残り、一部に研磨の擦痕が見られることから、研磨工程段階の未製品であると分かる。



第242図 SX250 実測図 (1/20)

SH 2 (第247・248図)

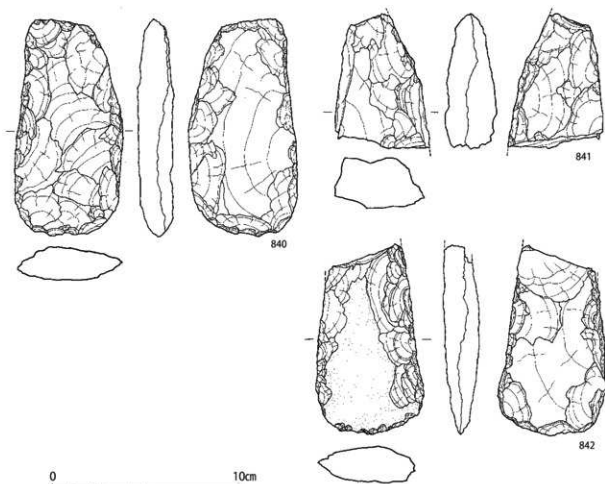
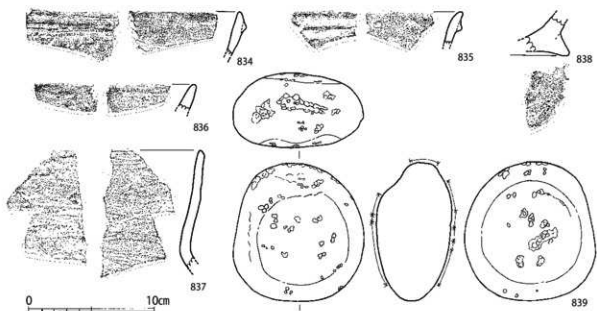
3区の南部中央、L・5・L・6・M・5・M・6グリッドで検出した竪穴建物である。南西部で弥生時代の土坑SK106を切っており、また中央部は確認調査時のトレンチが掘り込んでいる。平面形状は円形を呈し、長径7.72m、短径6.94m、深さは最大で0.74mを測る。内部は2段掘りとなっており、中心部は長径4.52m、短径3.80mの楕円形状に一段深く掘り込まれる。中心部の深さは0.31mを測る。この1段深く掘り込む壁際に沿って、支柱穴となるビットが8基穿たれている。埋土は1~3層の上層と、4層以下の下層に大きく分けられる。上層は黒褐色土ないしは暗褐色土で、この上層埋土中から多量の遺物が出土している(第248図)。下層の4~6層は上段部の下部堆積層で、黒褐色土ないしは暗褐色土でいずれも粘性が弱く脆い土質である。上段部の床面直上に堆積する7層は黒褐色土で、やや粘性を帯び締まりがある。第8層は中央下段部を被覆する暗褐色土で、上段部の下層埋土と同様に粘性がなく脆い。8層の下部には9~11層の堆積が認められた。

SH 2からは縄文土器、弥生土器、半円形土製品、土製玉類、打製石鏃、磨製石鏃、スクレイパー、磨製石斧、打製石斧、石核、石鍾、叩石、磨石、砥石、石皿、鉄刀子等、非常に多くの遺物の出土を見た。中でも磨製石鏃は製品以外に未成品がかなりの量出土しており、また素材となる石核や、剥片・細チップ類、製作に関連する砥石や叩石、台石も認められることから、竪穴建物内において埋製石鏃の政策が行われていた可能性が高い。出土遺物の多くは上述のとおり、埋土上層部からの出土で、中心部に向かってレンズ状に固まった出土状態を示す(第248図)。SH 2の廃絶後、窪地となった中央部に不要となった土器や石器類を集中的に廃棄し、この窪地を埋め立てて整地したものと推測される。

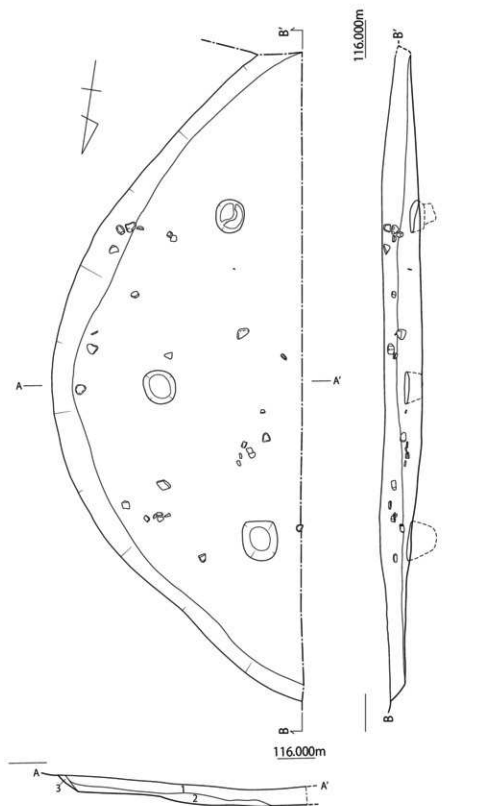
遺構の年代は、出土遺物から後期初頭に位置づける。

SH 2 出土遺物(第249~271図)

856~858は縄文土器である。856は深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。857は浅鉢で、胴部の屈曲部にリボン上の突起を貼り付ける。上菅生B式に伴うものである。858は逆「く」字状口縁を呈する浅鉢で、口縁部が内傾し端部に1条の沈線を施す。晩期の終末に位置付けられる。



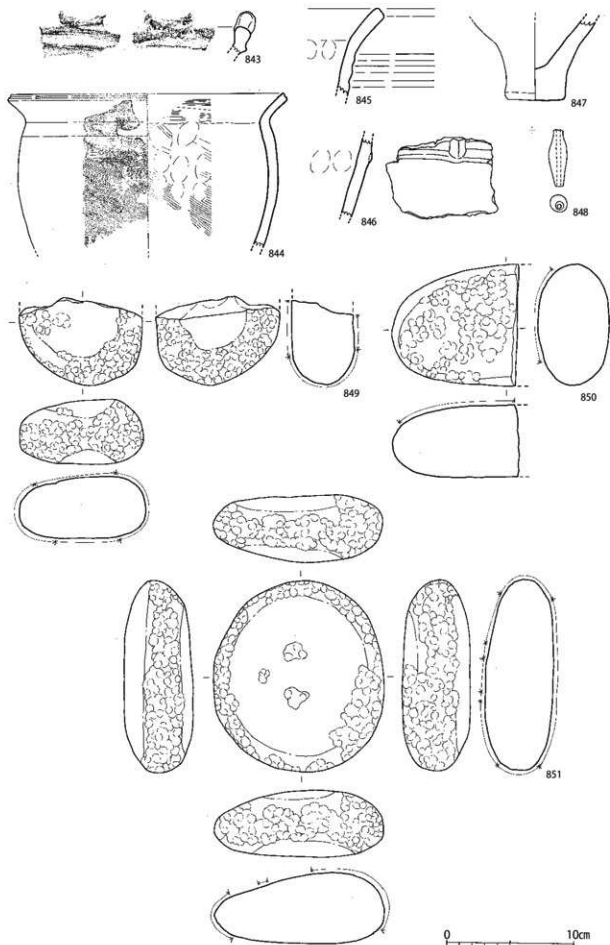
第 243 图 SX250 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2)



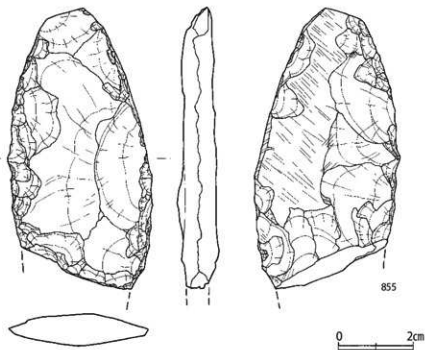
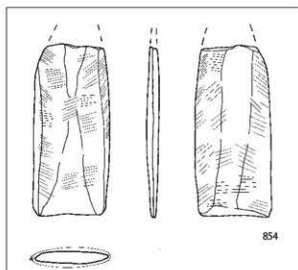
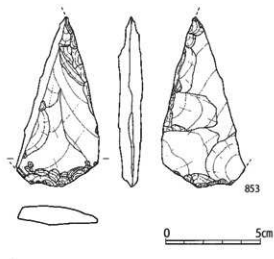
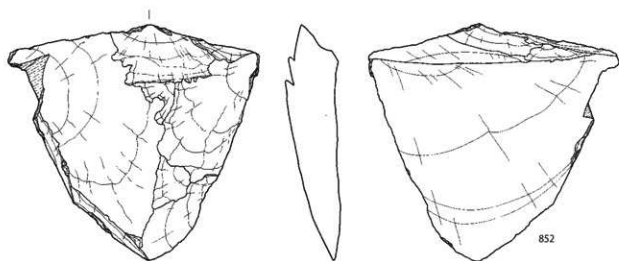
1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土粒が全体に混じる
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄褐色土粒少量含む
3. 褐色土 (10YR4/4) やや粘性あり締まる、黄褐色土粒ごく微量含む

0 2m

第 244 図 SH1 実測図 (1/50)



第 245 图 SH1 出土遺物実測図① (1/3)

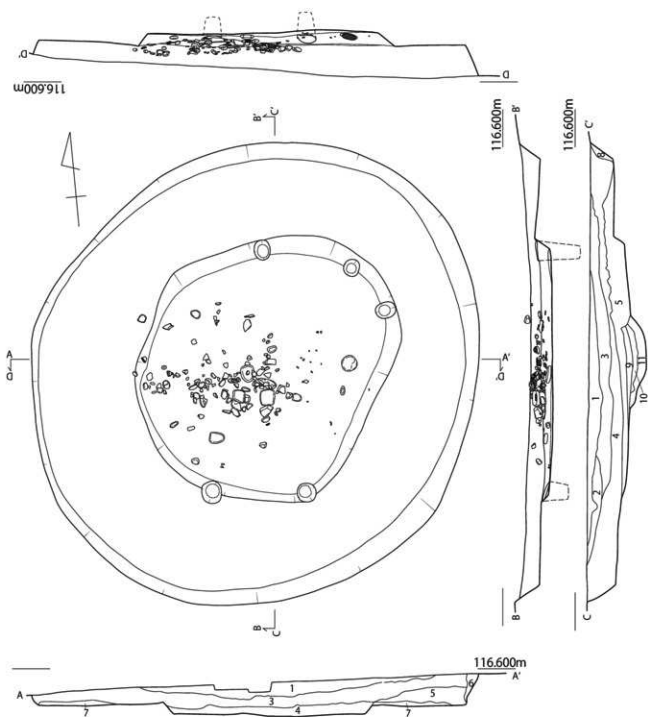


第 246 図 SH1 出土遺物実測図② (1/2・1/1)

859～887は弥生土器である。859は壺で、口縁が内傾し、外面に2条の刻目凸帯を施す。860・861は口縁が外反する北部九州系の壺で、861は口縁端部を上方に摘み上げる。862は壺で、頸部の屈曲が弱い。これらは中期に位置付けられる。863～866は厚手の器壁を有する粗製壺である。863は直口する口縁部で端部が外に折れて拡張し、上端に幅広い面を持つ。口縁部下には横位の凹線を施す。864は口縁部が外反し、端部は肥厚する。865・866は胴部片で、865は外面に横位の凸帯を貼り付ける。865・866とも内面に種子状の圧痕が認められ、熊本大学において分析を実施したが何に由来するものかは判明しなかった。867～872は壺の底部である。873～878は壺で、873は口縁が外に開き、胴部は丸く膨らむ。874は口縁部が強く外反する。875は肩部及び胴部に断面三角形の横位多条凸帯を巡らし、肩部の下端凸帯の下に浮文を貼り付ける。876は875と同様の壺で胴部凸帯が巡る。877は外反する口縁の端部が肥厚し、端面に鋸歯状の刻みを施す。878は口縁が内湾するもので無頸壺であろう。879・880は鉢である。879は器形が環状を呈し、外面に4条の横位沈線を施す。内面屈曲部から下はヘラミガキを施し、屈曲部にミガキの末端部が揃うように認められる。880は内湾する口縁の上端部を拡張し、内端部が内側に突出する、いわゆる鋤先状口縁の鉢である。881は高環の脚部で、外面に赤彩を施す。882～887は壺ないしは壺の胴部の細片で、それぞれに種子状の圧痕が認められる。いずれも分析を行ったが、何の圧痕かが判明したものはなかった。888は土器片を転用し、周縁を加工して半円形状に仕上げた土製品である。889はミニチュア土器の底部で、外面に指頭圧痕が残る。890は中央が膨らみ、端部は段が付く土玉で、長軸方向の側面には貫通する孔を穿つ。

891～1005は石器で、891～918は剥片石器類である。891は凹基無茎式の打製石鏝で、石材はサヌカイトを用いる。892～894は磨製石鏝の製品もしくは製品に近いものである。892・893は基部がわずかに凹むのに対し、894は平基で、895は丸く張り出している。896～904は磨製石鏝の未製品である。896～898は調整剥離の後、表面に研磨を施しており、研磨工程段階の未製品と分かる。898は背面側に面的な研磨が施されているが腹面は剥離が残ったままとなっており、片面ずつ研磨を施したものとみられる。899～904は剥片採取後、側縁に調整剥離を施すもので、整形段階の未製品である。以上の磨製石鏝の石材は、904が千枚岩である他はすべて黒色粘板岩を用いている。905は安山岩の剥片の下部に刃部調整を施すもので、スクレイパーに分類した。906・907は磨製石斧で、906は蛇紋岩、907は砂岩を素材とする。908は蛇紋岩製の石ノミである。上面及び基部に剥離痕が残り、粗い研磨が施されているため未製品の可能性もある。909～917は打製石斧である。909は刃部が楕円に広がる形状となる。912・913・914・915は横長剥片を素材とし、側縁に調整剥離を施す。915は剥離調整が粗く未製品であろう。石材は909～915・917は安山岩、916は砂岩を用いる。918は原礫面を残す黒色粘板岩で、腹面に剥離痕が残る。磨製石鏝の素材として持ち込まれ、素材剥片を剥ぎ取った石核である。

919～1005は礫石器である。919は切目石鏝で、長軸の両端にスリット状の切目を入れて縄掛け部を作り出す。石材は黒色粘板岩である。920は円礫を素材とし、上端部には敲打痕、下端部には小さな剥離痕が認められることから打欠石鏝の可能性が高い。ただし敲打により縄掛け部を作り出すものはあまり例がない。921は流紋岩の原石で、長さ7.5cm、幅3.1cm、厚さ2.1cm、重量56.4gと片手におさまるサイズである。流紋岩は大野川流域で産出するため手ごろに入手は可能で、旧石器時代～縄文時代草創期頃に石器石材として使用されているが、これが石器石材としての使用を目的として持ち込まれたものかどうかは判然としない。922～942は叩石である。円礫を素材とし、上下両面の広い面と側縁部を使用部とするものが多い。940～942は細長い石材の両端部に敲打痕を残すもので、石器の加工に用いたものであろう。石材は927・930・932が安山岩、928は凝灰岩質砂岩、他は砂岩で、924は石材不詳である。943～973は磨石・叩石で、いずれも円礫を素材とし、上下両面の広い面を磨面とし、側縁部に敲打痕を残すものが多い。949や966、967・971は磨面の中にも集中的に叩いた痕跡が残る。962は940～942の叩石と同様の形態をとるが、上下両面の広い面を磨面としている点が異なる。石器の加工に用いられた叩石を磨石に転用したものか、あるいはその逆の可能性もある。947・950・970には被熱の痕跡が認められる。石材は945・964が安山岩である他は砂岩を用いている。974～989は砥石である。974は使用面が平滑化し、断面が丸みを持つ。978・983は使用面の湾曲が顕著に認められる。986は研ぎの端部が明瞭な段となっており、刃物を研いだ痕跡とみられる。988・989は片手におさまるサイズで、半円形を呈し、半円形の弦部の面を使用面としている。石器の加工用に用いられ



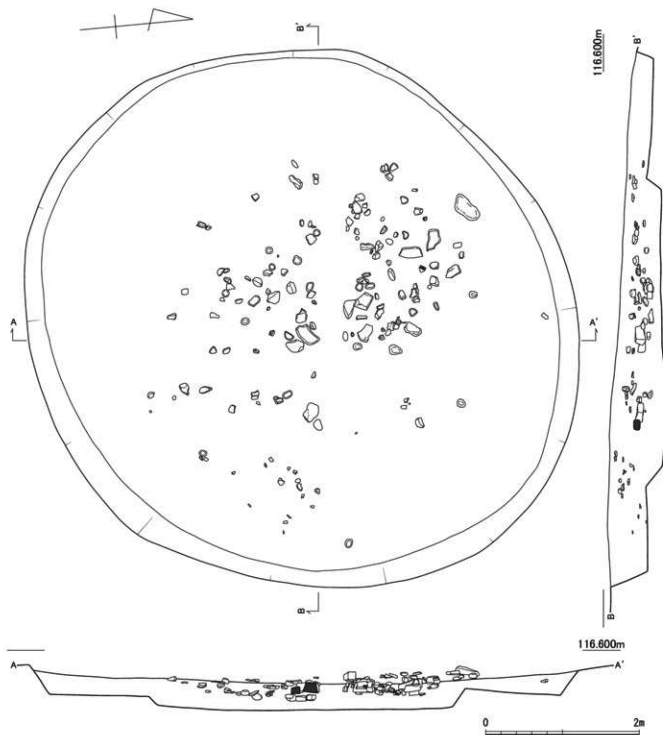
1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、炭微量含む、黄褐色土細粒は殆ど含まない
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤが薄く混じる、炭微量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、炭微量含む、黄褐色土細粒殆どなし
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土粒・炭少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄色土細粒少量、炭微量含む
6. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、黄褐色土細粒混じる
7. 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり締まる、黄褐色土細粒・炭少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄色土細粒混じり、炭少量含む
9. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黄色土細粒少量・炭微量含む
10. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、黄色土細粒少量含む
11. 黒褐色土 (10YR3/2) やや粘性を帯び締まる 黄色土細粒少量含む

0 2m

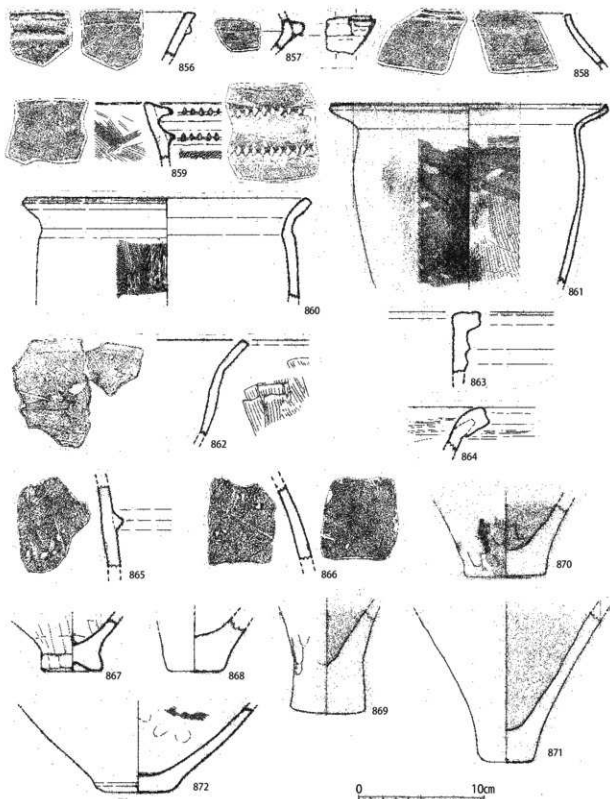
第 247 図 SH2 実測図 (1/60)

た持ち砥石の可能性が高く、主に磨製石鏃の製作に使用されたと考えられる。石材は977・981・986が凝灰岩、988は安山岩で、その他は砂岩である。なお、982・989には被熱の痕跡が認められる。990～1005は石皿・台石である。上面ないしは上下両面を使用面とし、使用面には擦痕や敲打痕が認められる。992・1001には被熱の痕跡が認められる。石材は990・995が安山岩、994は凝灰岩、その他は砂岩である。

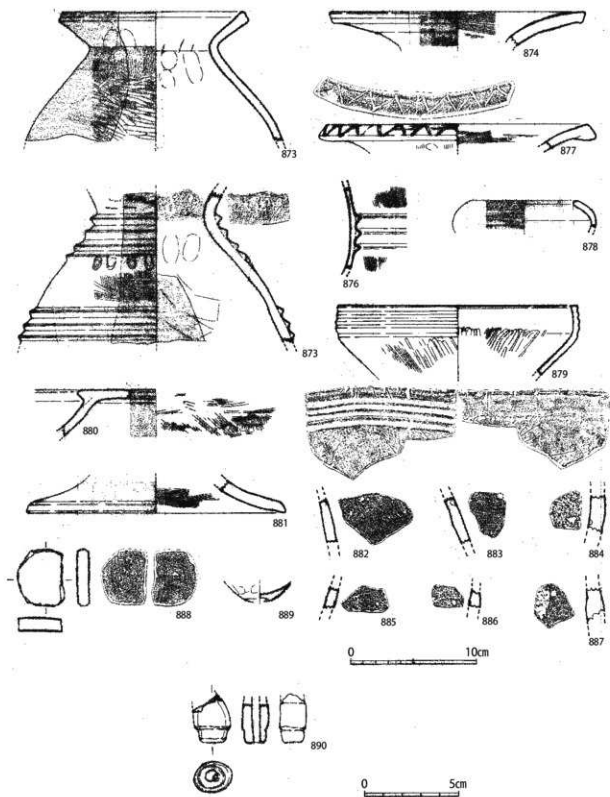
1006～1008は鉄製品で、1006は刀子の切先、1007は刀子の茎部である。1008は棒状を呈するものであるが、小片で用途は明らかにできない。



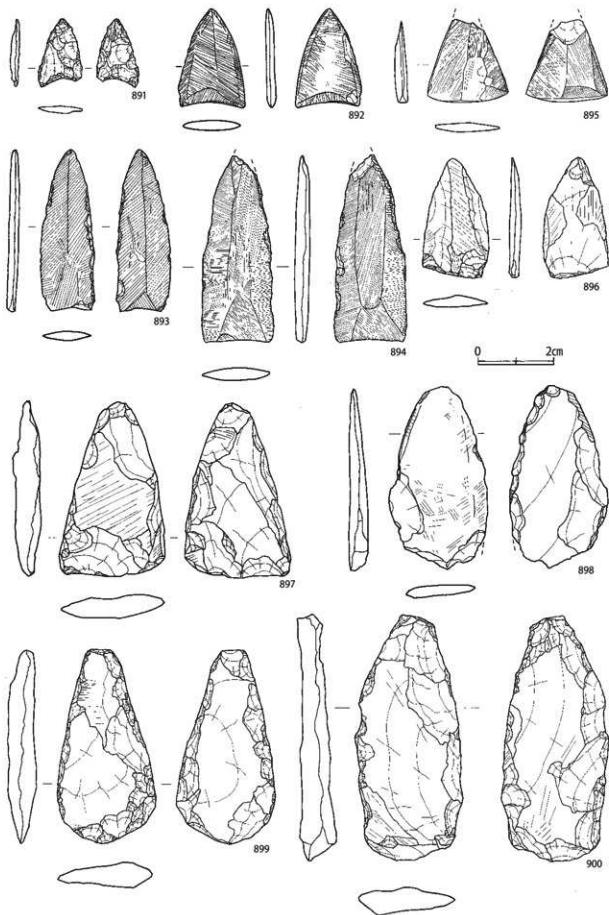
第 248 図 SH2 上層遺物出土状況実測図 (1/50)



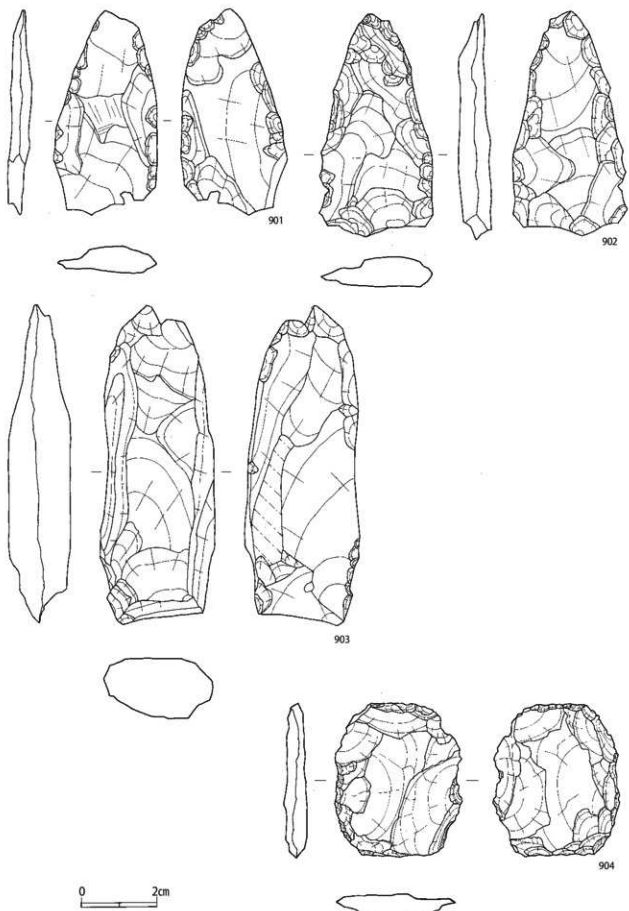
第 249 圖 SH2 出土遺物実測図① (1/3)



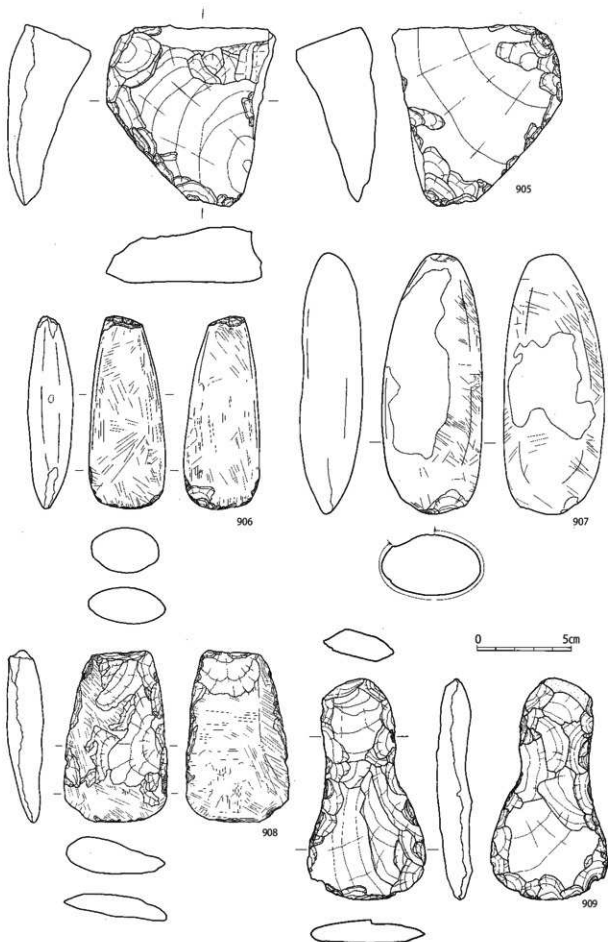
第 250 图 SH2 出土遺物実測図② (1/3 · 1/2)



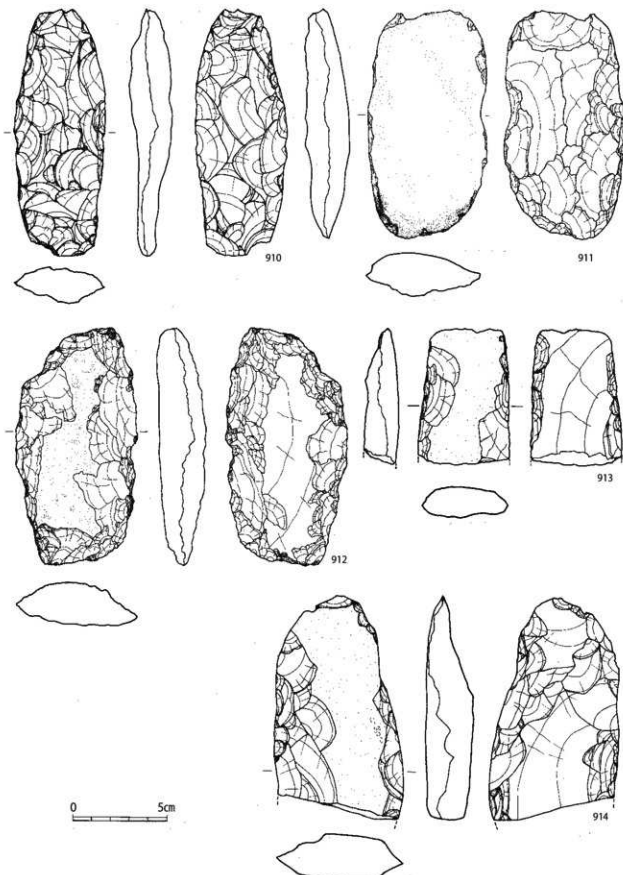
第 251 圖 SH2 出土遺物実測図③ (1/1)



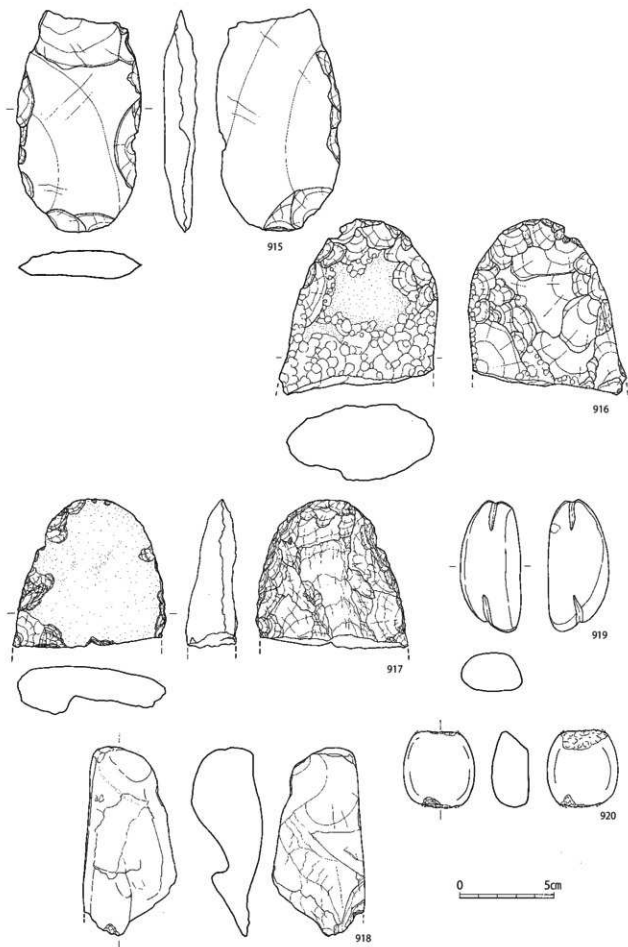
第 252 圖 SH2 出土遺物実測図④ (1/2)



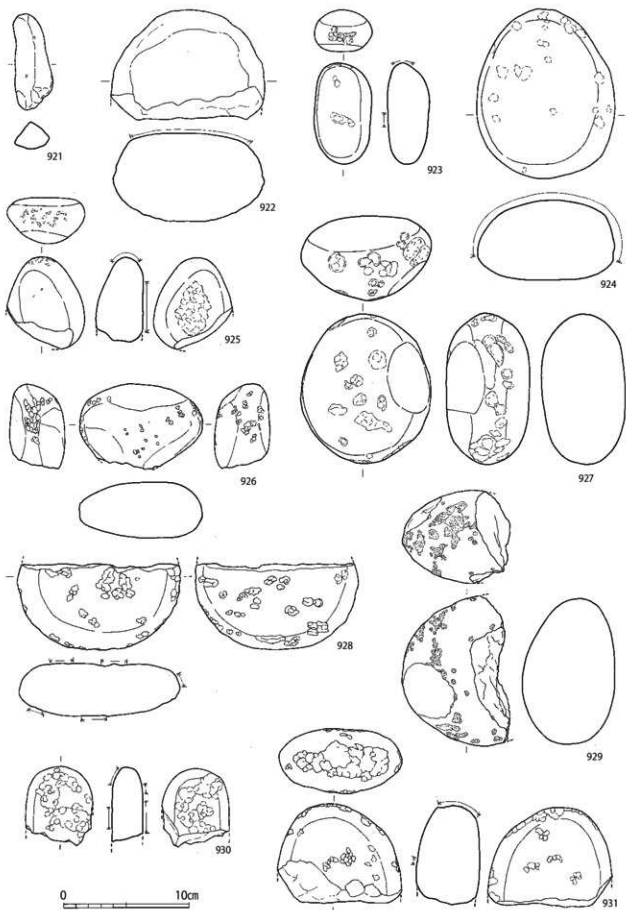
第 253 圖 SH2 出土遺物実測図⑤ (1/2)



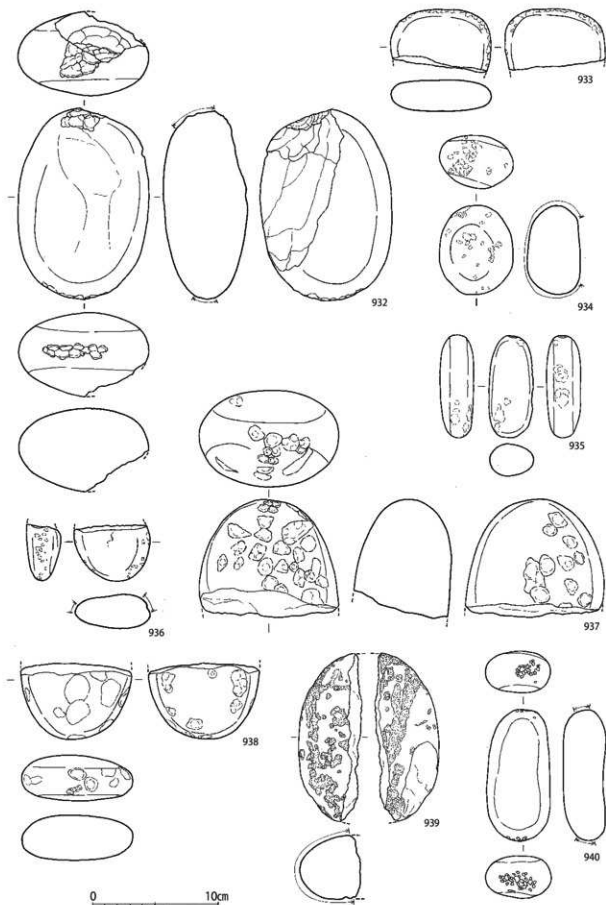
第 254 圖 SH2 出土遺物実測図⑥ (1/2)



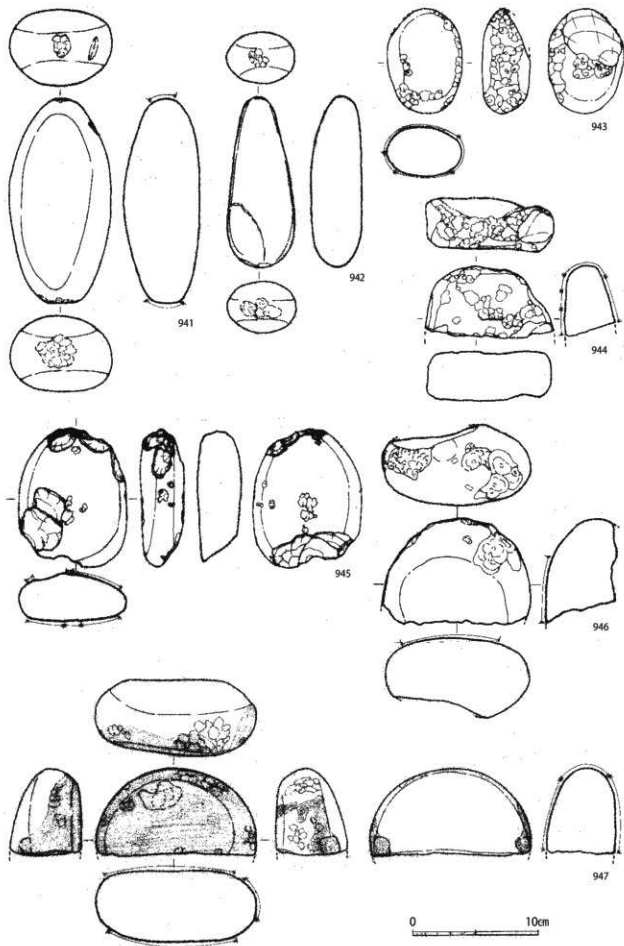
第 255 圖 SH2 出土遺物実測図⑦ (1/2)



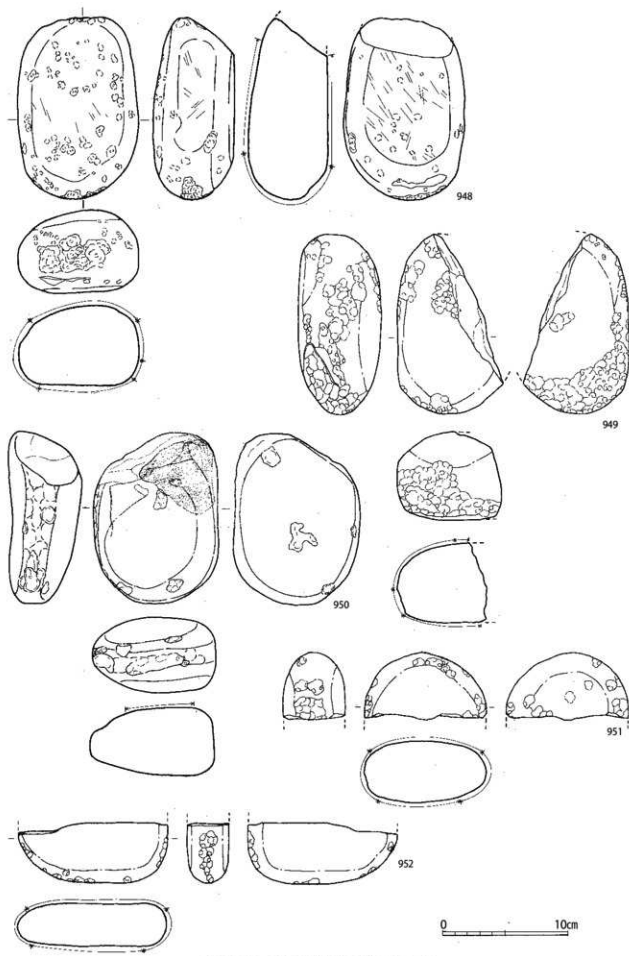
第 256 圖 SH2 出土遺物実測図⑧ (1/3)



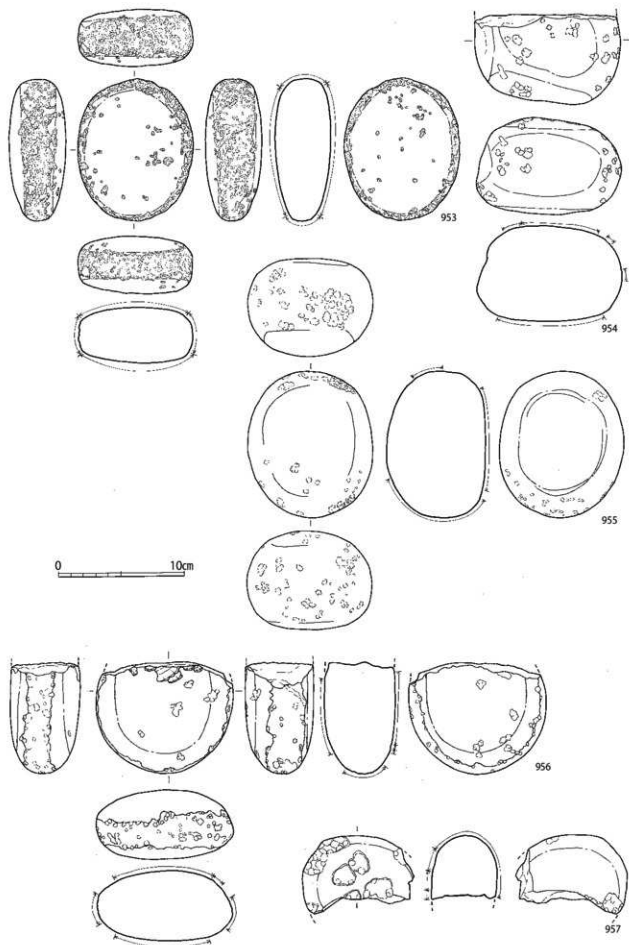
第 257 图 SH2 出土物实测图⑨ (1/3)



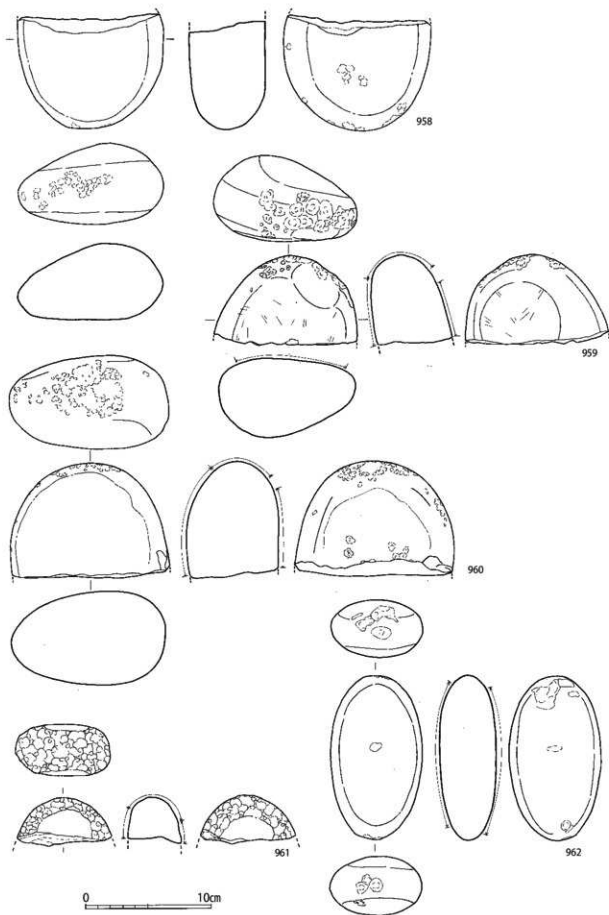
第 258 圖 SH2 出土遺物夾測圖⑩ (1/3)



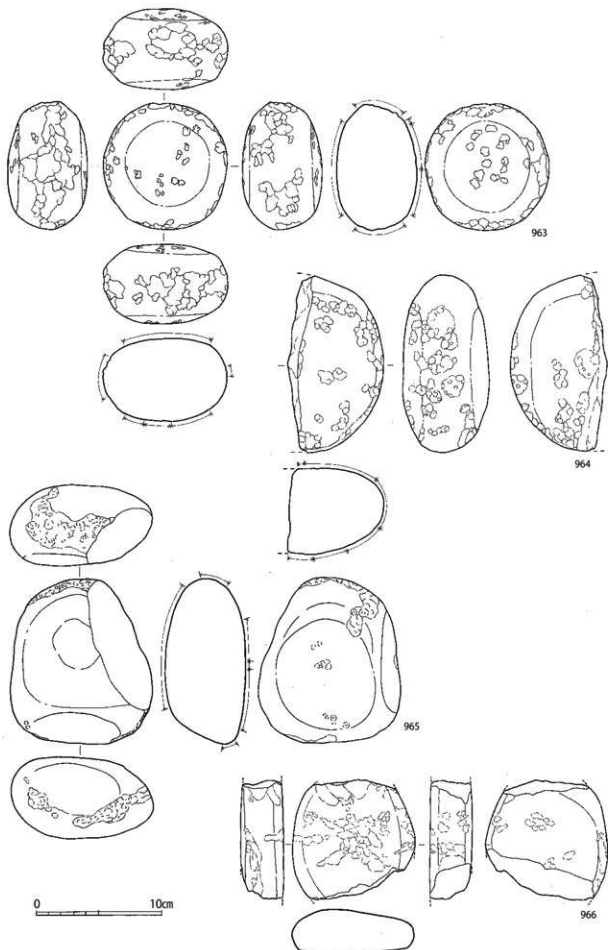
第 259 圖 SH2 出土遺物実測図① (1/3)



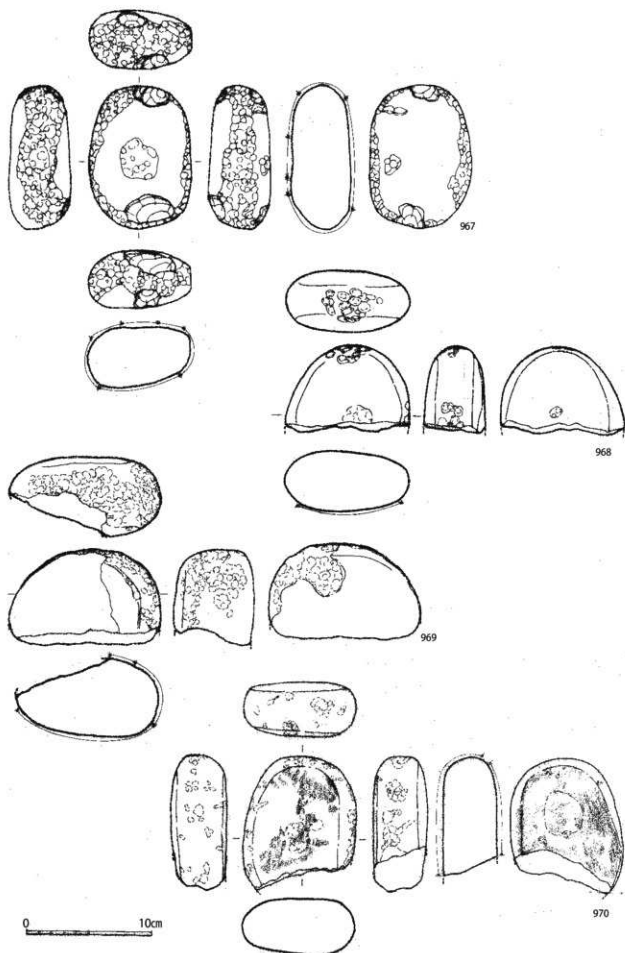
第 260 圖 SH2 出土遺物実測図⑫ (1/3)



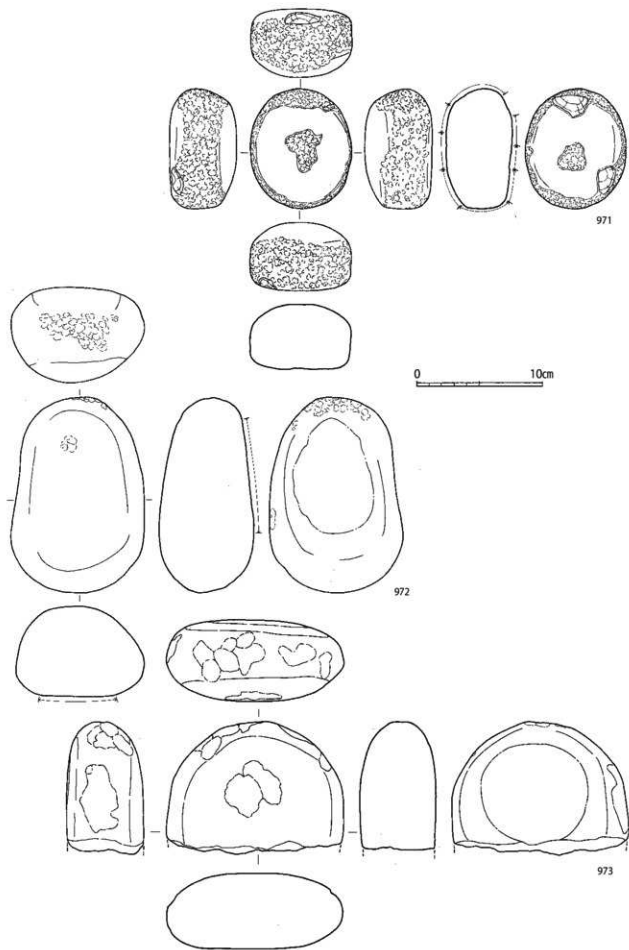
第261圖 SH2出土遺物実測図⑬ (1/3)



第 262 圖 SH2 出土遺物実測図⑭ (1/3)



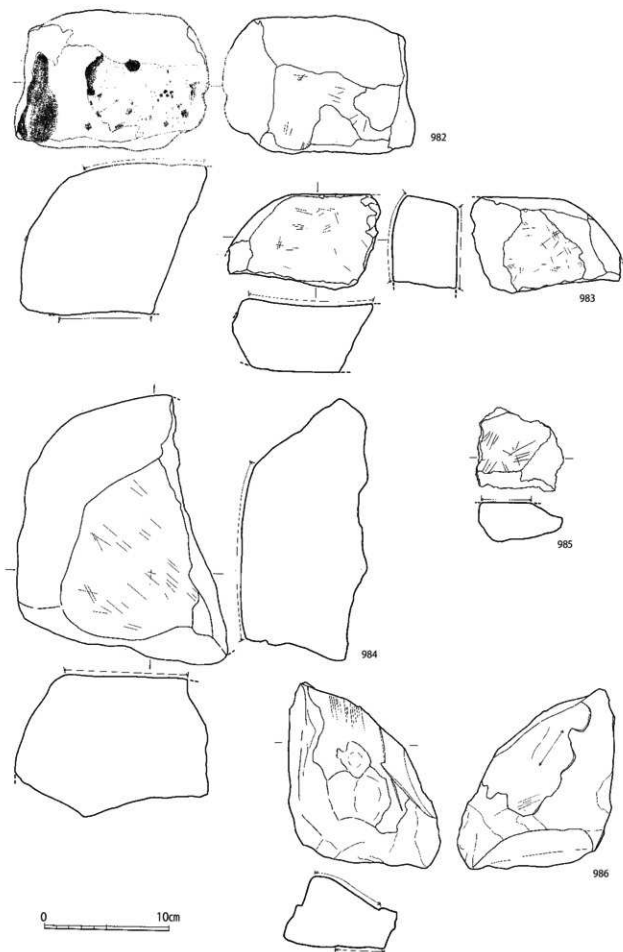
第 263 圖 SH2 出土遺物実測図⑤ (1/3)



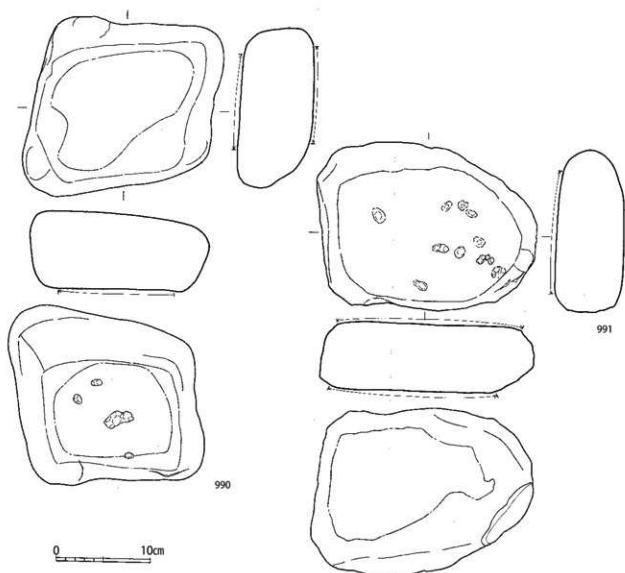
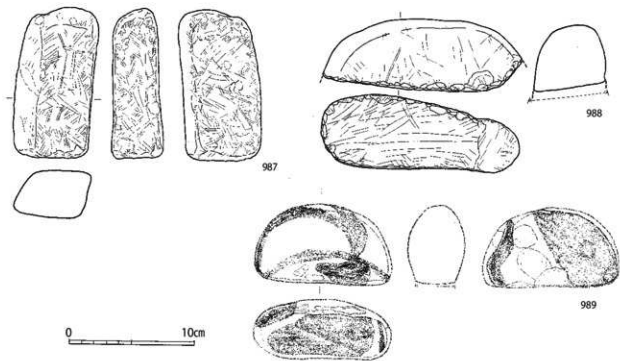
第 264 圖 SH2 出土遺物実測図⑯ (1/3)



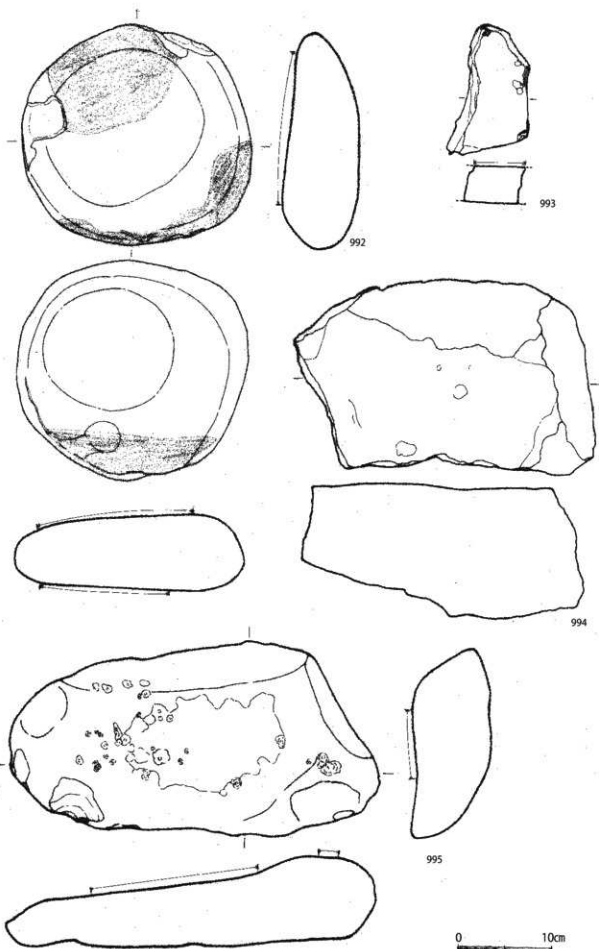
第 265 圖 SH2 出土遺物実測図⑬ (1/3)



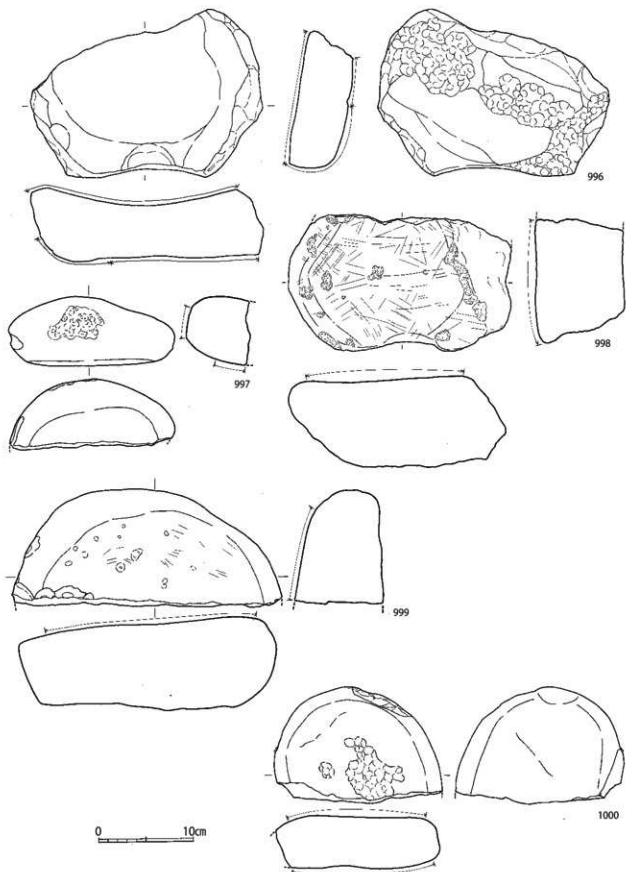
第 266 图 SH2 出土遺物実測図⑩ (1/3)



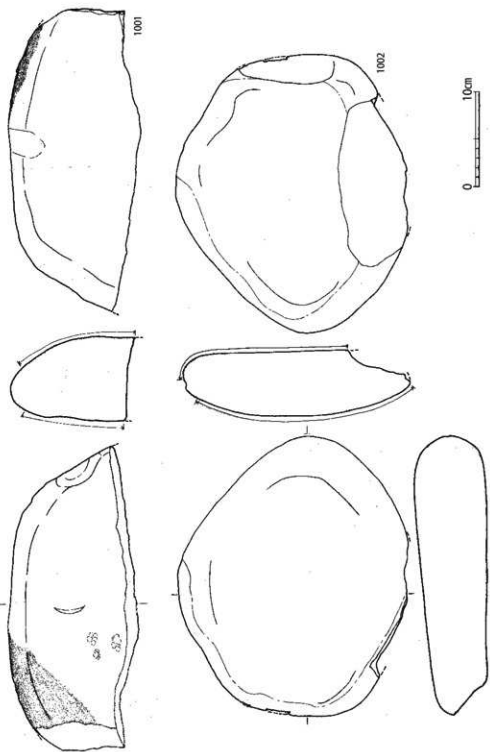
第 267 图 SH2 出土遺物実測図⑩ (1/3 · 1/4)



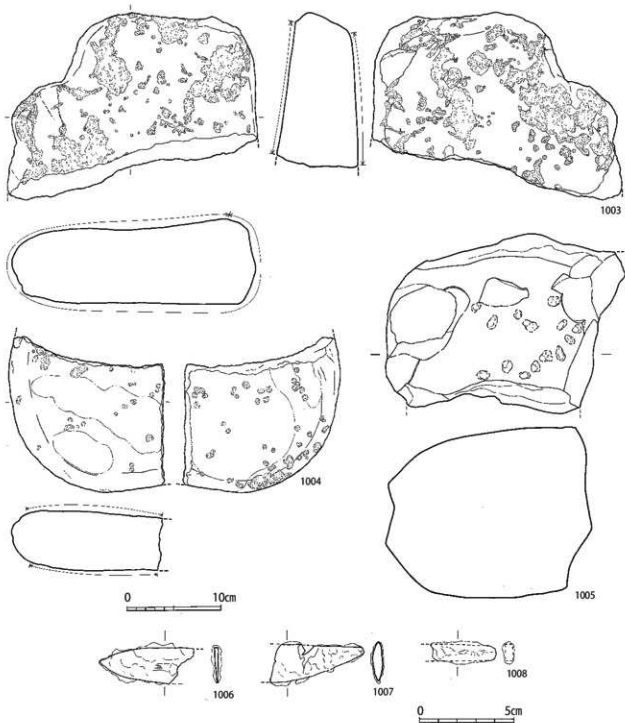
第 268 图 SH2 出土遺物実測図② (1/4)



第 269 图 SH2 出土遺物実測図② (1/4)



第 270 图 SH2 出土遺物実測図② (1/4)



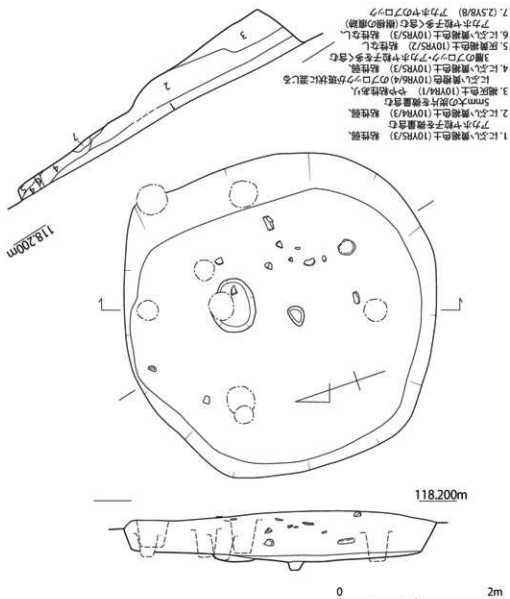
第 271 图 SH2 出土遺物実測図㉓ (1/4・1/2)

SH 3 (第272図)

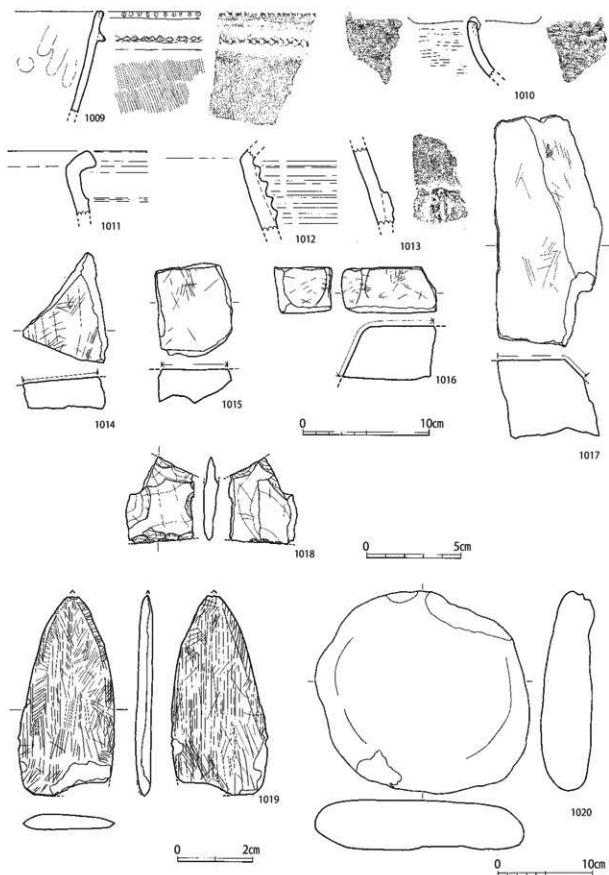
1区の北東隅部、M-7グリッドで検出した竪穴建物である。平面形状は丸みのある方形を呈し、長辺4.21m、短辺4.15m、深さ0.62mを測る。埋土は7層に分層され、大部分を占める1・2・4層はふい黄褐色を呈する。遺構埋土としては上田原東遺跡ではあまり見られない土色であるが、遺構を掘り込む基盤土に由来するものであろうか。床面では中央で小ピット1基と、その北側で小土坑状の浅い掘り込みを検出しているが、明確な支柱穴等は確認できなかった。遺物は弥生土器や石器の他に、白磁や青磁といった中世の遺物が若干出土しているが、いずれも細片であり、中世の遺物は上からの混入である。主体となる土器は弥生土器で、遺構の年代は後期初め頃に位置付けられよう。

SH 3出土遺物(第273図)

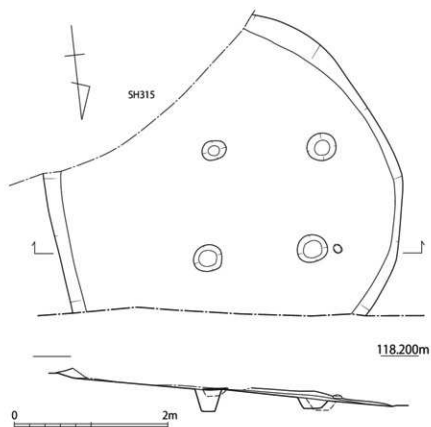
1009～1013は弥生土器である。1009は甕で、外面口縁部のやや下に1条の刻目凸帯を巡らせ、口縁部の外端部に刻みを施す。中期の下城式に比定される。1010は口縁部が内傾するもので甕であろうか。口縁部に突起が付く。1011～1013はいわゆる粗製甕である。1011は口縁部片で、肩部に1条の凸帯が巡る。1012は頸部～肩部にかけ



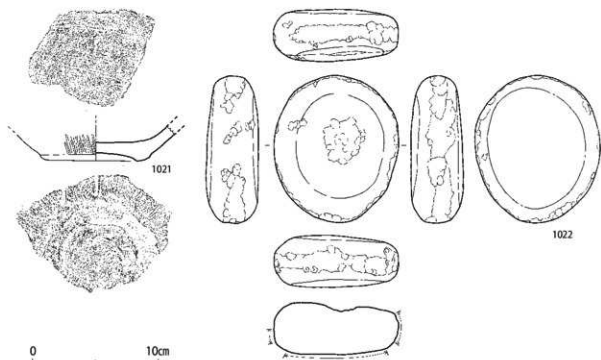
第 272 図 SH3 実測図 (1/50)



第273图 SH3出土遺物実測図 (1/3·1/2·1/1·1/4)



第 274 图 SH5 实测图 (1/50)



第 275 图 SH5 出土遺物实测图 (1/3)

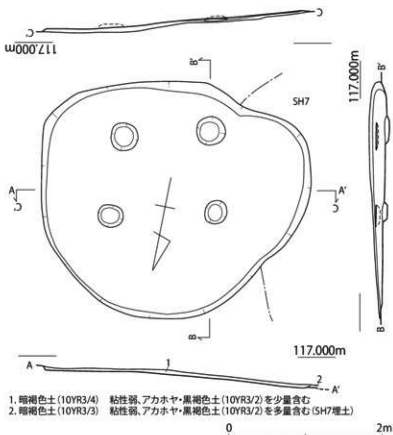
て多条の平行凸帯を横位に巡らせる。1013は肩部の破片で、横位の区画凸帯から縦位の凸帯が垂下する。1014～1020は石器である。1014～1017は砥石で、いずれも上面を中心に使用面とし、擦痕が認められる。石材は1014は泥岩、1015～1017は砂岩である。1018は剥片石器で、下辺に刃部の調整剥離が認められることから横刃型石器か。石材は千枚岩である。1019は黒色粘板岩を素材とする磨製石鏃で、表面には顕著な擦痕が認められる。先端部と基部の一端が欠損するがほぼ完形である。1020は砂岩を素材とする石皿で、上面が使用面で平滑になっている。

SH 5 (第274図)

3区南東側の張り出し部分、L・7・L・8・M・7グリッドで検出した竪穴建物で、南側は弥生時代の竪穴建物SH315に切られている。平面形状は丸みのある方形を呈し、長辺4.68m、短辺4.26m以上、深さは比高で0.56mを測るが、これは地形によるもので実際の深さは数cm～10cm程しかない。上部をいくらか削平されていると思われるが床面までは非常に浅い。床面は地形に沿って東から西へ緩やかに傾斜している。床面では中心から少しずれた位置で4本の柱穴を検出しており、これが主柱穴になる可能性が高い。遺物は縄文土器や土師器、石器が混在しているが、出土量は少ない。遺物の時期比定ができる遺物に乏しいが、弥生時代の竪穴建物SH315に切られることから弥生時代以前で、遺構埋土の色相が縄文時代のものとは異なることから弥生時代の遺構であると判断する。

SH 5 出土遺物 (第275図)

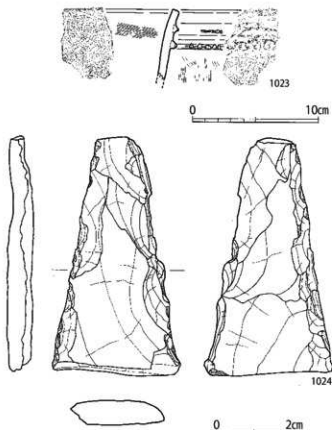
1021は縄文土器の深鉢の底部である。底面は周縁部が接地し、中心部が凹んだ上げ底となる。1022は砂岩の円礫を素材とする磨石・叩石で、上面・下面の広い面を磨面とし、上面及び側縁部には敲打痕が認められる。特に上面の中心部の痕跡は顕著で、明瞭な凹みが残る。



第 276 図 SH6 実測図 (1/50)

SH 6 (第276図)

3区の南端部の中央、M・6・N・6グリッドで検出した竪穴建物である。西側に隣接するSH 7とは一部が重複しており、埋土が両者非常に近似していたため平面での両者の切り合い関係の把握は困難であったが、SH 6とSH 7を通した土層断面の観察によって、SH 6がSH 7を切っていることを確認した。平面形状は丸みのある不整形形で、長辺3.58m、短辺3.14m、深さは比高で0.34mを測るが、これは地形の傾斜によるもので、実際には数cmほどしかない。埋土はアカホヤや黒褐色土ブロックが少量混じる暗褐色土である。床面までの掘り込みは非常に浅い。床面は南東から北西へ緩やかに傾斜しており、床面では4本の柱穴を検出しており、これが主柱穴になるとみられるいずれも掘り込みは浅い。遺物の出土は少ないが、弥生土器、土師器、磨製石鐮の未製品等が出土している。下城式塼が出土しており、弥生時代中期の竪穴建物である可能性がある。



第 277 図 SH6 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

SH 6 出土遺物 (第277図)

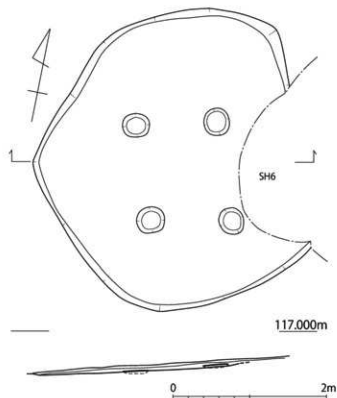
1023は弥生土器の甕である。外面口縁下に2条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式に比定される。1024は黒色粘板岩を素材とし、側縁に調整刻線を加えて縦長の二等辺三角形に整形している。磨製石鐮の未製品で、研磨痕がみられないことから整形段階のものである。

SH 7 (第278図)

3区の南端部の中央、M・6・N・6グリッドで検出した竪穴建物である。東側の一端は弥生時代の竪穴建物SH 6と重複しており、SH 6がSH 7を切っている。平面形状は丸みのある五角形状をした不整形形で、長辺4.05m、短辺3.53m以上、深さは比高で0.27mを測るが、これは地形



第 279 図 SH7 出土遺物実測図 (1/3)



第 278 図 SH7 実測図 (1/50)

によるもので実際の深さは数cm程度である。埋土はSH 6と同じアカホヤ風化土や黒褐色土ブロックの混じる暗褐色土であるが、SH 7はアカホヤや黒褐色土ブロックの混じりが多い。SH 6と同様に床面までの掘り込みは浅い。床面は南東から北西にかけて緩やかに傾斜しており、床面では4本の柱穴を検出しており、これが主柱穴になるとみられるが、いずれも掘り込みは浅い。遺物は縄文土器等ごく少量出土しているにすぎない、遺物の出土が少なく、遺構の時期否定は困難であるが、SH 6に切られることから弥生時代中期以前で、埋土の色相が縄文時代の遺構とは異なるため、弥生時代の範囲で収まる可能性が高い。

SH 7出土遺物(第279図)

1025は縄文土器の浅鉢である。口縁部は内傾し端部がわずかに外反する、逆「く」字口縁を呈するもので、晩期の終末に位置付けられる。

SH10(第280・281図)

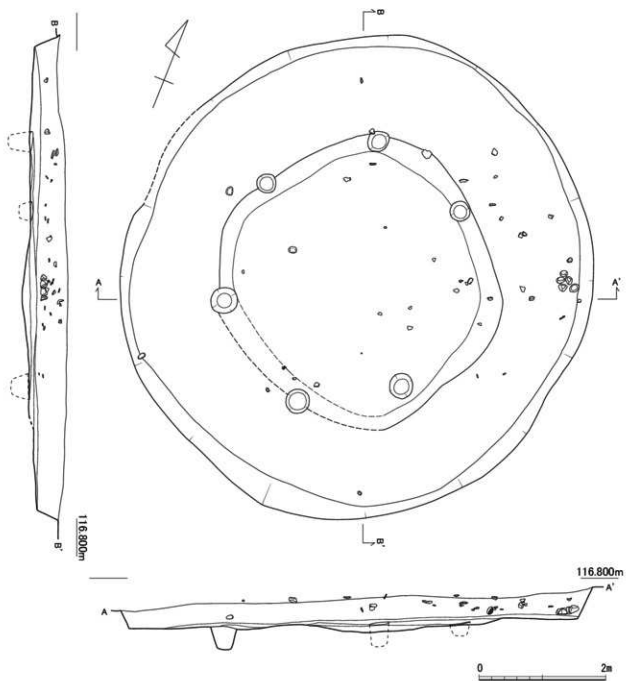
3区の中央部、K・5・K 6グリッドで検出した竪穴建物である。多くの遺構と重複関係にあり、北は竪穴建物SH28を、東は竪穴建物SH367を、南は竪穴建物SH25を、南西は竪穴建物SH268をそれぞれ切り、西は土坑SK269に切られている。平面形状は円形を呈し、長径7.84m、短径7.52m、深さ0.72mを測る。埋土は8層に分層され、1・2層の上層と、3層以下の下層に分けられる。2層は下半部を中心に焼土や炭化物のまとまる箇所がみられ、中には炭化材とみられるものもあった(第281図)。遺物はこの焼土や炭化物のまとまりより上位から多く出土しており、床面上からの出土は少ない。そのため、家屋の焼失によって廃絶したのではなく、廃絶の際に必要な物品は持ち出したうえで、不要な廃材等を火にかけて処分したものとみられる。

竪穴内部は2段掘りになっており、壁から1.3～1.6mほどの幅でテラス状の段が付き、中心部分は長辺4.26m程度、短辺4.22mの隅丸形状に一段深く掘り込んでいるが、掘り込み部の壁の立ち上がりはなだらかで浅い皿状を呈する。深さは0.1～0.2m程度である。この深掘り部の壁に沿うように、6基の主柱穴が巡っている。主柱穴同士の距離は1.8～2.0m程で並んでいるが、東側では2.6mほど間隔が空いている。遺物は縄文土器、弥生土器、半円形土製品、磨製石鏃、削器、二次加工剥片、打製石斧、砥石、石錘、流紋岩原石、勾玉、鉄製品が出土している。磨製石鏃は製品とともに未製品が出土しており、磨製石鏃の製作が行われていた可能性が高い。遺構の年代は、弥生時代後期初頭頃に比定する。

SH10出土遺物(第282～284図)

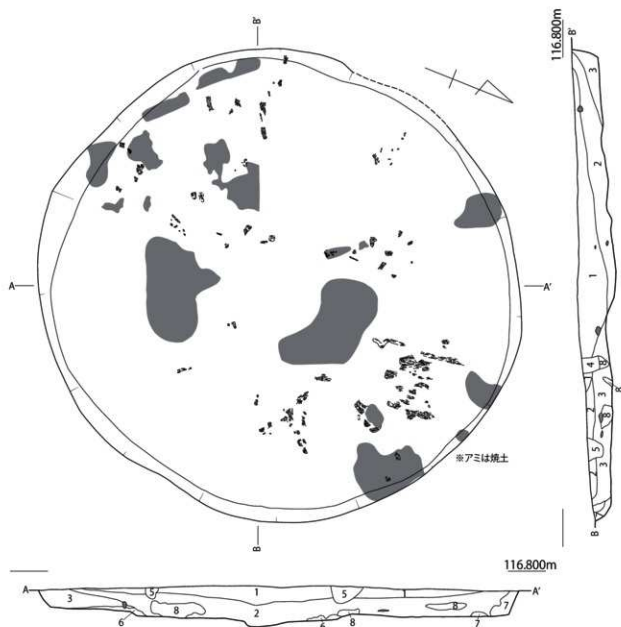
1026～1033は縄文土器である。1026は口縁部を欠くが、口縁部が屈曲し外面に横位の区画沈線を実施するもので、後期中葉の太郎迫式に比定される。1027～1030は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。1031は深鉢の胴部屈曲部で、内面に種子状圧痕が認められるが、分析の結果、種子は不詳であった。1032は深鉢の底部で、底面周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。1033は晩期後葉の浅鉢で、口縁は外反し口縁部を丸く肥厚する。1034～1044は弥生土器である。1034は内傾する口縁で外面に2条の刻目凸帯を巡らせる。前期の壺の可能性が高い。1035・1036は厚手の器壁を有する粗製壺で、外面に横位の多条凹線を施す。1037・1038は壺で、1037は頸部に横位の多条沈線と、そこから垂下する多条沈線を、口縁部には刺突を施す。これらは中期の下城式壺に伴うものである。1039・1040は口縁が強く外反し、端部を肥厚・拡張する壺で、口縁部外面に鋸歯状の刻みと、1040は上端面に連続する浮文を貼り付ける。1041・1042は胴部中位に横位の多条凸帯を巡らせる壺で、中期に位置付けられる。1043は壺の胴部で、胴部が球状に膨らむ。1044は鉢である。

1045～1061は石器である。1045は磨製石鏃で、表面に顕著な研磨痕を残し、基部は凹む。石材は黒色粘板岩である。1046～1050は磨製石鏃の未製品で、1046は縦長の素材の周縁に調整剥離を施し、表面に研磨痕をわずかに残す。研磨工程段階の未製品である。1047～1050は素材剥片の周縁に調整剥離を加えたもので、整形段階の未製品とみられる。石材は1048が結晶片岩で、他は黒色粘板岩である。1051はチャートの剥片の1辺に刃部調整を



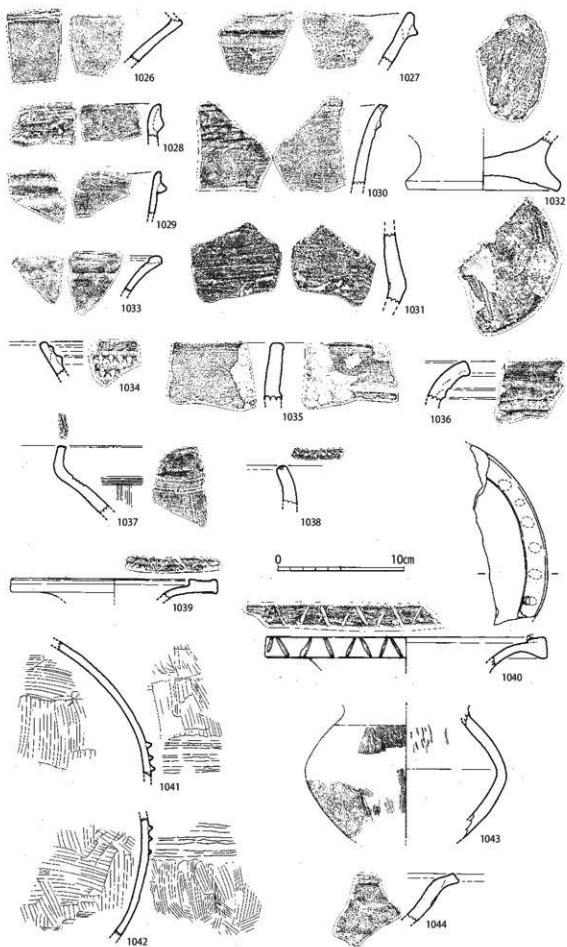
第 280 図 SH10 実測図 (1/60)

加えたもので、スクレイパーとみられる。1052はチャートの剥片に微細な剥離痕を有する二次加工剥片である。1053～1056は打製石斧で、1054は粘板岩、他は安山岩を素材とする。1057は流紋岩を素材とした叩石で、上面及び右側面の稜部に顕著な敲打痕を残す。1058は砂岩製の砥石で、上面を使用面とする。1059は流紋岩の円礫を素材とし、上部に擦痕が認められる。片手におさまるサイズで一端を集中的に使用しており、持ち砥石の可能性が高い。磨製石鐮の研磨に用いたものであろう。1060は流紋岩の原石である。流紋岩は大野川流域で産出し、旧石器時代から縄文時代草創期にかけて石器石材として用いられているが、本例は石器石材というよりは1059のように円礫として用いるために持ち込まれた可能性がある。1061は安山岩の円礫を素材とした打欠石鐮で、長軸の両端を打ち

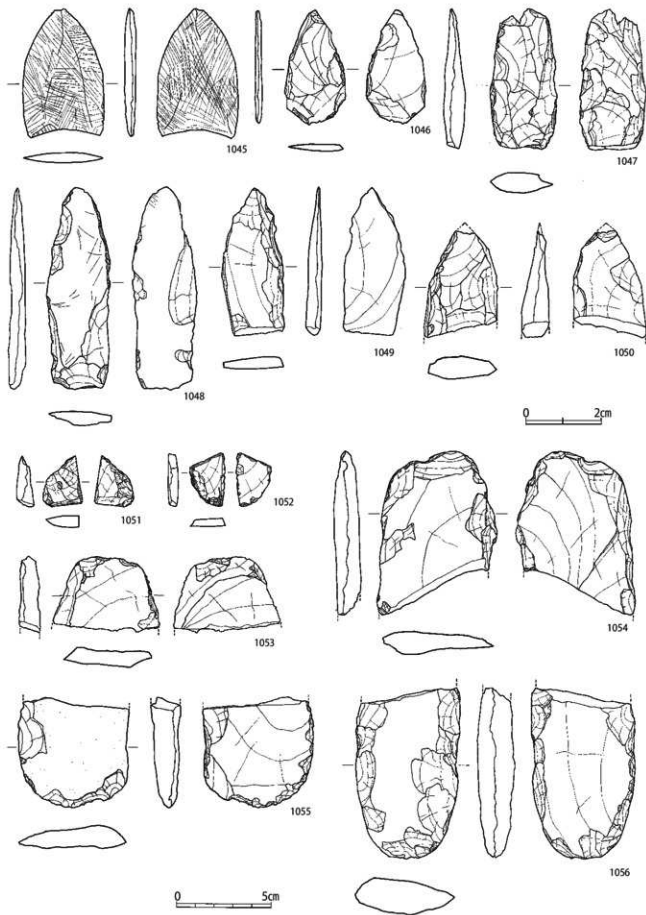


- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土粒を殆ど含まない、炭微量含む
 - 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小ブロック・焼土・炭少量含む
 - 3. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、黄褐色土細粒、暗褐色土ブロック少量含む
 - 4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土細粒殆ど含まない
 - 5. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、焼土少量含む
 - 6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、暗褐色土 (10YR3/4) の小ブロック少量含む
 - 7. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土少量含む (崩落土)
 - 8. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱、黄褐色土がブロック状に混じる (3層が埋まる過程で混じった層)
- 炭・炭化部材

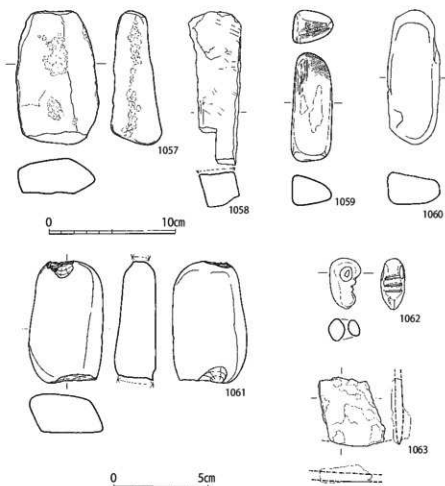
第 281 図 SH10 焼土・炭化材出土状況実測図 (1/60)



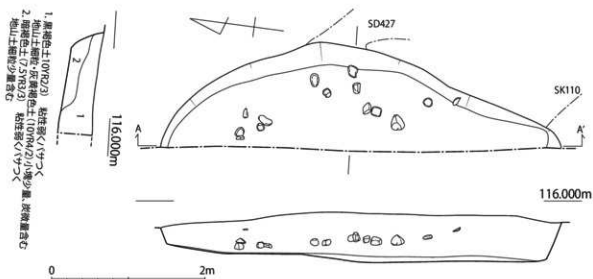
第 282 圖 SH10 出土遺物実測図① (1/3)



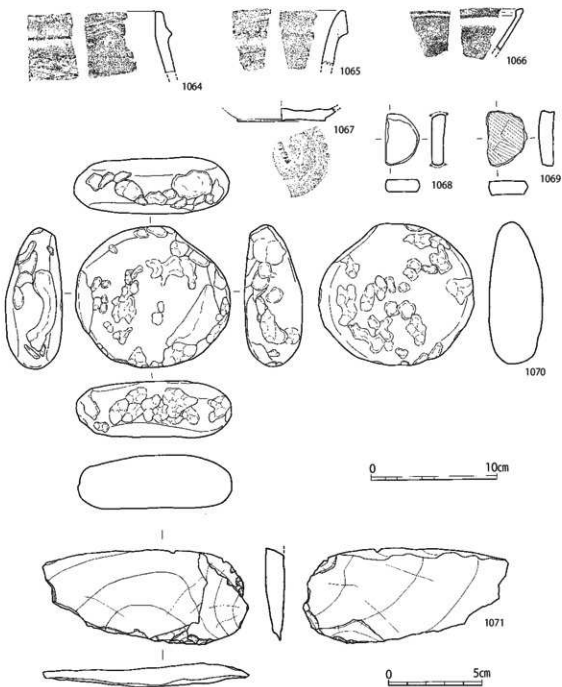
第 283 图 SH10 出土遺物実測図② (1/1・1/2)



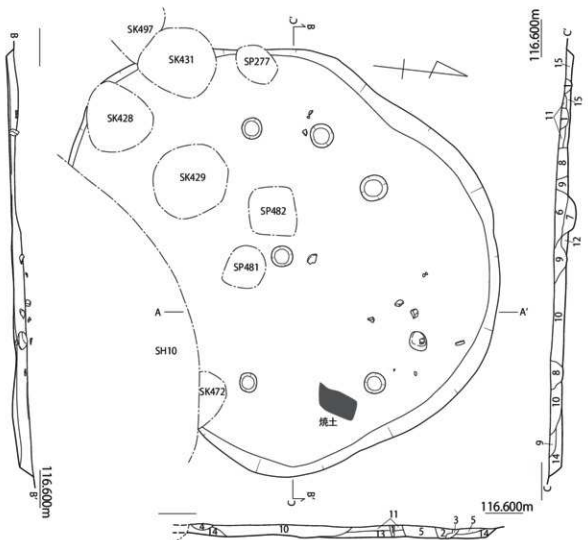
第 284 图 SH10 出土遺物実測図③ (1/2)



第 285 图 SH12 実測図 (1/50)

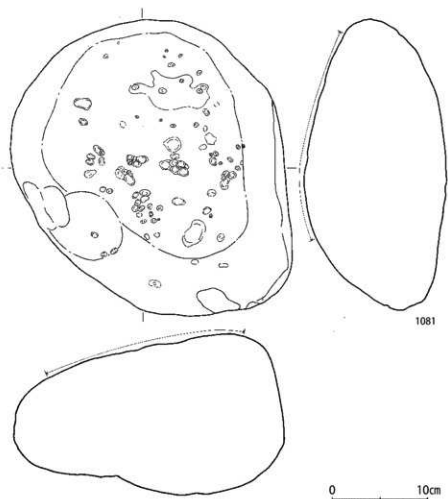
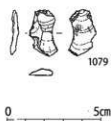
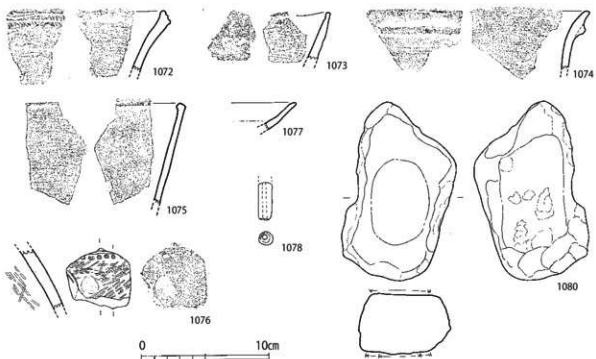


第 286 图 SH12 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



- | | | | |
|-------------------|------------------------|--------------------|------------------------|
| 1. 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性弱 | 9. 暗褐色土 (10YR3/3) | 粘性弱、黄褐色土微量含む |
| 2. 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性弱 | 10. 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性弱、黄褐色土少量・アカホヤ風化土微量含む |
| 3. 暗褐色土 (10YR3/3) | 粘性弱 | 11. 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性弱、黄褐色土少量含む |
| 4. 暗褐色土 (10YR3/3) | 粘性弱、褐色土を少量含む | 12. 焼土層 | |
| 5. 暗褐色土 (10YR3/3) | 粘性弱、褐色土・アカホヤ風化土微量含む | 13. 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性弱、黄褐色土ブロック混じる |
| 6. 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性弱 | 14. 暗褐色土 (10YR3/3) | 粘性弱、褐色土少量含む |
| 7. 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性弱、黄褐色土微量含む (SK482埋土) | 15. 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性弱、黄褐色土少量含む |
| 8. 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性弱、褐色土少量含む | | |
- 0 2m

第 287 図 SH28 実測図 (1/60)



第288图 SH28 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/4)

欠いて銅掛け部を作り出す。1062は滑石製の勾玉で、湾曲部に3条の刻みを入れる。1063は板状の鉄製品である。

SH12(第285図)

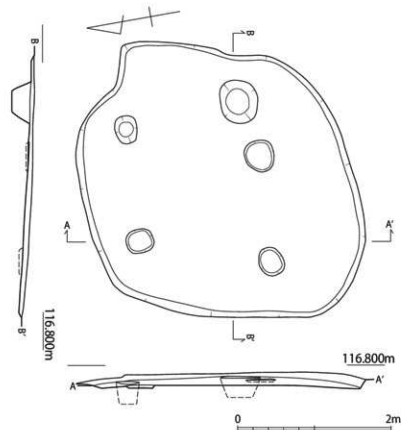
3区の中央西端部、K・4・L・4グリッドで検出した堅穴建物である。西側の大部分が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、検出した範囲で長径5.30m以上、短径1.41m以上、深さ0.63mを測る。堅穴の長さや深さから、方形ではなく円形の平面形状となる可能性が高い。床面で柱穴等の遺構は確認されなかった。床面上では10～20cm大の礫がややまとまって出土している。遺物は縄文土器、弥生土器、半円形土製品の他、混入した古代の土師器が出土している。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、遺構の形状から弥生時代のもので、後期初頭に位置付けられる可能性が高い。

SH12出土遺物(第286図)

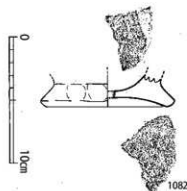
1064～1066は縄文土器である。1064・1065は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。1066は浅鉢で、口縁部がわずかに上方に折れ、内外面に1条の沈線を施す。後期後葉に位置付けられる。1067は古代の土師器坏で、底面に螺旋状のへら切り離し痕が残る。1068・1069は土器片を転用し半円形状に加工した土製品である。1070は砂岩の円礫を素材とした甲石で、上下両面及び側縁部に顕著な敲打痕を残す。1071は安山岩の剥片の下辺に刃部調整剥離を加えた横刃型石器である。

SH28(第287図)

3区の中央部、J・5・J・6・K・5・K・6グリッドで検出した堅穴建物である。西は縄文時代の堅穴建物SH530を切り、南は弥生時代の堅穴建物SH10に切られている。また、南西部では多くの土坑が切り込んでいる。平面形状はやや歪な円形状を呈し、長径7.52m、短径6.08m、深さは比高で0.44mを測る。床面は平坦であるが、地形に沿って南



第289図 SH32実測図(1/50)

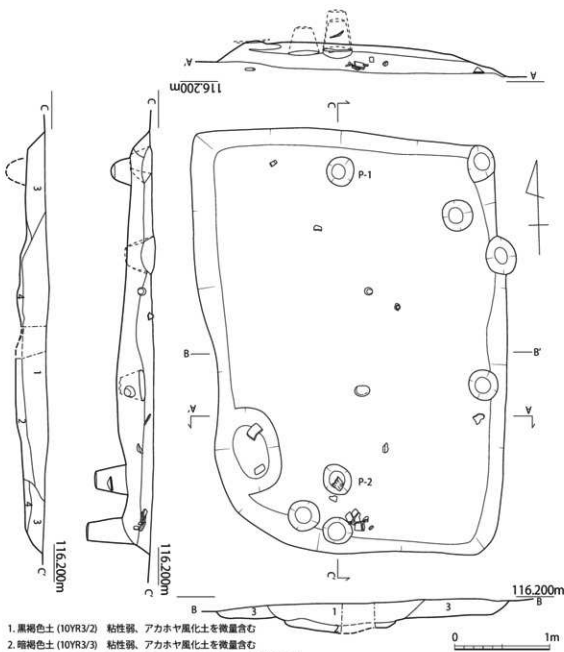


第290図
SH32出土遺物実測図(1/3)

東から北西へ傾斜している。床面では7基のピットを検出したが、支柱穴の配置は明確ではない。また1箇所で焼土のまとまりがみられた。遺物は縄文土器、弥生土器、土錘、甲石・磨石、石皿の他に、混入したとみられる土師器や中世の白磁が出土している。出土した土器や、SH10との切り合い関係から、弥生時代中期の遺構と判断する。

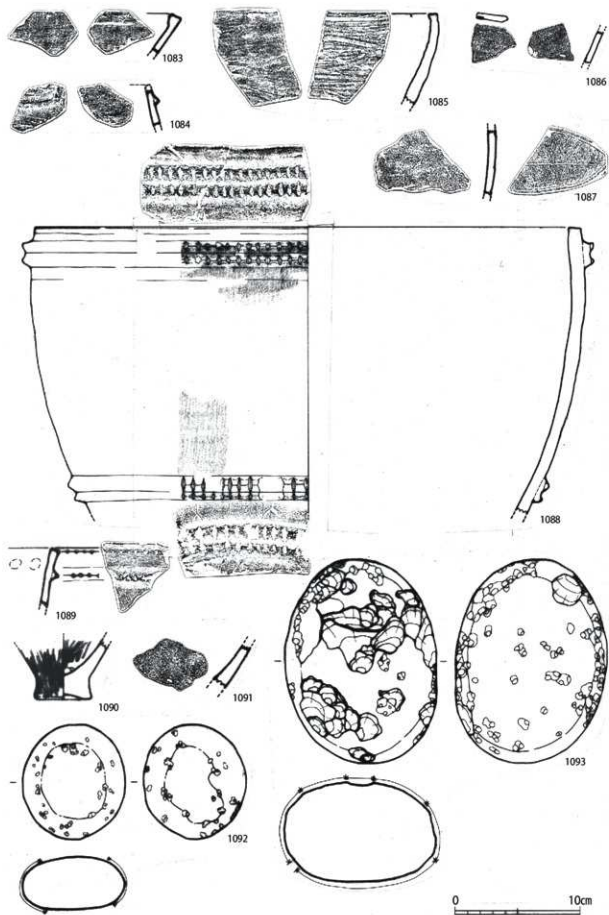
SH28出土遺物(第288図)

1072～1075は縄文土器である。1072は外反する口縁の端部が三角形に肥厚し、外面に2条の横位沈線と単節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。1073は波状口縁の深鉢で、内面口縁直下にわずかに沈線が認められる。後期中葉～後葉に位置付けられる。1074は深鉢で、口縁が強く外反し外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。晩期後葉の上管生B式に比定される。1075は浅鉢で、口縁部内面には段が付く。晩期に位置付けられる。1076は弥生土器の壺で、横位沈線の下に連続する円形竹管状刺突文を施す。中期の下城式に伴う壺とみられる。

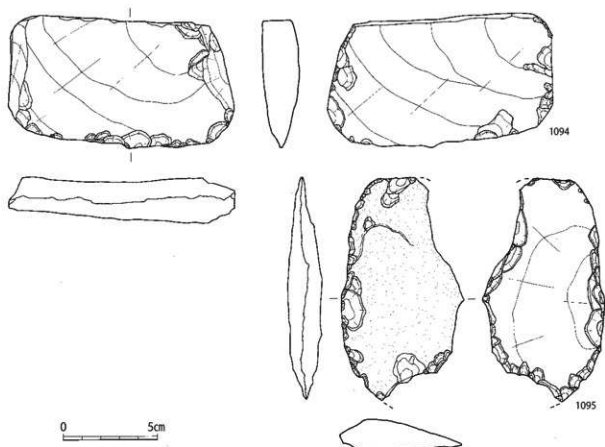


1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、アカホヤ風化土を微量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土を微量含む
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、褐色土 (10YR4/4) ブロックを微量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、褐色土 (10YR4/4) ブロックを微量含む

第 291 図 SH260 実測図 (1/40)



第 292 图 SH260 出土遺物実測図① (1/3)



第 293 図 SH260 出土遺物実測図② (1/2)

1077は中世の白磁皿で、混入品である。1078は素焼きの管状土錘で、上端部を欠く。1079は腰岳産と推定される漆黒色を呈する黒曜石の剥片で、下部に微細な剥離がみられる。1080は砂岩を素材とした磨石・叩石で、上面を磨面、下面を叩石としている。1081は安山岩の石皿である。上面が使用面で平滑化しており、無数の敲打痕が認められる。

SH32(第289図)

3区の南部中央、M-6グリッドで検出した竪穴建物である。歪な方形気味の平面形状を呈し、長辺3.57m、短辺3.55m、深さは比高で0.22mを測る。上部がかなり削平を受けているとみられ、掘り込みは10cm程度と浅い。SH 5～7等と同様の形態をとり、床面には真心から少しずれた位置に4基の浅い主柱穴が方形に並ぶ。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土しているが、その量は少ない。時期比定できる遺物に乏しいが、SH 5～7等との共通性から、弥生時代中期に位置付けられる可能性がある。

SH32出土遺物(第290図)

1082は弥生土器の甕の底部である。

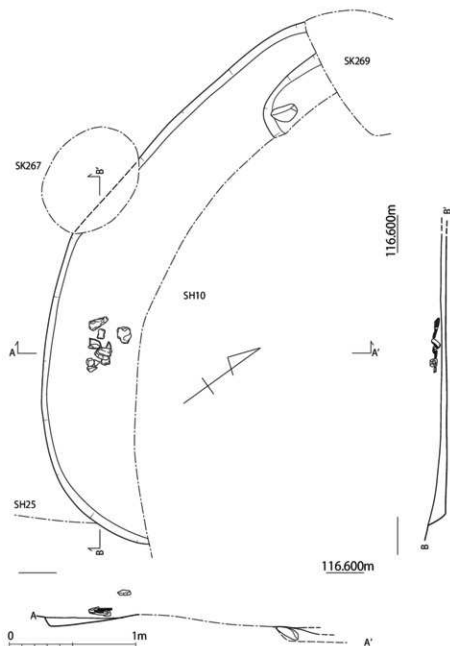
SH260(第291図)

3区の北部中央、I-5グリッドで検出した竪穴建物である。縄文時代の竪穴建物と多く重複しており、SH503を、東はSH276を、西はSH280をそれぞれ切っている。また、床面で縄文時代の貯蔵穴SK516を検出している。平面形状は南北に長い隅丸長方形形状を呈し、長辺4.47m、短辺3.21m、深さ0.40mを測る。埋土は4層に分層され、SH260の埋土である3・4層を切って、1・2層が掘り込む状況がみられることから、平面では確認できなかったが土坑の

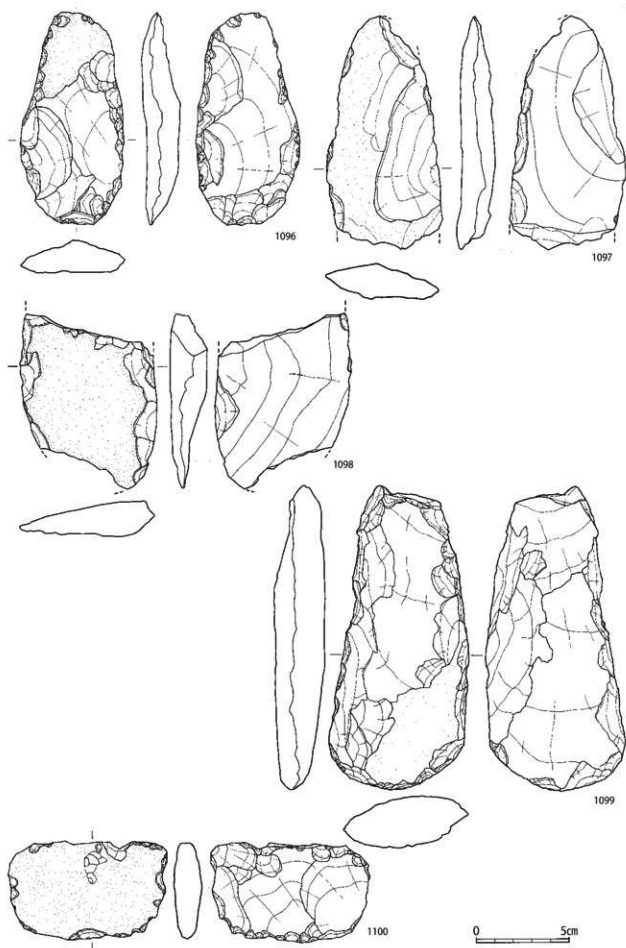
重複があったものとみられる。内部は壁面が斜めに立ち上がり、掘り込みはなだらかである。床面では南西隅の壁際に土坑が1基と8基のピットを検出している。このうち、南北両側の壁に近い位置に穿つ2基のピットが主柱穴である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、横刃型石器、磨石・叩石が出土している。中でも、南端部付近で口縁部と胴部に刻目凸帯をもつ甕がまとめて出土している。中期の下城式甕も少量出土しているが、遺構の時期は前期におさまる可能性がある。

SH260出土遺物(第292-293図)

1083～1086は縄文土器である。1083は浅鉢で、口縁部内面に沈線状の段が付く。1084は深鉢で、外面に1条の無刻目凸帯を施す特徴から晩期後葉の上菅生B式に比定される。しかし凸帯は口縁に平行ではなく右側が口縁部に向かってカーブしており、水平に口縁を一周するのではなく連弧状となる可能性がある。1085は無文の鉢で、内面に巻貝条痕を施す。1086は浅鉢の細片で、内面の下端部と上部破損面に種子状圧痕が認められる。分析の結果は



第 294 図 SH268 実測図 (1/30)

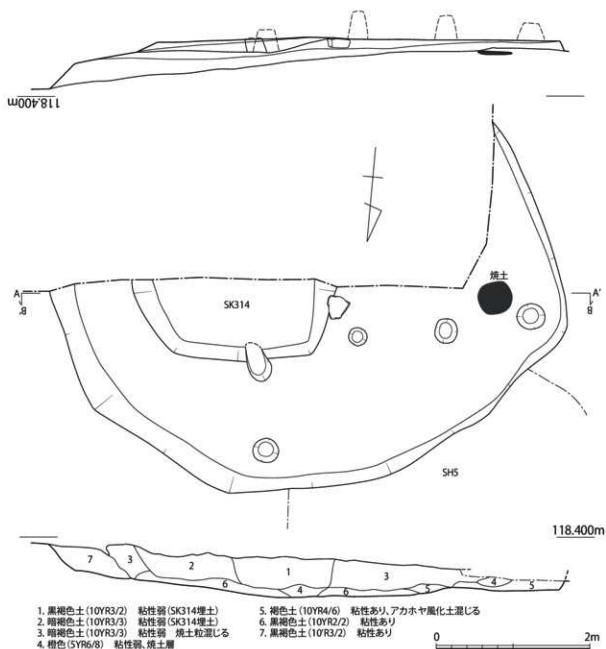


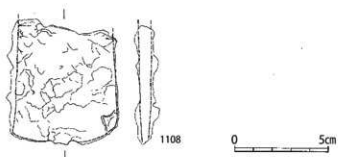
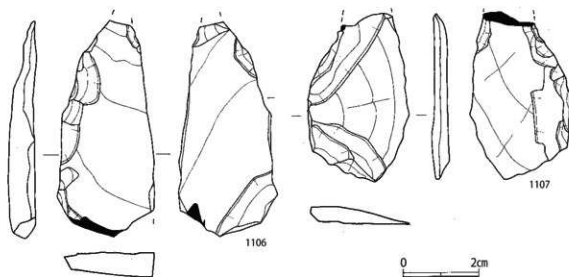
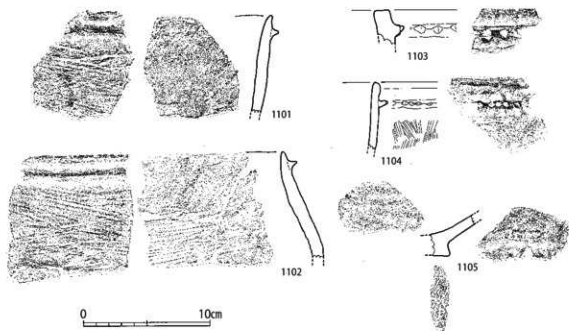
第 295 图 SH268 出土遺物実測図 (1/2)

不詳であった。1087は胴部破片で、外面に木の葉状とみられる細沈線を施す。木の葉状文を施す例は縄文土器、弥生土器ともにあり、縄文土器か弥生土器か判断が難しい。1088は弥生土器で、厚手の器壁を有し、口縁部直下と胴部下半に2連の刻目凸帯を巡らせる。前期に属するとみられるが、あまり例を見ない。1089は外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせ、口縁外端部に刻みを施す。中期の下城式甕である。1090は弥生土器甕の底部。1091は弥生土器の胴部破片で、内面に種子状圧痕が認められるが、分析の結果は不詳であった。1092・1093は安山岩の円礫を素材とする磨石・叩石類で、1092は側縁部を磨面、1093は上下両面を磨面とし、上面中央には叩きによる凹みが認められる。1094は横刃型石器で、凝灰岩の横長剥片を素材とし、下辺部に刃部調整を施す。1095は打製石斧で、上面に自然面を残す安山岩の横長剥片を素材とし、周縁部には調整剥離を施す。

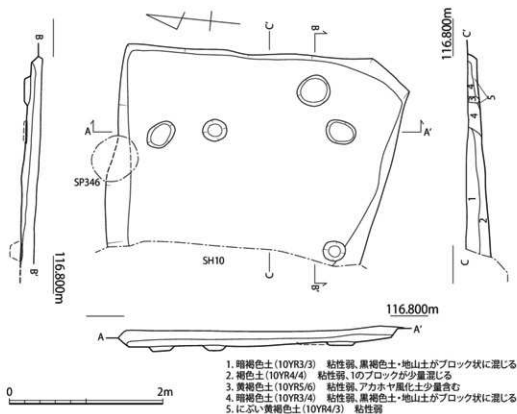
SH268 (第294図)

3区の中央部、K-5・K-6グリッドで検出した竪穴建物である。弥生時代の竪穴建物SH10に切られるため、検出

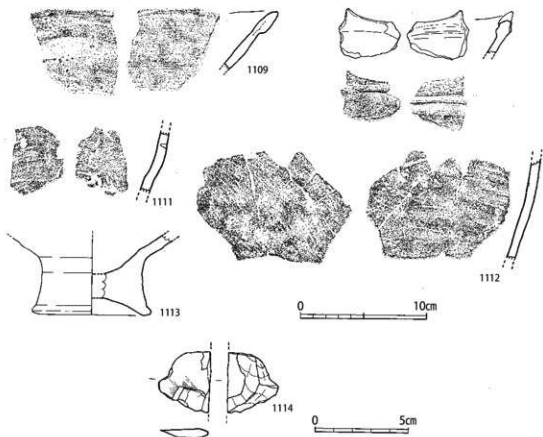




第 297 图 SH315 出土遺物実測図 (1/3 · 1/1 · 1/2)



第 298 図 SH367 実測図 (1/50)



第 299 図 SH367 出土遺物実測図 (1/30)

できたのは南西側の三日月状のごく一部である。平面形状は円形を呈するとみられ、長径3.96m以上、短径0.75m以上、深さ0.22mを測る。埋土は少量の黄褐色土やアカホヤの混じる黒褐色土で、SH10の埋土に焼土や炭を含む点で両者の違いを識別できた。床面で検出できた遺構はない。特筆されるものとして、検出範囲のほぼ中央において、4点の打製石斧と1点の横刃型石器を含む鏝12点が集積された状態で出土している。デボとみられるが、打製石斧は製品とともに欠損品や未成品を含んでおり、これらが集積された理由は不明である。その他に遺物はなく、遺構の時期比定は困難であるが、SH10との切り合い関係から後期初頭以前に位置付けられる。

SH268出土遺物(第295図)

1096～1099は打製石斧である。いずれも上面に自然面を残す剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。1097は調整剥離が粗く、未成品の可能性が高い。石材は1097が燧岩である他は安山岩である。1100は安山岩を素材とし、下辺を中心に刃部調整を施すもので、横刃型石器であろう。

SH315(第296図)

3区の南東部の東側への張出部、L・7・L・8・M・7・M・8グリッドで検出した竪穴建物である。北西部は弥生時代の竪穴建物SH5に切られ、中央部付近は土坑SK314に切られている。さらに南西部は調査区外に続くため、全体の形状や規模は明らかにできない。平面形状は円形とも方形ともとれる歪な形状を呈するが、遺構の規模を勘案すると隅丸方形となる可能性が高い。長辺6.40m、短辺2.80m以上、深さは比高で0.65mを測る。埋土はSK314を除いて5層に分層され、上層の3層と、4層以下の下層に分けられる。床面では4基のピットと、1箇所焼土のまとまりを検出したが、主柱穴の配置は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、磨製石鏝、鉄斧が出土しており、一部土器や瓦器の混入がみられた。遺構の時期は、弥生時代中期に比定される。

SH315出土遺物(第297図)

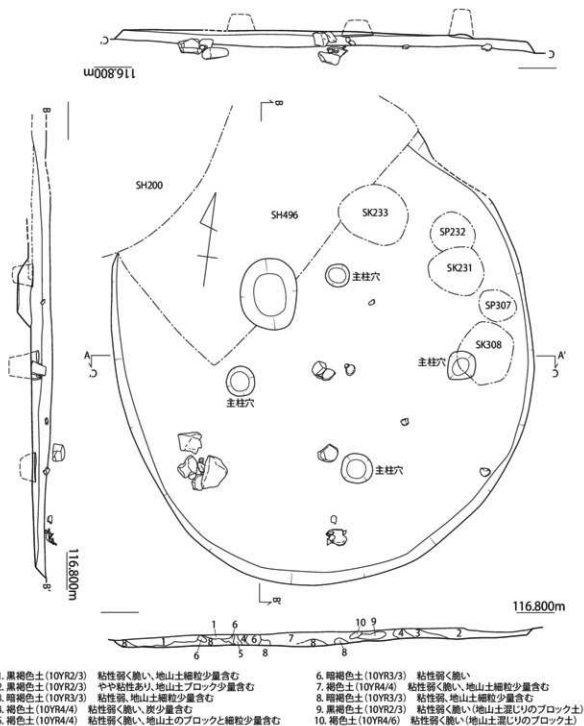
1101・1102は縄文土器である。外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、凸帯は高く突出する。晩期後葉の上菅生B式に比定される。1103～1105は弥生土器である。1103・1104は外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式甕に比定される。1105は平底の底部で、胴部の立ち上がりは緩い。1106・1107は磨製石鏝の未製品で、剥離痕を残す整形段階のものである。石材はいずれも黒色粘板岩を用いている。1108は板状鉄斧で、刃部は片刃である。

SH367(第298図)

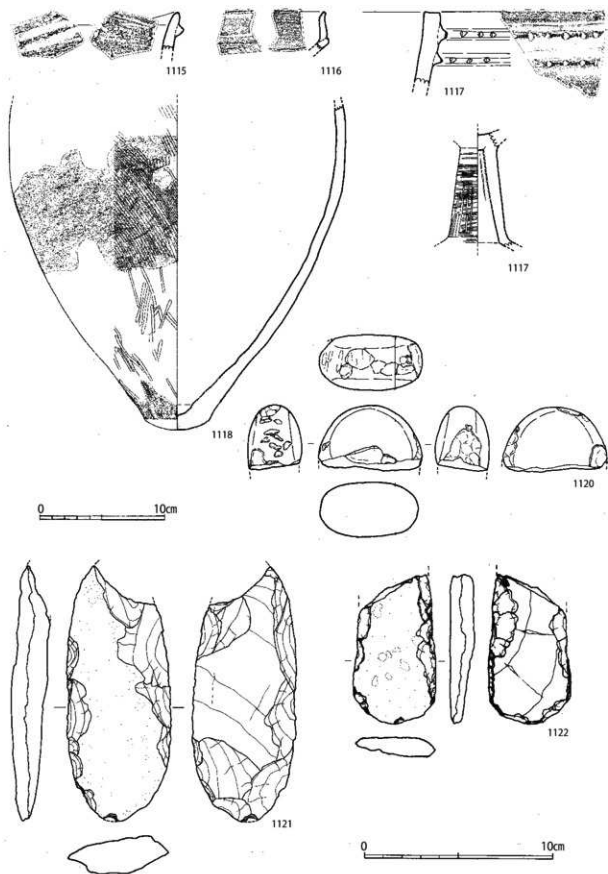
3区の中央東部、K-6グリッドで検出した竪穴建物である。西西部は弥生時代の竪穴建物SH10に切られるが、平面形状は方形を呈し、長辺3.81m、短辺2.69m以上、深さ0.28mを測る。壁の立ち上がりは緩く、床面は平坦である。床面では5基のピットを検出しているが、いずれも浅く主柱穴は明確ではない。建物規模からすると、主柱穴は2基で構成される可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土器、磨製石斧が出土している。遺構の時期は、SH10との切り合い関係から後期初頭以前に位置付けられる。

SH367出土遺物(第299図)

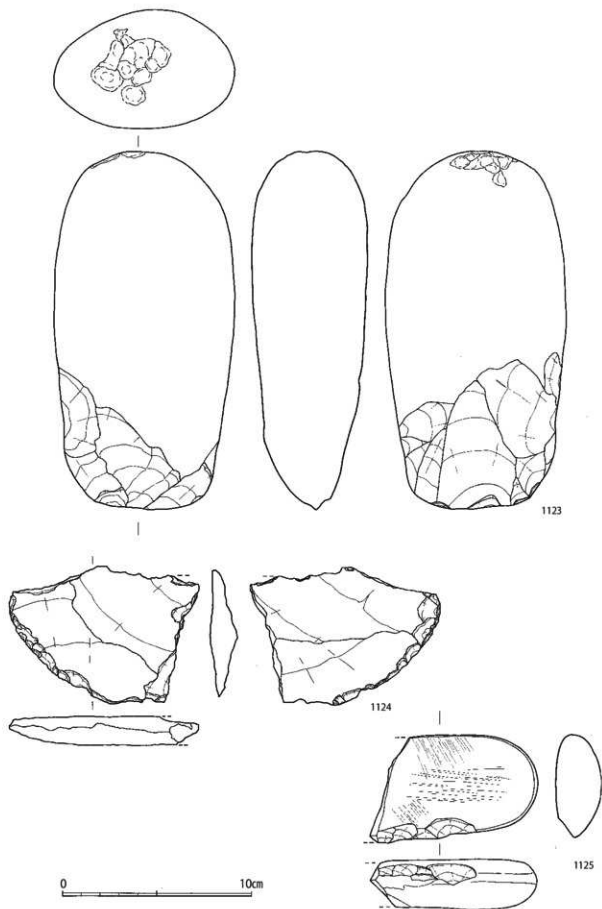
1109～1112は縄文土器である。1109は浅鉢で、口縁部が肥厚する。1110は口縁部に鱗状突起の付く浅鉢で、内外面に赤色顔料の痕跡が残る。晩期後葉の上菅生B式に伴うものである。1111・1112は胴部破片で、1111は外面に、1112は内面に種子状圧痕が認められる。分析の結果、1112は不詳であったが、1111はアズキ亜種の圧痕と判明した。詳細な土器型式の認定は困難であるが、大分県内での種子の分析はまだ少なく、貴重な事例であるといえる。1113は弥生土器甕の底部である。1114は磨製石斧の破片で、表面に研磨痕が残る。石材は千枚岩である。



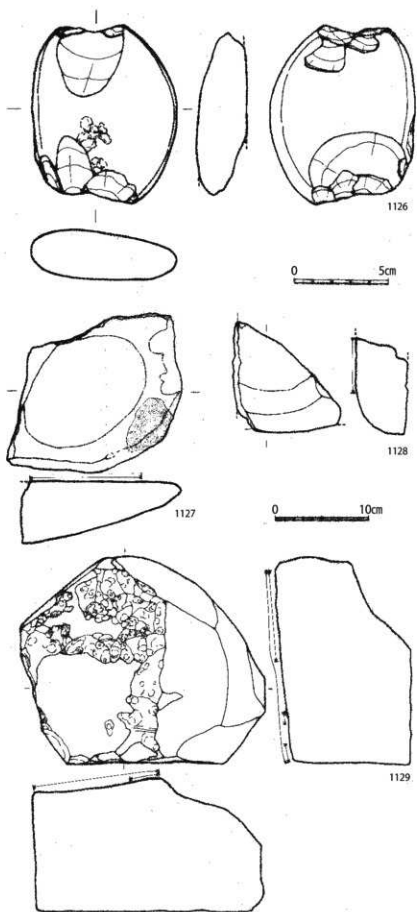
第 300 図 SH423 実測図 (1/50)



第301圖 SH423出土遺物実測図① (1/3・1/2)



第 302 图 SH423 出土遺物実測図② (1/2)



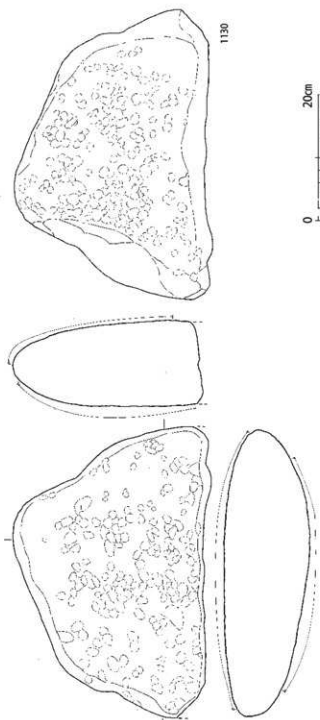
第 303 图 SH423 出土遺物実測図③ (1/2 · 1/4)

SH423(第300図)

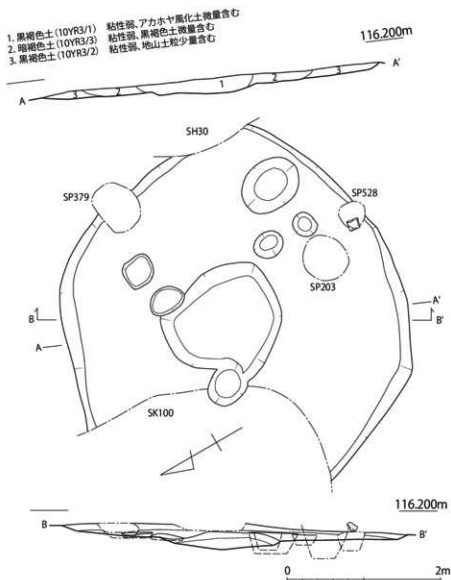
3区の中央北東寄り、J-6グリッドで検出した竪穴建物である。北側では床面で縄文時代の竪穴建物SH496を検出している。平面形状は略円形を呈し、長径6.00m以上、短径5.52m、深さ0.31mを測る。床面では中央付近で方形に並ぶ4基のピットを検出しており、これが支柱穴となる。中央部と南西両部付近からは、数点の礫が固まって出土している。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、石錘、石皿が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、建物形状や遺物から中期に位置づける。

SH423出土遺物(第301～304図)

1115・1116は縄文土器である。1115は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、口縁は波状となる。晩期後葉の上菅生B式に比定される。1116は口縁が逆「く」字状になる浅鉢で、胴部屈曲部の外面に沈線を施す。晩期終末に位置付けられる。1117・1118は弥生土器の甕で、1117は外面に2条の刻目凸帯を巡らせる。1118は胴～底部で、底部は小さい平底となる。1119は土師器の高坏で、脚部と坏部の接合は円盤充填による。古墳時代前期の遺物で混入品とみられる。1120～1130は石器である。1120は砂岩の円礫を用いた叩石で、側縁部に敲打痕が認められる。1121・1122は背面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とした打製石斧で、側縁部に調整剥離を施す。1123は細長い安山岩の下辺部に調整剥離を施すもので、打製石斧の未製品であろう。1124は安山岩の剥片の1辺に刃部調整を施すもので、横刃型石器とした。1125は砂岩の円礫の一端に打ち欠きを加えたもので礫器か。表面に擦痕がみられ、砥石あるいは磨石を転用した可能性がある。1126は砂岩製の打欠石錘で、円礫の長軸両端に打ち欠きを加えて縄掛け部を作り出す。1127～1130は石皿で、1127～1129は上面を、1130は上下両面を使用面とする。石材は1127・1130が砂岩、1128は片麻岩、1129は凝灰岩である。



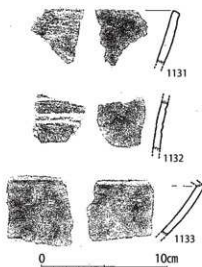
第304図 SH423出土遺物実測図④(1/4)



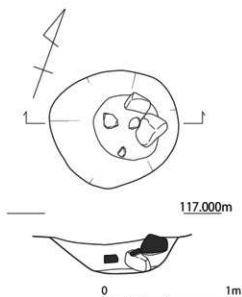
第305図 SH430 実測図 (1/50)

SH430 (第305図)

3区の中央西寄り、K・5・L・5グリッドで検出した竪穴建物である。北西は縄文時代の土坑SK100と重複し、南東側は古墳時代前期の竪穴建物SH30に切られている。SK100との関係は、本来であればSH423がSK100を切るはずだが、SK100を先に調査してしまっており前後関係を押さえられていない。平面形状は丸みのある方形状を呈し、長辺4.66m、短辺4.51m、深さ0.25mを測る。竪穴の中央に長さ1.55m、幅1.40mの土坑が掘り込むが、これが土層断面の1層に該当し、埋没後の掘り込みと分かる。2・3層はレンズ状の堆積となる。先の土坑以外に6基のピットを検出しているが、主柱穴の配置は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土しており混在した状況を示す。SH30との切り合いや埋土の色相から、遺構の時期は弥生時代～古墳時代前期以前となるが、弥生土器が出土していること、竪穴の構造が不明瞭であることから、弥生時代の遺構と考えたい。



第306図
SH430 出土遺物実測図 (1/3)



第 307 図 SK55 実測図 (1/30)

SH430出土遺物(第306図)

1131～1133は縄文土器である。1131は無文の深鉢、1132は外面に粗い沈線を施す深鉢、1133は胴部が屈曲する浅鉢で、概ね後期後葉～晩期に位置付けられる。

SK55(第307図)

3区の南部中央、M・6グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.04m、短径0.94m、深さ0.36mを測る。掘り込みはなだらかで皿状を呈し、内部からは遺物とともに5点の礫がまとまって出土している。遺物は縄文土器、弥生土器、磨石・叩石が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。弥生土器の出土から、弥生時代の遺構と判断する。

SK55出土遺物(第308図)

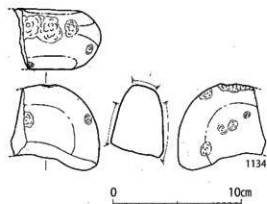
1134は叩石・磨石である。砂岩の円礫を素材とし、上下両面を磨面とし、上端側面に敲打痕が認められる。

SK106(第309図)

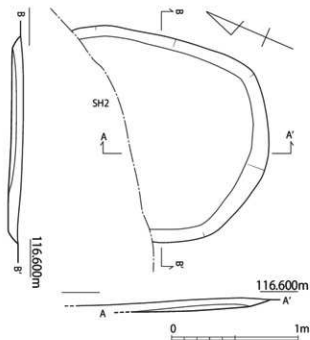
3区の南部中央、L・6・M・6グリッドで検出した土坑である。弥生時代の堅穴建物SH2によって北半部を大きく切られている。平面形状は楕円形を呈するとみられ、長径1.58m以上、短径1.14m以上、深さ0.15mを測る。床面は平坦で、壁の立ち上がりも緩い。遺物は弥生土器が出土しており、遺構の時期は中期に比定される。

SK106出土遺物(第310図)

1135は弥生土器の壺である。口縁部は強く外反し、端面には列点状の刺突を施す。口縁上面には「ハ」字状に隆帯を貼り付け、口縁部を拡張する。



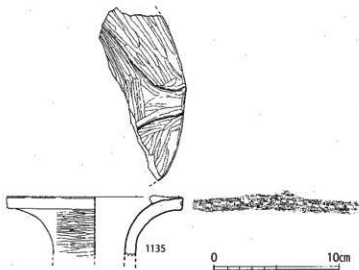
第 308 図 SK55 出土遺物実測図 (1/3)



第 309 図 SK106 実測図 (1/30)

SK312(第311図)

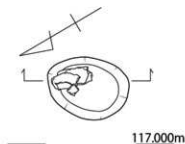
3区の南部東寄り、L-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は鶏卵形を呈するピット状の土坑で、長径0.44m、短径0.32m、深さ0.16mを測る。埋土はふい黄褐色土で、微量のアカホヤブロックを含む。本土坑の検出面から、2点の打製石斧と1点の横刃型石器、及び礫片が集積された状態で出土している。3点の石器は上から第311図1136・1137・1138の順に重ねた状態で置かれていた。その他に遺物の出土はなく、遺構の時期比定の決め手を欠くが、埋土の色相は縄文時代のものではなく、石器の出土から弥生時代に属する遺構の可能性が高い。



第 310 図 SK106 出土遺物実測図 (1/3)

SK312出土遺物(第312図)

1136・1137は打製石斧である。1136は上端及び下端部を欠損する。1137は側辺に細かい調整剥離を施すが、下端部を欠損する。1138は横刃型石器で、下辺に細かい刃部調整を施す。石材はいずれも安山岩で、石質が似ることから同一母岩から剥ぎ取った剥片を素材とした可能性がある。



SK443(第313図)

3区の中央部、K-5グリッドで検出した土坑である。西辺の中央部を古墳時代の土坑SK11に、北東隅部を時期不明の土坑SK497に切られている。平面形状は南北に長い、丸みのある長方形形状を呈し、長辺3.69m、短辺2.26m、深さ0.22mを測る。埋土はアカホヤ風化土を少量含む暗褐色土の単層である。遺物は縄文土器、磨製石鏃、打製石斧が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。磨製石鏃が出土しており、弥生時代の遺構と判断する。



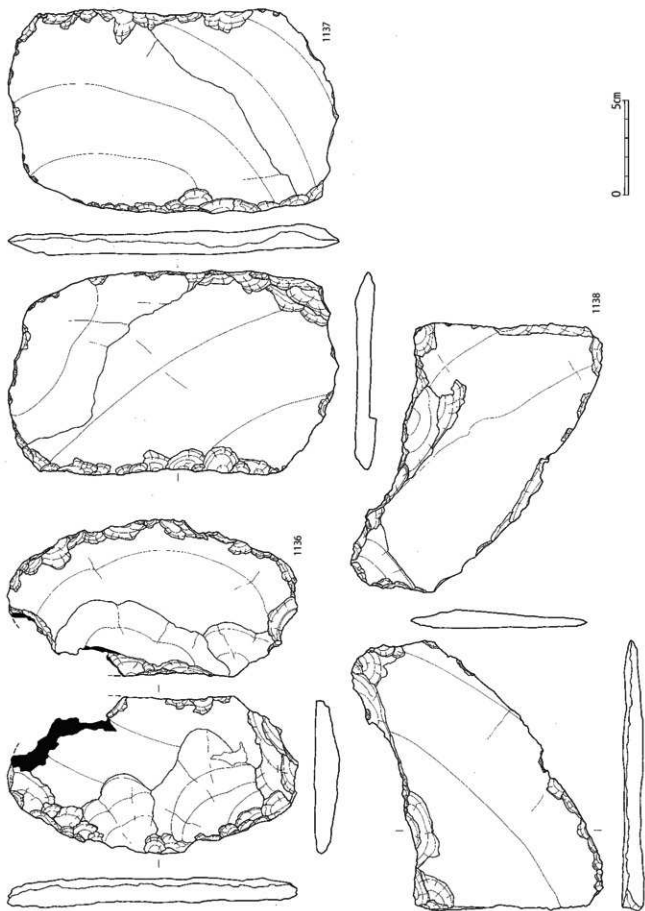
第 311 図
SK312 実測図 (1/20)

SK443出土遺物(第314図)

1139は縄文土器で、無文の深鉢である。1140は磨製石鏃で、基部は凹み、表面に研磨痕が残る。石材は粘板岩である。1141・1142は背面に自然面を残す剥片を素材とした打製石斧で、周縁部に調整剥離を施す。石材は1141が砂岩、1142は安山岩である。

SK462(第315図)

3区の北部、J-5・J-6グリッドで検出した土坑である。北側は縄文時代の竪穴建物SH200と重複し、東と南はそれぞれ弥生時代の竪穴建物SH423とSH28に切られている。SH200を先に完掘していたため、SH200との関係は平面では押さえられていない。このように切り合いが多いため本来の形状は明らかではなく、検出した範囲で長辺3.05m以上、短辺2.25m以上、深さは比高で0.23mを測るが、実際の深さは10cm前後である。床面は平坦で、附属する遺構は認められない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石鏃、磨製石鏃、磨石・叩石、剥片が出土しており、混在した状況を示す。遺構の時期比定できる遺物に乏しいが、弥生土器が出土しており、かつ中期の竪穴建物SH28とSH423に切られることから、弥生時代中期の遺構と判断する。



第 312 図 SK312 出土遺物実測図 (1/2)

SK462出土遺物(第316図)

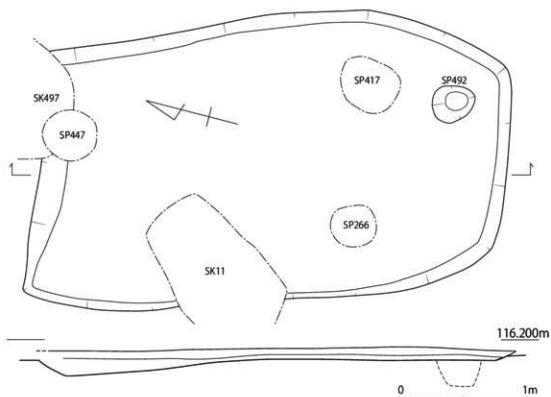
1143は縄文土器の浅鉢である。1144は土師器甕の細片で、内面に種子状圧痕が認められるが、分析の結果は不詳であった。1145は砂岩の円礫を用いた磨石・叩石で、上下両面を磨面とし、側縁部に散漫ながら敲打痕が認められる。1146は凹基無茎式の打製石鏃で、姫島産黒曜石を素材とする。1147は粘板岩を素材とする磨製石鏃で、先端部と基部を欠失する。1148は安山岩の剥片である。

SD427(第317図)

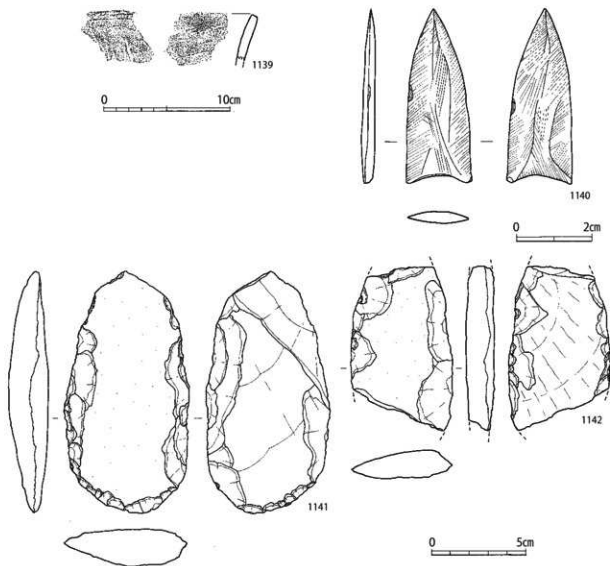
3区の南部西端、K・4・L・4・L・5グリッドで検出した溝状遺構である。北側は弥生時代の竪穴建物SH12に、南端部はピットSP201に切られているため全体の規模は明らかにできない。長辺2.60m以上、幅0.45～0.68m、深さは最大で0.33mを測る。埋土は3層に分層される。遺物は縄文土器が出土しているが、埋土色相が縄文時代の遺構埋土とは異なること、弥生時代後期の竪穴建物SH12に切られることから、弥生時代の後期以前の遺構と判断する。

SD427出土遺物(第318図)

1149は縄文土器である。外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。



第 313 図 SK443 実測図 (1/30)



第 314 図 SK443 出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2)

第 4 節 古墳時代の遺構と遺物

3区における古墳時代の遺構は、竪穴建物3棟、土坑11基である。竪穴建物は古墳時代前期後半のもので、3区では後期に属するものはない。後期の竪穴建物SH29は一部が3区に含まれるが、2区の遺構として報告済みでありここでは含めない。竪穴建物の数に比して土坑が多く、少数ながら古墳時代後期に下るものが含まれる。

SH25(第319図)

3区の中央部、K・6・L・6グリッドで検出した竪穴建物である。北は弥生時代の竪穴建物SH10とSH268と重複しており、中心部分は確認調査時のトレンチの掘削を受けている。平面形状は丸みのある方形味を呈し、長辺4.90m以上、短辺4.86m、深さ0.30mを測る。埋土は細かい掘り込みを受けており13層に細分されるが、竪穴本来の埋土は10～13層の4層である。内部の掘り込みはなだらかで、床面は平坦に作る。床面では4基のピットを検出しており、これは主柱穴になる可能性が高い。遺物は少量ながら縄文土器、土師器が出土している。弥生土器を含まず、土師器が一定量含まれることから古墳時代前期の遺構とするが、歪な平面形状で浅い4基の主柱穴を持つ形態は、SH5～7・SH32といった弥生時代中期の竪穴建物と共通する。発掘調査時の都合上、SH10とSH268を先に掘り上げたためSH25との切り合い関係は明確に押さえられておらず、SH10やSH268がSH25を切る可能性も排除できない。

SH25出土遺物(第320図)

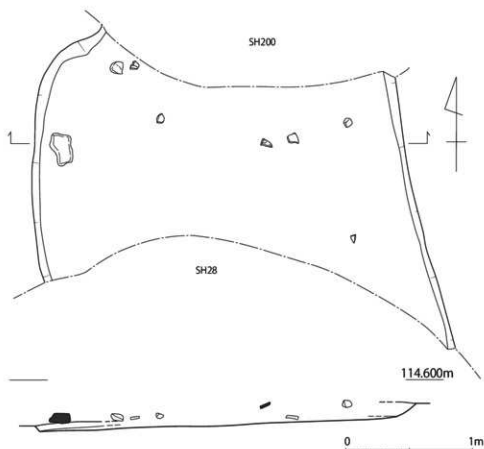
1150は縄文土器で、外反する口縁の端部を上方に折り、外面に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。1151・1152は土師器甕の胴部破片で、外面にそれぞれ種子状圧痕が認められる。このうち1151について分析を行ったが、結果は不詳であった。

SH30(第321図)

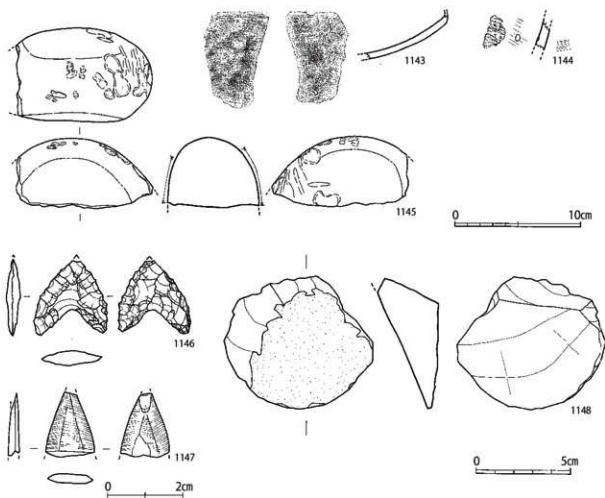
3区の中央西寄り、K・5・L・5グリッドで検出した竪穴建物である。西側は弥生時代の竪穴建物SH430を切り、西壁際を確認調査時のトレンチに大きく切られている。平面形状は北側が丸く膨らむものの方形を基調とするとみられ、長辺4.63m、短辺4.41m、深さ0.26mを測る。埋土は5層に分層され、中心に向かってレンズ状の堆積となる。床面では中央に焼土の詰まった炉穴と、その北に歪な形状の土坑、そして5基のピットを検出している。土坑はピット2基の重複の可能性がある、土坑北端部と炉穴を挟んで南のピットが深く、この2基が主柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。出土遺物から、古墳時代前期に位置付けられる。

SH30出土遺物(第322図)

1153・1154は縄文土器である。沈線と単節縄文RLを施すもので、後期中葉の北久根山第二型式に併行するものであろう。1155・1156は土師器の二重口縁壺で、上方に長く延びた口縁部の外面に櫛描波状文を施す。1157・1158は土師器の壺で、1158は頸部に刻目凸帯が巡る。1159は土師器の甕で、外面に煤が付着する。1160は甕の頸部破片で、内面に種子状圧痕が残る。分析の結果は不詳であった。1161は安山岩製の石皿で、上面を使用面とする。1162は砥石で、上下両面を研ぎ面とし、上面は大きく湾曲する。石材は凝灰岩質砂岩である。



第315図 SK462 実測図(1/30)



第316図 SK462 出土遺物実測図 (1/3・1/1・1/2)

SH240(第323図)

3区の北東部の東壁際、I・6・J・6グリッドで検出した竪穴建物である。大部分が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形を呈するとみられ、長辺2.25m以上、短辺1.85m以上、深さ0.64mを測る。埋土は4層に分層され、レンズ状の堆積を示す。黄褐色ローム質土を床面とするが、床面で検出できた遺構はない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、二次加工剥片、叩石が出土している。出土遺物及び黄褐色ロームまで深く掘り込む遺構である点から、古墳時代前期後半に位置づける。

SH240出土遺物(第324図)

1163・1164は縄文土器である。いずれも浅鉢で、1163は外反する口縁部の内側に1条の沈線を施す。1164は底部を丸く肥厚するもので、晩期後葉に位置付けられる。1165は弥生土器の甕で、外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせ、口縁部の外端部に刻目を加える。中期の下城式土器である。1166は弥生土器の高坏か。1167は土師器の高坏脚部で、坏部との接合は円盤充填である。1168は安山岩の円礫を用いた叩石で、上部部に敲打痕が残る。1169は安山岩の打製石斧で、周縁に調整剥離を施す。1170は金山産サヌカイトの二次加工剥片で、下辺部に微細な剥離が認められる。

SK4(第325図)

3区の南東部、M・6・M・7グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺2.82m、短辺2.30m、深さ0.44mを測る。埋土は黒褐色土を主とし、アカホヤ風化土のブロックが混じる。床面は平坦で、ビット等の

付属する遺構は認められない。中央から北半部にかけて遺物がややまとまって出土している。遺物は縄文土器、土師器、磨製石鏃、磨製石斧、叩石・磨石が出土している。出土遺物から、古墳時代前期後半に位置づける。

SK 4 出土遺物 (第326図)

1171は縄文土器の深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる。晩期後葉の上管生B式に比定される。1172は土師器の甕である。1173・1174は土師器の高坏で、坏部の中位と脚部が屈曲する。1175は土師器の小片で、外面に種子状圧痕が認められるが、分析の結果は不詳であった。1176は安山岩の円礫を用いた磨石・叩石で、上下両面を磨面とし、側面上端部を中心に敲打痕が残る。上下両面とも一部に被熱痕が認められる。1177は安山岩の円礫を用いた叩石で、上端部に敲打痕が残る。1178・1179は磨製石鏃で、いずれも黒色粘板岩を素材とし、基部は凹む。1180は磨製石斧の剥離片で、表面は丁寧な研磨により平滑化している。石材は蛇紋岩である。

SK11 (第327図)

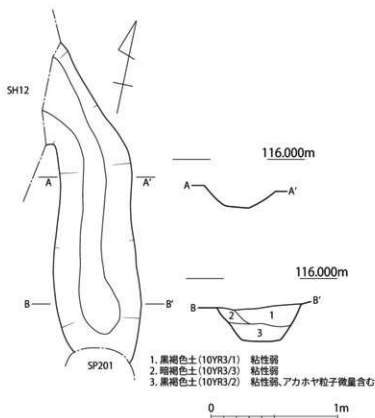
3区の中央部、K-5グリッドで検出した土坑である。弥生時代の土坑SK443を切る土坑で、平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺1.28m、短辺0.77m、深さ0.54mを測る。土坑の北端はピット状に一段深く掘り込まれる。遺物は須恵器、時期不明の土器細片、横刃型石器が出土している。須恵器の出土から、古墳時代後期に位置付けられる。

SK11出土遺物 (第328図)

1181は千枚岩の横長剥片を素材とする横刃型石器である。背面及び打点側の上端面には自然面が残り、下辺部に刃部調整剥離を施す。

SK87 (第329図)

3区の南西部、M-5グリッドで検出した土坑である。SK88・SK89と3基の土坑が切り合っており、SK89→SK88→SK87の順に構築されている。平面形状は略楕円形を呈し、長径1.66m、短径1.19m、深さ0.34mを測る。埋土は黒褐色土と褐色土の2層で、2層には微量ながら炭を含む。遺物は縄文土器、土師器が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。



第 317 図 SD427 実測図 (1/30)



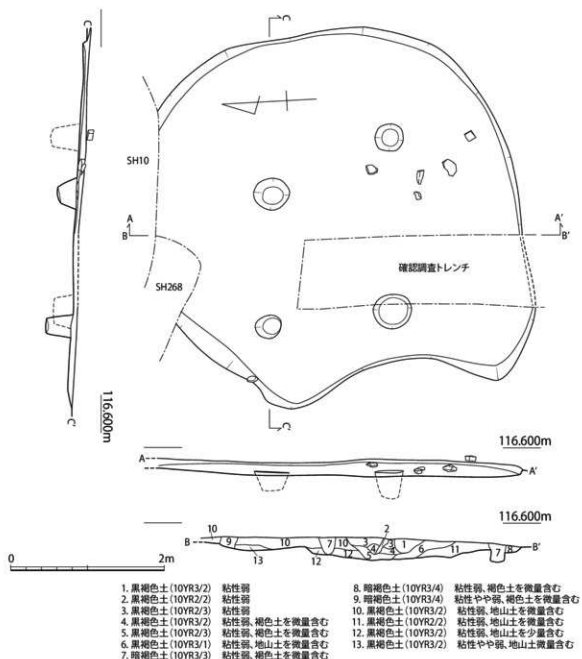
第 318 図 SD427 出土遺物実測図 (1/3)

SK87出土遺物(第330図)

1182は縄文土器である。外面に1条の無刻目凸帯を巡らせ、口縁部には鱗状突起が付く。晩期後葉の上菅生B式に比定される。

SK210(第331図)

3区の中央東寄り、L-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は東西に長い鳥卵形を呈し、長径1.87m、短径1.30m、深さ0.48mを測る。埋土は5層に分層され、中位では複雑な堆積状況を示す。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、鉄製品が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。



第 319 図 SH25 実測図 (1/50)



第 320 図 SH25 出土遺物実測図 (1/3)

SK210出土遺物(第332図)

1183は縄文土器である。外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。1184は板状を呈する鉄製品である。

SK220(第333図)

3区の中央東壁際、I-7グリッドで検出した土坑である。一端が調査区外に続くが、平面形状は隅丸長方形形状を呈し、長辺1.50m、短辺0.96m以上、深さ0.36mを測る。埋土は地山ローム層に由来する黄褐色土細粒の混じる黒褐色土である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。土師器の出土から、古墳時代の遺構と判断する。

SK220出土遺物(第334図)

1185は風化した剥離面を持つ安山岩の二次加工剥片である。縄文時代の古い時期の石器である可能性が高い。1186は安山岩製の打製石斧で、周縁に粗い調整剥離を施す。

SK245(第335図)

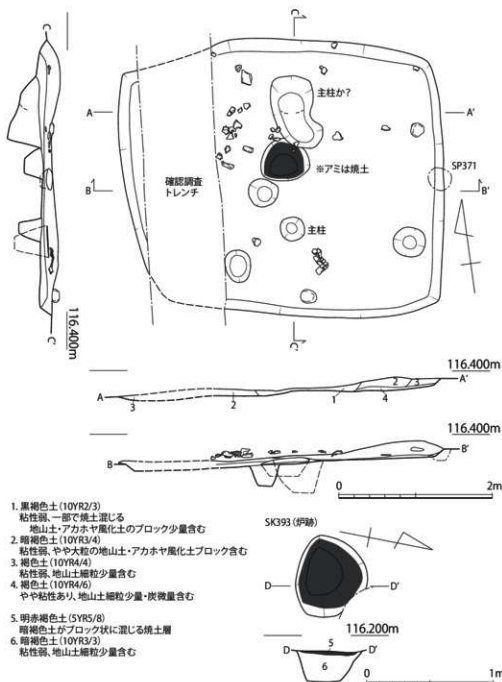
3区の北端部、I-5・I-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.50m、短径1.37m、深さ0.22mを測る。埋土は3層に分層され、2・3層で埋没した後に1層が掘り込む状況がみられる。遺物は土坑の北半部を中心にややまとまって出土している。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、石錘である。古墳時代前期の土師器高坏が出土しており、遺構の時期は前期後半に位置付けられる。

SK245出土遺物(第336図)

1187は縄文土器の浅鉢である。口縁は内傾し、端部は丸く肥厚する。1188は土師器高坏の脚部である。1189は打製石斧で、上下両面に自然面を残す安山岩を素材とし、周縁部に調整剥離を施す。1190は打欠石錘で、砂岩門礫の長軸両端に打ち欠きを加えて縄掛け部を作り出す。

SK300(第337図)

3区の北西隅部、I-4・I-5グリッドで検出した土坑である。南西隅部を擾乱によって切られるが、平面形状は方形を呈し、長辺3.74m、短辺3.39m、深さ0.30mを測る。平面形状や規模から当初は竪穴建物と想定して発掘を進めたが、結果として主柱穴や竈、炉跡等、竪穴建物に付随する遺構が確認されなかったため、土坑として扱った。床面で検出できた遺構は、東壁のほぼ真ん中で東西に細長く延びる土坑1基しかない。この土坑も、土層断面を見る限り検出面から掘り込んでおり、埋没後に掘り込まれた、土坑とは直接関係しないものである。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、磨石・叩石、石皿が出土している。土坑の北西隅部と南西隅部付近で、遺物がややまとまって出土している。遺構の時期比定ができる遺物に乏しいが、土師器高坏の出土から古墳時代前期の遺構の可能性が高い。

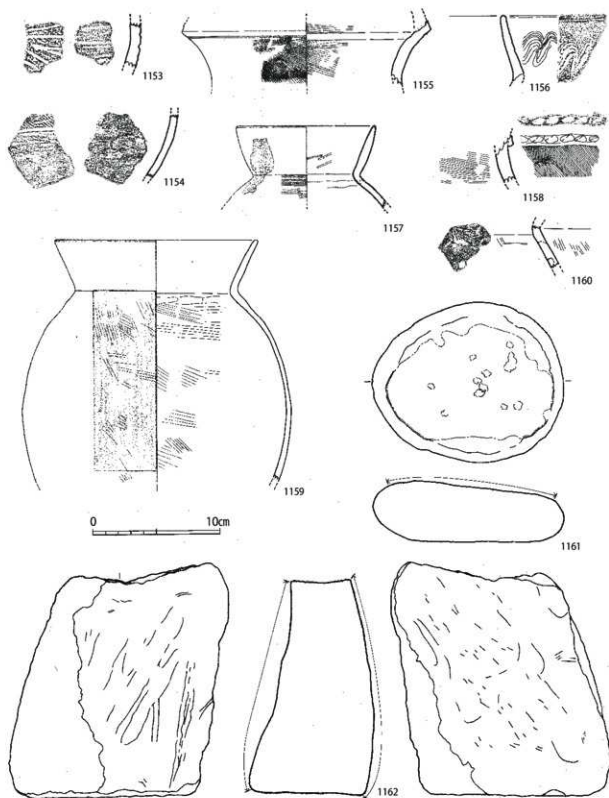


1. 黒褐色土 (10YR2/3)
粘性弱、一部で焼土混じる
地山土・アカホヤ風化土のブロック少量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/4)
粘性弱、やや大粒の地山土・アカホヤ風化土ブロック含む
3. 褐色土 (10YR4/4)
粘性弱、地山土細粒少量含む
4. 褐色土 (10YR4/6)
やや粘性あり、地山土細粒少量・炭微量含む
5. 明赤褐色土 (5YR5/8)
暗褐色土がブロック状に混じる焼土層
6. 暗褐色土 (10YR3/3)
粘性弱、地山土細粒少量含む

第 321 図 SH30 実測図 (1/50)

SK300出土遺物(第338図)

1191・1192は縄文土器である。1191は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。凸帯は高く、断面形も丸みがある。1192は深鉢の頸部下の破片で、横位の沈線を施す。後期中葉の太郎迫式であろう。1193は土部器高坏の脚裾部とみられる。内面に種子状圧痕がみられたが、分析の結果は不詳であった。1194～1197は石器である。1194は安山岩を素材とする打製石斧で、上下両端部を欠失する。1195は砂岩の円礫を用いた磨石・叩石で、上下両面を磨面とし、長軸の両端部に顕著な敲打痕が残る。1196は砂岩製の叩石で、側縁部を中心に敲打痕が密に残る。1197は砂岩製の石皿で、上下両面を使用面とし、わずかに敲打痕が認められる。



第 322 図 SH30 出土遺物実測図 (1/3)

SK412(第339図)

3区の南西部、L-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を基調とするが、南側がやや張り出している。長辺2.09m、短辺1.44m、深さ0.26mを測る。埋土は少量のアカホヤ風化土が混じった黒褐色土である。床面では南端と南西端近くでそれぞれビット状の掘り込みが見られた。遺物は少量ながら土師器が出土しており、遺構の年代は古墳時代前期に比定される。

SK412出土遺物(第340図)

1198は土師器の高坏である。脚部の下端で屈曲して裾部が広がる。古墳時代前期の所産である。

SK413(第341図)

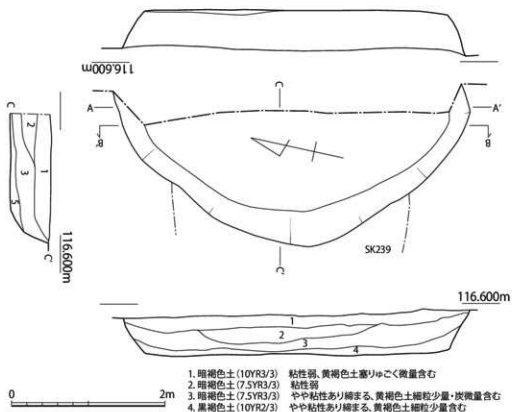
3区の南西部、L-5グリッドで検出した土坑で、上述のSK421のすぐ南東に位置する。平面形状は略楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.72m、深さ0.19mを測る。埋土は少量のアカホヤ風化土が混じった黒褐色土で、上面には薄い焼土が認められた。遺物は弥生土器、土師器が出土している。出土遺物から、古墳時代前期の遺構と判断される。

SK413出土遺物(第342図)

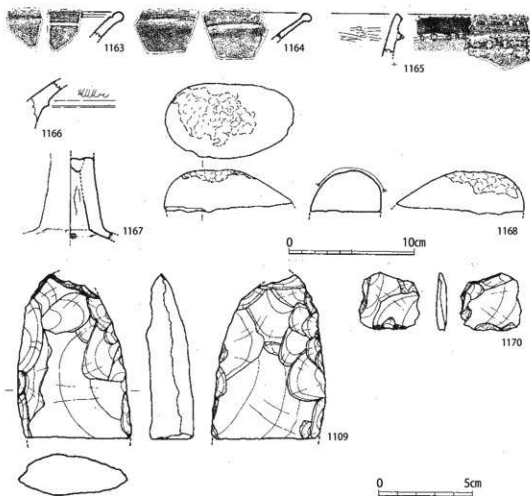
1199は土師器の二重口縁壺である。上方に伸びた口縁部の外面に櫛描波状文を施す。

SK429(第343図)

3区の中央部、K-5・K-6グリッドで検出した土坑である。弥生時代の堅穴建物SH28埋没後に穿つ土坑で、平面形状は略円形を呈し、長径1.29m、短径1.10m、深さ0.21mを測る。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。



第 323 図 SH240 実測図 (1/50)



第 324 図 SH240 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK429出土遺物(第344図)

1200は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧である。

SK441(第345図)

3区の中央北寄り、J・5・K・5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH530の埋没後に穿つ土坑で、西側の一端をSP442に切られる。平面形状は横長の鵝卵形を呈し、長径1.53m、短径1.02m、深さ0.15mを測る。内部の掘り込みは浅く、底面は皿状を呈する。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK441出土遺物(第346図)

1201は弥生土器甕の底部である。1202は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、周縁の調整割離が粗いことから未成品の可能性がある。

第5節 古代・中世の遺構と遺物

3区における古代の遺構としては、土坑2基、ピット1基がある。中世の遺構は、可能性のあるものを含めて、掘立柱建物1棟、土坑5基、ピット3基がある。全体として遺構の分布は散漫で、また遺物の量も少ない。

SK275(第347図)

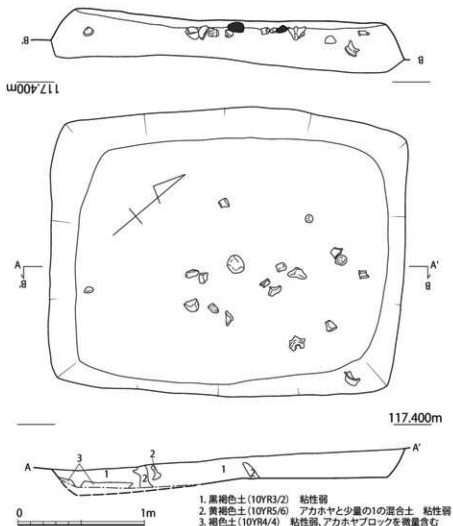
3区の北部西寄り、J-5グリッドで検出した土坑である。土坑の北側は縄文時代の竪穴建物SH280を切っている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺1.07m、短辺1.01m、深さ0.28mを測る。遺物は弥生土器、土師器とともに時期不明の土器細片が出土しているが、全体の量は少ない。時期比定できる遺物に乏しいが、出土遺物から古代の遺構と判断する。

SK275出土遺物(第348図)

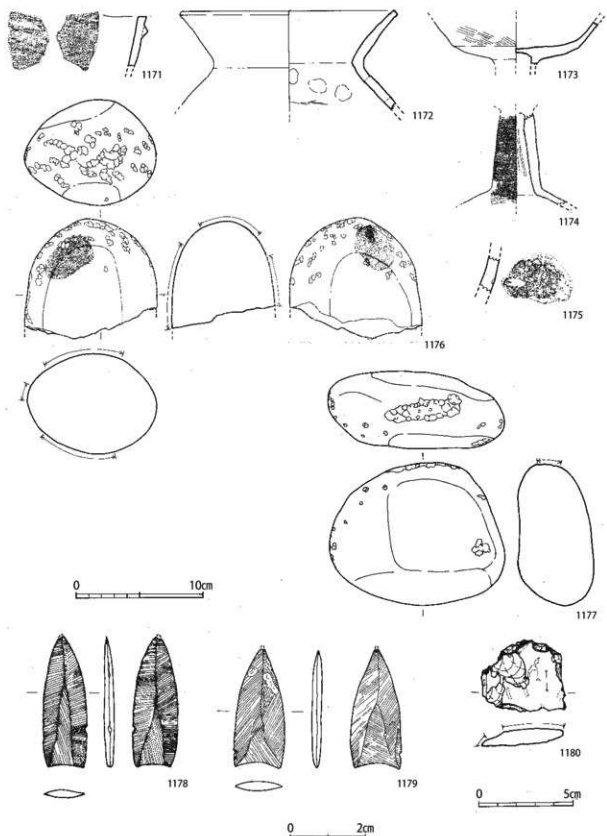
1203は土師器の坏である。口縁は外に開き、端部には面を持つ。9世紀代の遺物である。

SK428(第349図)

3区の中央部、K-5グリッドで検出した土坑である。弥生時代の竪穴建物SH28埋没後に穿つ土坑で、平面形状はやや膨らむ鶏卵形を呈し、長径1.13m、短径1.06m、深さ0.23mを測る。埋土は黄褐色土粒の混じる黒褐色土の単層である。遺物は縄文土器、土師器が出土している。出土した土師器の型式から、古代の遺構と判断する。



第 325 図 SK4 実測図 (1/30)



第 326 图 SK4 出土遺物実測図 (1/3 · 1/1 · 1/2)

SK428出土遺物(第350図)

1204は土師器の坏である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底面には回転糸切痕が残る。11～12世紀代の製品であろう。

SP307・SP327(第351図)

SP307は3区の北部東寄り、J-6グリッドで検出したビット状遺構である。弥生時代の竪穴建物SH423を切る遺構で、平面形状は楕円形を呈し、長径0.50m、短径0.41m、深さは0.03mとごく浅い。遺物は古代の土師器片が出土している。

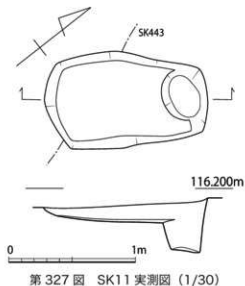
SP327は3区の南東部、M-7グリッドで検出したビット状遺構である。平面形状は略円形を呈し、長径0.31m、短径0.28m、深さ0.25mを測る。遺物は古代の土師器が出土しており、上述のSP307出土のものと同接関係が認められた。しかし、両者の間は約28m離れており、この接合関係が何を意味するのかはよく分からない。

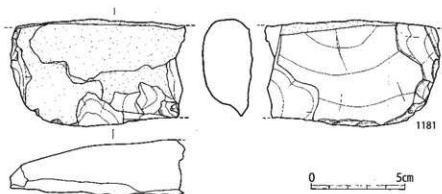
SP307・SP327出土遺物(第352図)

1205は土師器坏である。口縁は内湾し、端部は外反させ上端には面を持つ。内面には粗いヘラミガキが施される。9世紀代に位置付けられよう。

SB 1 (第353図)

3区の南西部、L-4・L-5グリッドで検出した掘立柱建物である。SP13～19・21・23・24で構成され、南北に3間、東西に2間の計10基の柱穴の配列を確認している。桁行の軸線はほぼ南北方向で、N-2°-Eでわずかに東に振れる。柱穴の芯々間の距離は、桁行は東側が1.75～1.80m前後であるのに対し、西側は1.40～2.10m前後とばらつきがある。梁行では1.65～2.10m前後を測る。柱穴はSP19を除いて埋土に柱の痕跡を確認しており、北西隅のSP13には礎盤の可能性がある石が据えられていた。各柱穴からは土器の細片がごく少量出土しているだけで図示できるものはなく、この建物の年代を特定できるようなものはない。SP17が古墳時代の土坑SK412を切っているため、古墳時代前期以降の遺構ということになるが、SB 1の周囲に中世の遺物が出土したSK81やSK202が存在していることを勘案すると、中世の遺構の可能性が高い。

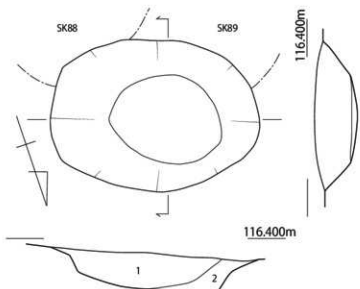




第 328 図 SK11 出土遺物実測図 (1/2)

SK27 (第354図)

3区の中央西部、K・4・K・5・L・4・L・5 グリッドで検出した土坑である。平面形状は東に張出部の付く隅丸方形で、長辺2.88m、短辺2.34m、深さ0.19mを測る。張り出し部は浅いテラス状となっており、西側の隅丸方形部は5cmほど一段深くなっている。遺物は検出面近くで縄文土器と大型の打製石斧が出土したが、全体としては縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧が混在したような状況を示す。中世の土師器小皿が数点出土していることから、中世の遺構として扱う。

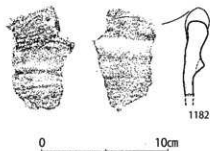


1. 黒褐色土(10YR2/3) やや粘性あり、地山土粒少量混じる
2. 褐色土(10YR4/4) 粘性弱く脆い、炭微量含む

第 329 図 SK87 実測図 (1/30)

SK27出土遺物 (第355図)

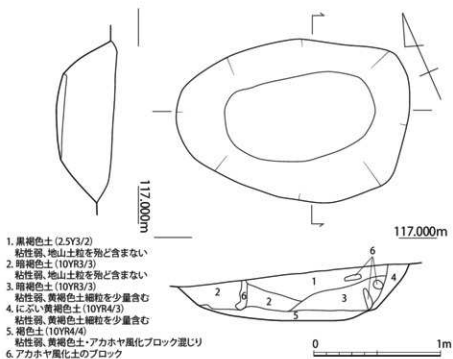
1206～1208は縄文土器である。1206は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡る深鉢で、晩期後葉の上管生B式に比定される。1207は無文の深鉢である。1208は浅鉢で、内面口縁下に1条の沈線を施す。1209は弥生土器の壺で、口縁端部に刻みを施す。1210は土師器小皿で、底面に回転糸切離し痕が残る。1211は大型の打製石斧である。安山岩の剥片を素材とし、長さ25.8cm、幅9.8cm、厚さ6.6cm、重量1670gを測る。



第 330 図 SK87 出土遺物実測図 (1/3)

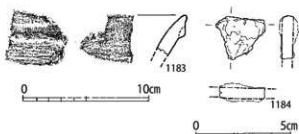
SK81 (第356図)

3区の南西部、M・5グリッドで検出したビット状の小土坑である。平面形状は鶏卵形を呈し、長径0.74m、短径0.49m、深さ0.52mを測る。埋土は5層に分層され、柱の痕跡



第 331 図 SK210 実測図 (1/30)

のように見えることから、遺構の機能としては柱穴であろう。遺物は土師器、東播系須恵器片が出土しているが、図示できるものはない。東播系須恵器の出土から、中世前期の遺構と判断される。



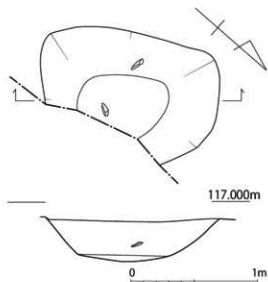
第 332 図 SK210 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK202 (第357図)

3区の中央西寄り、I-5 グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.83m、短径0.68m、深さ0.52mを測る。埋土は3層に分層される。遺物は検出面に近い上位から、土師器小皿と常滑焼が出土している。出土遺物から、中世前期の遺構と判断される。

SK202出土遺物 (第358図)

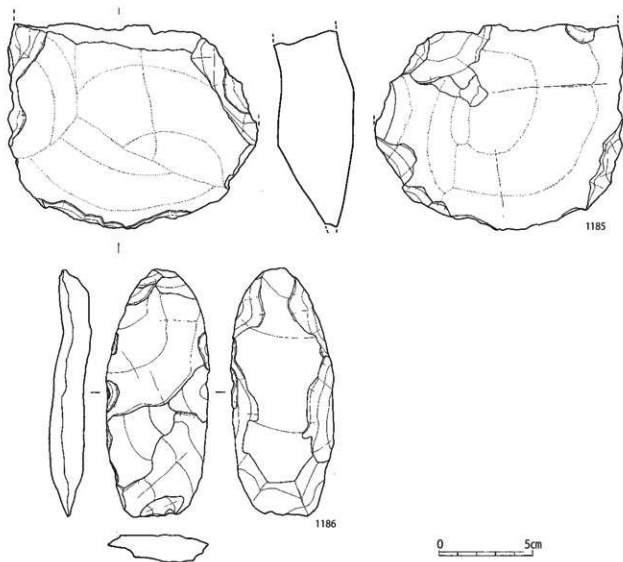
1212は土師器小皿である。口縁部は短く立ち、底面には回転糸切離し痕と板状圧痕が残る。1213は中世の焼締陶器で、常滑焼の壺である。頸部から内傾して立ち上がり口縁は外反させたのち端部を上方に延ばし、跨部を「N」字状に作る特徴から、13世紀代に比定される。



第 333 図 SK220 実測図 (1/30)

SK246 (第359図)

3区の北部中央、I-5 グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径1.15m、短径1.01m、深



第 334 図 SK220 出土遺物実測図 (1/2)

き0.37mを測る。埋土は2層で、土坑を埋める2層を切り込んで1層が掘り込む様子が見て取れる。床面には1基のビット状遺構があるが、位置的にこの1層の掘り込みによって生じたものの可能性が高い。遺物は土師器、白磁が出土しているが、いずれも小片であり図示できるものはない。白磁の出土から、中世前半の遺構と判断される。

SK431 (第360図)

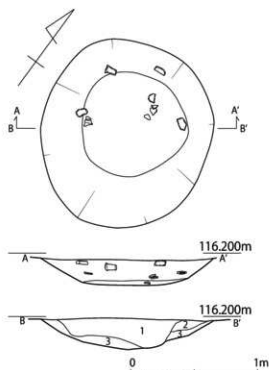
3区の中央部、K-5グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状を呈し、長径1.28m、短径1.10m、深さ0.38mを測る。掘り込みは逆台形状を呈し、床面は平坦である。遺物は縄文土器、白磁が出土している。白磁の出土から、中世前半の遺構と判断される。

SK431 出土遺物 (第361図)

1214は中世の白磁玉縁碗である。器壁が薄く、また玉縁も小さいので小型品であろう。

SP216 (第362図)

3区の中央東寄り、L-6グリッドで検出したビット状遺構である。平面形状は略円形状を呈し、長径0.34m、短



1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱く脆い
2. 褐色土(10YR4/6) 粘性弱、1のブロック混じる
3. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱く脆い、地山土細粒少量含む

第335図 SK245実測図(1/30)

径0.33m、深さ0.22mを測る。遺物は中世の土師器皿とともに土器片が出土している。遺物から中世前半の遺構である。

SP216出土遺物(第363図)

1215は土師器小皿である。底部から口縁が短く立ち上がり、底面には回転糸切離し痕が残る。

SP243(第364図)

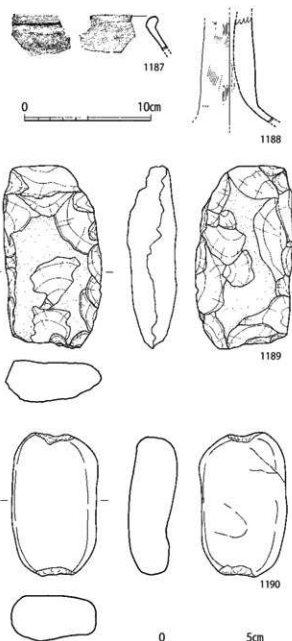
3区の北部東寄り、I-6グリッドで検出したビット状遺構である。平面形状は略楕円形状を呈し、長径0.39m、短径0.36m、深さ0.43mを測る。ビットの中央、床面から少し浮いた位置で完形の土師器小皿1点が出土している。このことから中世の遺構と判断される。

SP243出土遺物(第365図)

1216は土師器小皿である。底部から口縁が短く立ち上がり、底面には回転糸切離し痕が残る。

SP330(第366図)

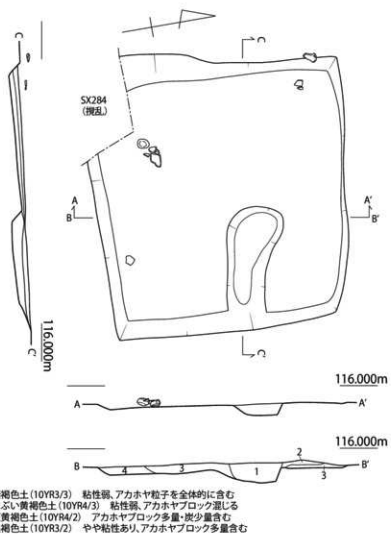
3区の南東部、M-7グリッドで検出したビット状遺構である。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.51m、短径0.40m、深さ0.28mを測る。遺物は中世の糸切底の土師器坏がしゅつどしている。このことから中世の遺構と判断される。



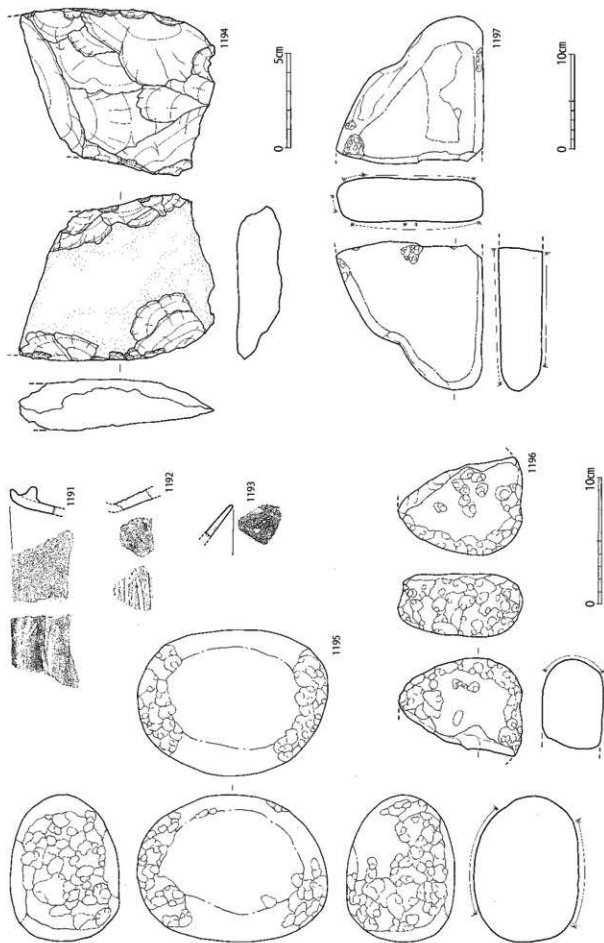
第336図 SK245出土遺物実測図(1/3・1/2)

SP330出土遺物 (第367図)

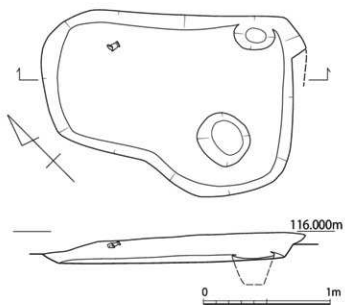
1217は土師器環である。口縁部は底部から厚みを持って立ち上がり端部は細くおさめる。底面には回転糸切離し痕画残る。14世紀代に位置づけられよう。



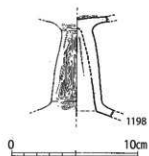
第 337 図 SK300 実測図 (1/50)



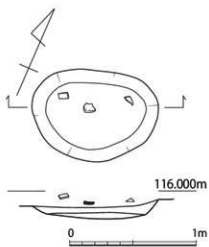
第 338 图 SK300 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



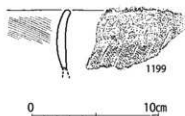
第 339 図 SK412 実測図 (1/30)



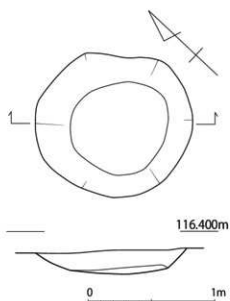
第 340 図 SK412 出土遺物実測図 (1/3)



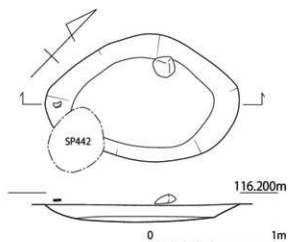
第 341 図 SK413 実測図 (1/30)



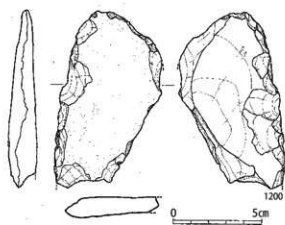
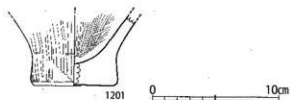
第 342 図 SK413 出土遺物実測図 (1/3)



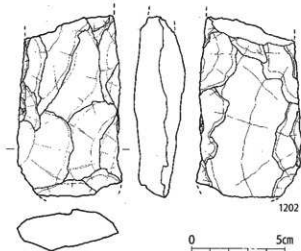
第 343 図 SK429 実測図 (1/30)



第 345 図 SK441 出土遺物実測図 (1/30)



第 344 図 SK429 出土遺物実測図 (1/2)



第 346 図 SK441 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

第6節 その他の遺構と遺物

ここでは前節で取り上げた以外の遺構で、出土遺物がないため帰属時期が不明なもの、遺物が少なく時期比定が困難な遺構を取り上げる。図示可能な遺物が出土した遺構を中心に報告するが、ピット等の小規模な遺構については詳細を省くため、第3分冊巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SK265(第368図)

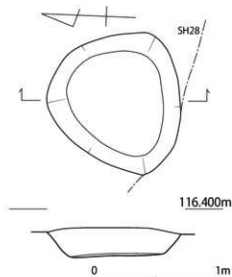
3区の中央部、K-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.85m、短径0.63m、深さ0.17mを測る。遺物は縄文土器の底部が出土しているが、これがこの遺構の時期を決めるものではなく、帰属時期は明らかにできない。

SK265出土遺物(第369図)

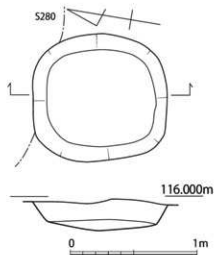
1218は縄文土器の深鉢の底部である。

SK444(第370図)

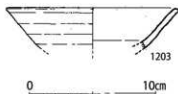
3区の中央部、L-6グリッドで検出した土坑である。古墳時代の竪穴建物SH25の床面で検出した遺構で、東半部は確認調査トレンチによって上部を削られている。平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径1.50m、短径0.83m以上、深さ0.39mを測る。埋土は赤みがかった色相の暗赤褐色土で、3層に分層される。埋土から縄文時代の遺構の可能性が高いが、出土遺物が一切なく、厳密な時期比定は困難である。



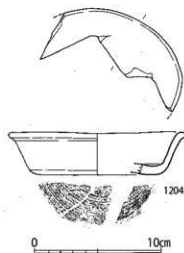
第349図 SK428 実測図 (1/30)



第347図 SK275 実測図 (1/30)



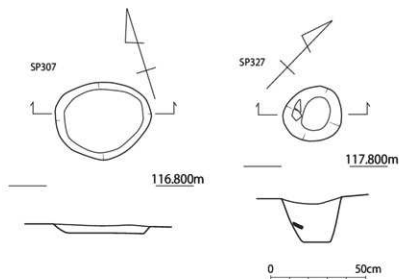
第348図
SK275 出土遺物実測図 (1/3)



第350図
SK428 出土遺物実測図 (1/3)

3区遺構出土遺物(第373・374図)

1219はSP116出土の土師器片で、内面に種子状圧痕が認められる。分析の結果は不詳であった。1220はSP118出土の叩石で、石材は安山岩である。1221はSP203出土の縄文土器で、外面に横位沈線とその下に単節縄文RLを施す。1222はSP228出土の叩石で、安山岩の円礫を素材とする。1223・1224はSP236からの出土である。1223は弥生土器甕で、外面に2条の刻目凸帯を巡らせる。1224は安山岩製の打製石斧で、下半部を欠失する。1225はSP257出土の叩石で、側縁部に敲打痕が残る。石材は砂岩である。1226はSP282出土の土師器高坏の脚部で、坏部との接合は円盤充填による。1227はSP474出土の縄文土器の底部で、底面周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。1228はSP518出土の縄文土器深鉢の底部で、上げ底形態である。1229はSP42出土の砥石で、形態は半円形状を呈し、半円形の弦部側面に擦痕が認められる。石材は凝灰岩で、形態やサイズから持ち砥石とみられる。1230はSP344から出土した、安山岩の縦長剥片である。上面に自然面を残すもので、打製石斧の素材によくみられることから、打製石斧の製作過程で生じた剥片の可能性が高い。1231はSP415から出土した打製石斧で、安山岩を素材とする。



第 351 図 SP307・SP327 実測図 (1/20)



第 352 図 SP307・SP327 出土遺物実測図 (1/3)

SP13

1. 暗褐色土 (10YR3/4)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む
2. 褐色土 (10YR4/6)
粘性弱く/バサつく
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土ブロック混じる

SP14

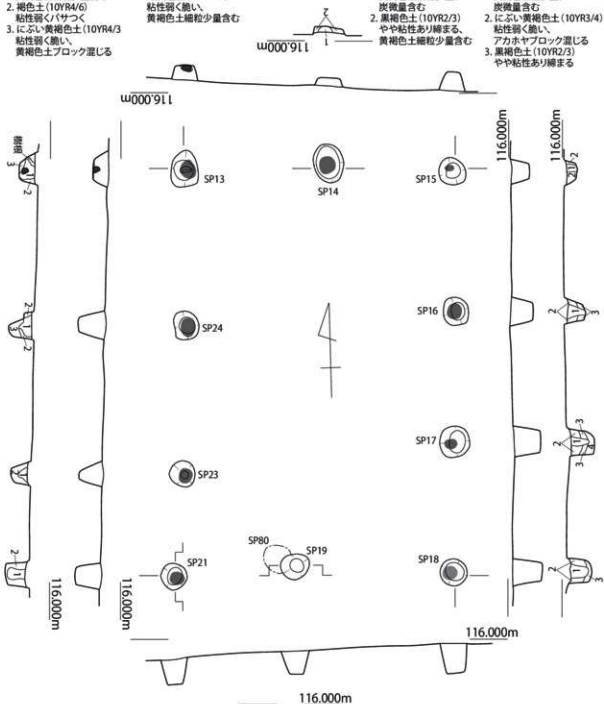
1. 褐色土 (10YR4/4)
粘性弱く脆い
2. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む

SP15

1. 暗褐色土 (10YR3/4)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量、
炭微量含む
2. 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり締まる、
黄褐色土細粒少量含む

SP16

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土粒少量、
炭微量含む
2. にぶい黄褐色土 (10YR3/4)
粘性弱く脆い、
アカホヤブロック混じる
3. 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり締まる



SP17

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む
2. 褐色土 (10YR4/4)
粘性弱く脆い、
アカホヤ風化土混じる
3. 暗褐色土 (10YR3/3)
粘性弱く脆い
4. 暗褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり締まる

SP18

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/3)
粘性弱く脆い
3. にぶい黄褐色土 (10YR3/4)
粘性弱く/バサつく

SP23

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む
2. 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり締まる

SP24

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
上部に黄褐色土ブロック混じる
2. 褐色土 (10YR4/4)
粘性弱く/バサつく
3. 黒褐色土 (10YR2/3)
やや粘性あり締まる

SP21

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒少量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/4)
粘性弱く/バサつく

SP19

1. 暗褐色土 (10YR4/3)
粘性弱く脆い、
黄褐色土細粒混じる

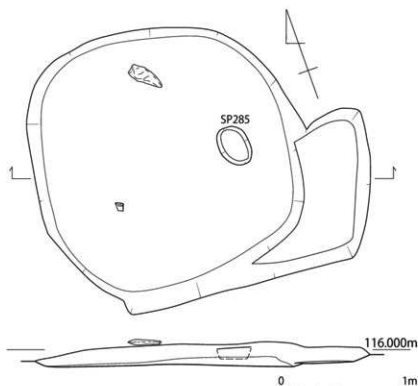
0 2m

第 353 図 SB1 実測図 (1/50)

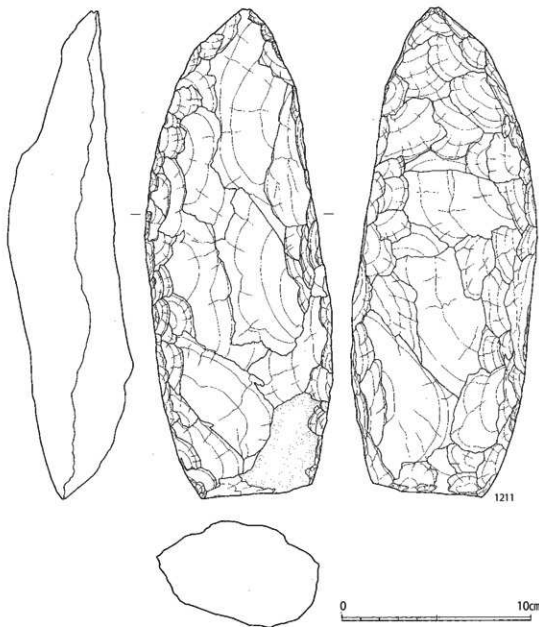
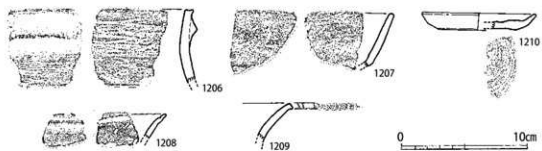
第7節 3区出土遺物

表土掘削時や遺構検出時、あるいは当初遺構としながら調査の結果遺構ではないと判断された欠番遺構等、遺構に伴わないで出土した遺物のうち、主要なものを第375～389図に示す。

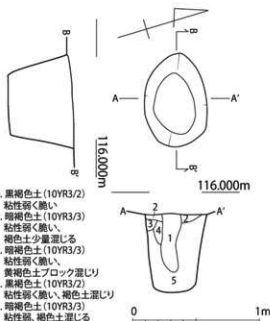
1232～1310は縄文土器である。1232は鉢形を呈するとみられ、波状口縁となる口縁下に穿孔を穿ち、それを取り巻くように渦巻き状の区画沈線と磨消縄文を施す。1233も同一個体とみられる。後期前葉の福田KⅡ式に該当する。1234は凹点と縦位の凹線を、1235は横位の凹線を施すもので、後期初頭の西和田式土器に比定される。1236は胴部から頸部が内傾し、頸部を無文として胴部に右寄り1段の無節縄文(Lr)を施す。後期中葉に位置付けられるものか。1237・1238は波状口縁を呈し、外反する口縁が上方に折れ端部を肥厚するもので、外面に2条沈線と縄文を施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。1239～1241は内面口縁下に1条の沈線を施す。1242は外面に平行沈線を施すもので、後期末葉の土器か。1243～1267は外面口縁下に1条無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上管生B式に比定される。1246は口縁部に鰭状突起が付く。1243・1244は内面口縁下に段や細沈線が巡る。1245は凸帯の下方を撫でつけるように貼り付け、上部に段が付くような形状を呈する。1247・1249・1251は凸帯の断面形状が台形状を呈し、1248は凸帯幅が広く高さがある。1267は口縁端部を欠くが、凸帯の左端が上方へカーブしており、口縁部に対して連弧状に巡る可能性がある。これらは上管生B式でも古相を示す可能性が考えられる。1268～1278は無文の深鉢の口縁部である。1279～1286は胴部片で、それぞれ種子状圧痕が認められる。このうち1286の圧痕は分析の結果、特定はできていないがクマノミズキの可能性が示されている。1287～1294は底部である。1295～1309は浅鉢で、1295～1297は外反する口縁の端部を上方に折り、外面に沈線を施す。後期末葉に比定される。1299は口縁が外反し端部は先尖りとなる。1300～1303は内傾ないしは内湾する口縁から端部が外に折れるもので、1301・1302は内面に段が付く。1304は口縁端部を肥厚し鉤形を呈するもので、鰭状突起が付く。内外面に赤色顔料の付着が認められる。1305はボウル形を呈する。1306・1307は外反する口縁の端部を丸く肥厚する。1308・1309は口縁部が逆「く」字状を呈する。1310は頸部外面に2条の細沈線を施すもので、器形から注口土器の可能性が有る。



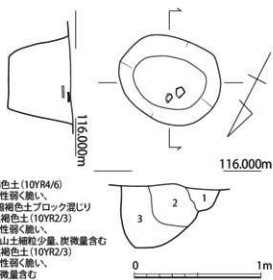
第354図 SK27 実測図 (1/30)



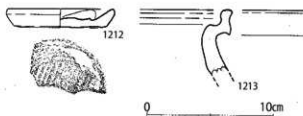
第 355 図 SK27 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



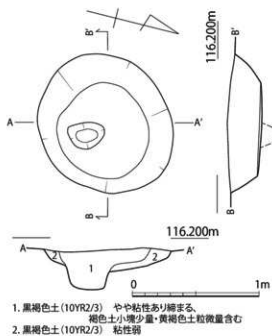
第 356 図 SK81 実測図 (1/30)



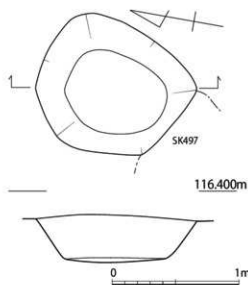
第 357 図 SK202 実測図 (1/30)



第 358 図 SK202 出土遺物実測図 (1/3)



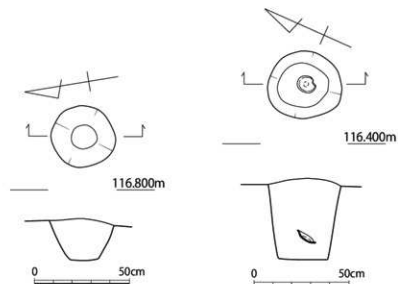
第 359 図 SK246 実測図 (1/30)



第 360 図 SK431 実測図 (1/30)

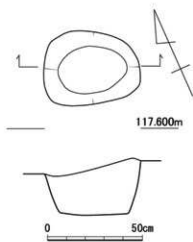


第 361 図 SK431 出土遺物実測図 (1/3)

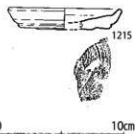


第 362 図 SP216 実測図 (1/20)

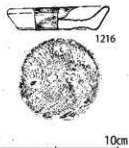
第 364 図 SP243 実測図 (1/20)



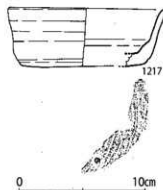
第 366 図 SP330 実測図 (1/20)



第 363 図
SP216 出土遺物実測図 (1/3)



第 365 図
SP243 出土遺物実測図 (1/3)

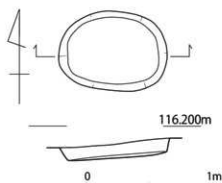


第 367 図
SP330 出土遺物実測図 (1/3)

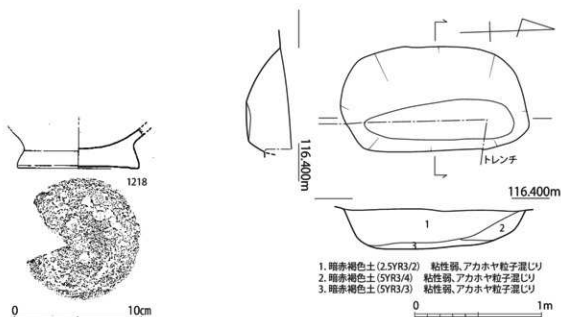
1311～1321は弥生土器である。1311～1313は外面口縁下に刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式甕に該当する。1314は球形を呈する器形で、外面に2条の横位刻目隆帯で上下を区画し、その中に波状の刻目隆帯を配する。あまり類例を知らないが弥生時代前期の所産か。1315は外面に横位の凸帯と、そこから垂下する凸帯を施す。いわゆる粗製甕である。1316は壺で、口縁部は鋤先状を呈し、外端に鋸歯状の刻みと、上端に円形の浮文を施す。1317は甕の胴部で、外面に種子状丘痕が認められる。1318～1321は底部である。

1322～1329は古墳時代の土師器である。1322は胴部が寸胴形を呈する甕か。1323は甕の底部で丸底を呈する。1325～1327は甕の胴部で、それぞれ種子状丘痕が認められる。1328は口縁部を段状に肥厚する壺である。1329は器台の脚部で、裾部は「ハ」字状に広がる。1330は須恵器の坏で古代の所産である。1331は土師器の高台付きの盤か。1332は土師器の高台付椀である。1333は中世の土師器皿で、手捏ね整形の京都系土師器である。1334は中国龍泉窯系の青磁碗で、外面に連弁文を施す。1335は青磁の鉢か。1336は中国景德鎮窯の青花皿、1337は同じく景德鎮窯の青花碗である。1338は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部は肥厚し内側に屈曲する。1339はミニチュア土器、1340は素焼きの管状土鍾である。

1341～1396は石器である。1341・1342は打製石鎌で、1341は凹基無茎式、1342は鎌形に近い形態をとる。石材は1341が金山産サヌカイト、1342はチャートである。1343は磨製石鎌で、先端部及び基部の一端を欠失する。



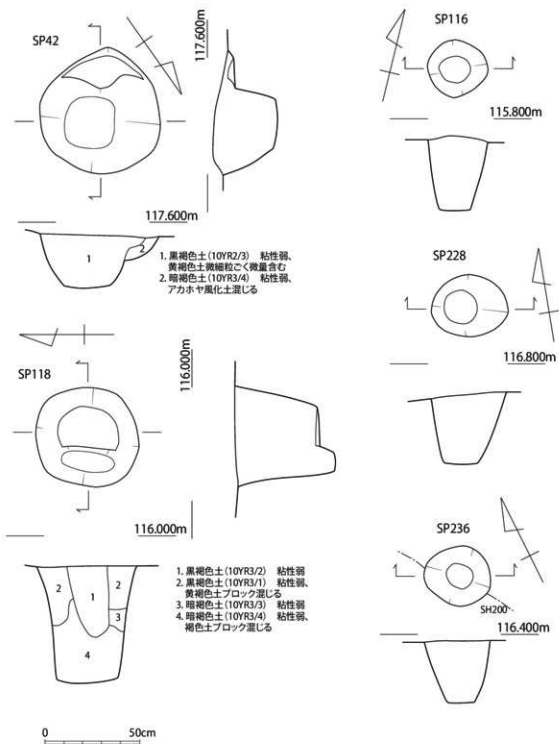
第368図 SK265 実測図 (1/30)



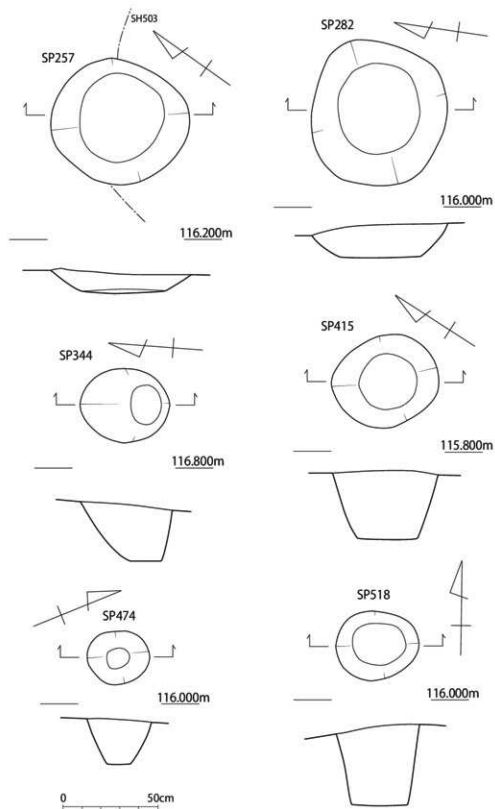
1. 暗赤褐色土 (2.5YR3/2) 粘性弱、アカホヤ粒子混じり
2. 暗赤褐色土 (5YR3/4) 粘性弱、アカホヤ粒子混じり
3. 暗赤褐色土 (5YR3/3) 粘性弱、アカホヤ粒子混じり

第369図 SK265 出土遺物実測図 (1/3)

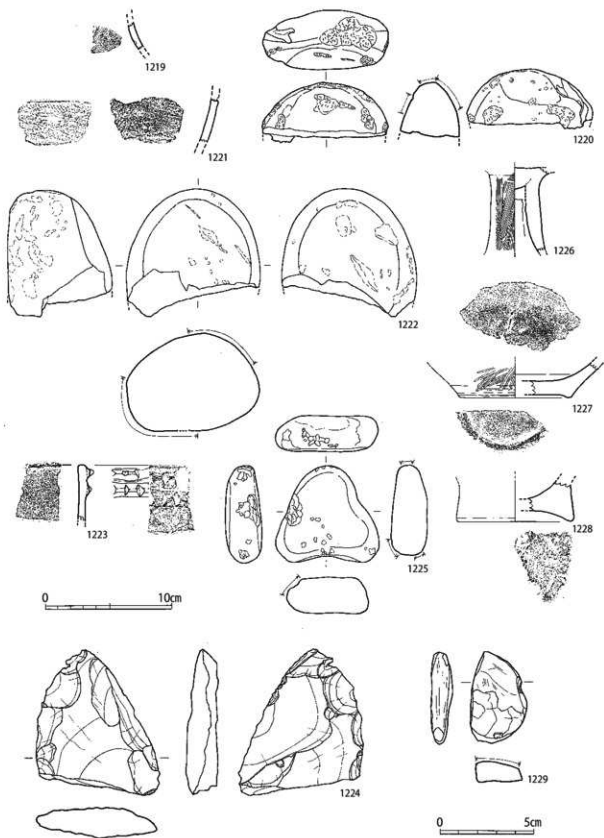
第370図 SK444 実測図 (1/30)



第 371 図 3 区遺構尖測図① (1/20)

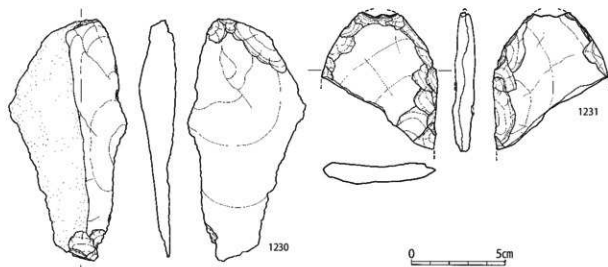


第 372 图 3 区遺構実測図② (1/20)

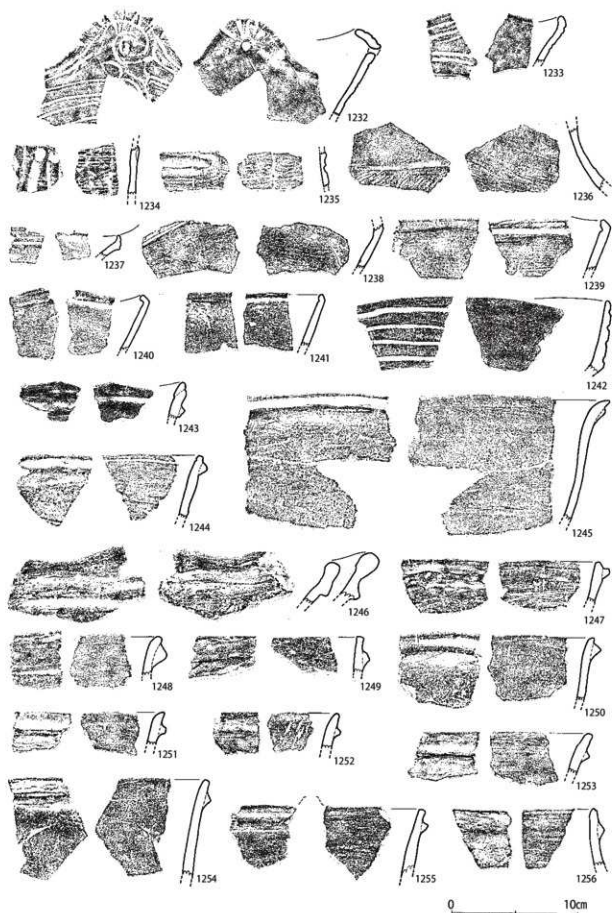


第 373 图 3 区遺構出土遺物実測図① (1/3 · 1/2)

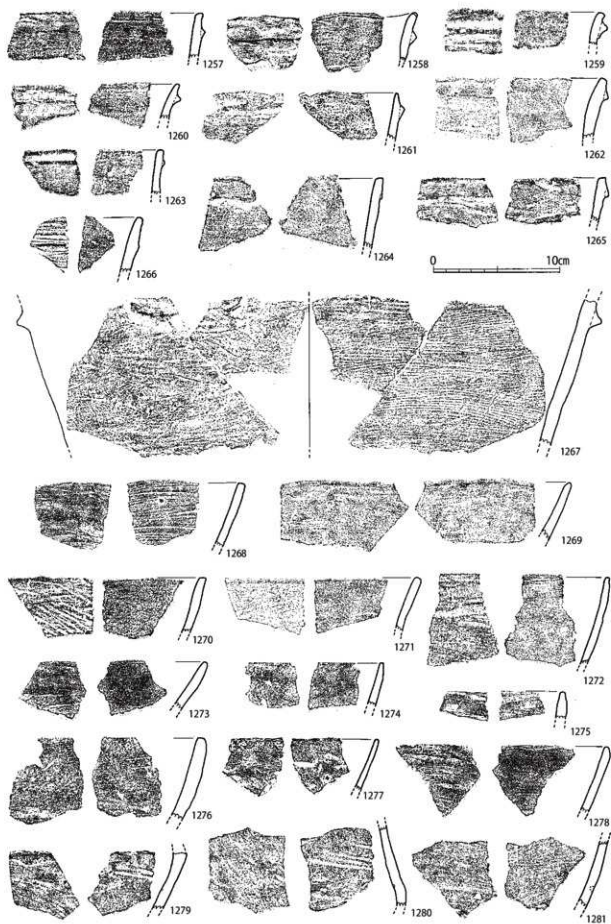
1344は磨製石鏃であるが、表面に剥離痕が残ることから研磨工程段階の未成品とわかる。石材は1344が黒色粘板岩、1345は結晶片岩である。1365は結晶片岩製の磨製石鏃未成品で、表面に研磨痕を残す。1345は対向する上下両辺に剥離痕が残ることから楔形石器とした。1346は流紋岩の剥片で、旧石器時代の遺物である。1347～1349は二次加工剥片、1350・1351は剥片である。1352は千枚岩の横長剥片を素材とした横刃形石器で、下辺に刃部調整を施す。1353～1364・1366～1374は打製石斧である。石材はほとんどが安山岩を用いるが、1360・1361は千枚岩を素材とする。1375は蛇紋岩製の石ノミで、表面を丁寧に研磨している。1376は細長い千枚岩を素材とする磨製石器で、一側面を刃部状に整形することから石刀であろうか。1377～1379は石錘である。いずれも円礫の長軸両端に打ち欠きを施し、縄掛け部を作り出す。石材は1377が砂岩、1378・1379は安山岩である。1380は砂岩の円礫を用いた磨石で、上面を磨面とする。1381は安山岩の磨石で、上部部に被熱の痕跡が認められる。1382・1383は砂岩の円礫を素材とした叩石で、上下両面に敲打痕が認められる。1384は砂岩製の磨石・叩石で、上下両面を磨面とし、側縁部に顕著な敲打痕が認められる。1385・1386は叩石・磨石で、砂岩を素材とする。1387は叩石で、側縁部及び上面の緩い稜線部分を使っている。1388は流紋岩の原石である。1389～1392は砥石で、1389・1391・1392は砂岩、1390は凝灰岩質砂岩を用いる。1393は半円形状を呈する砂岩製の持ち砥石で、左側面部を研ぎ面とし、線刻状の筋が残る。1394～1396は安山岩製の石皿で、いずれも上下両面を使用面とする。1395は上面に、1396は上下両面に被熱の痕跡が認められる。1397は凝灰岩製の組合式五輪塔の空風輪で、風輪部にはわずかに蓮弁状の線刻が認められる。1398は鉄釘で、身部の断面は方形を呈する。1399は板状の鉄製品であるが、用途は不明である。



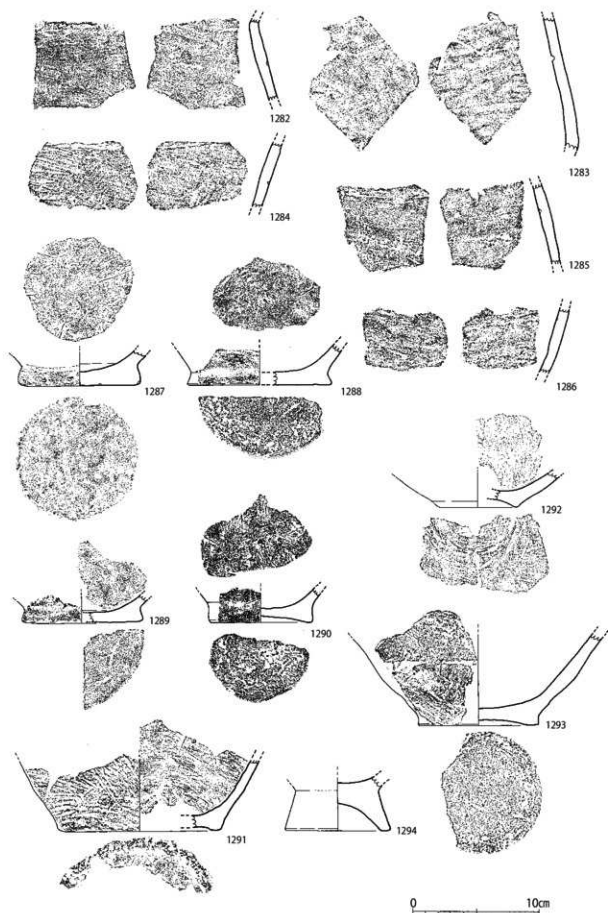
第374図 3区遺構出土遺物実測図②(1/2)



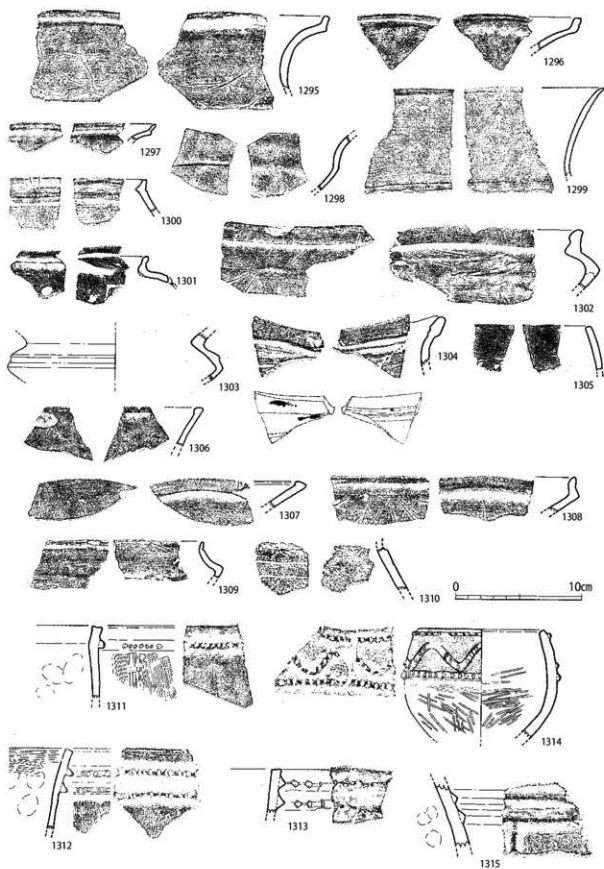
第 375 图 3 区出土文物实测图① (1/3)



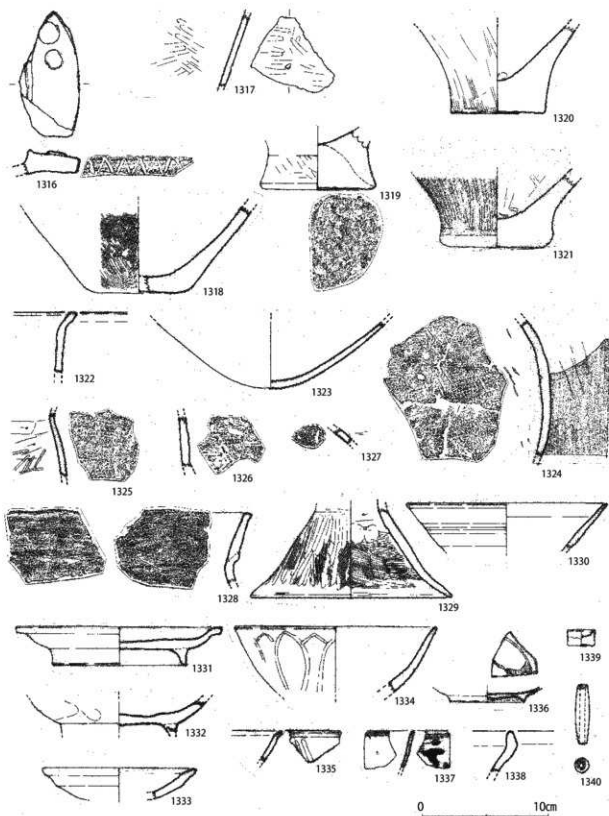
第 376 图 3 区出土遗物实测图② (1/3)



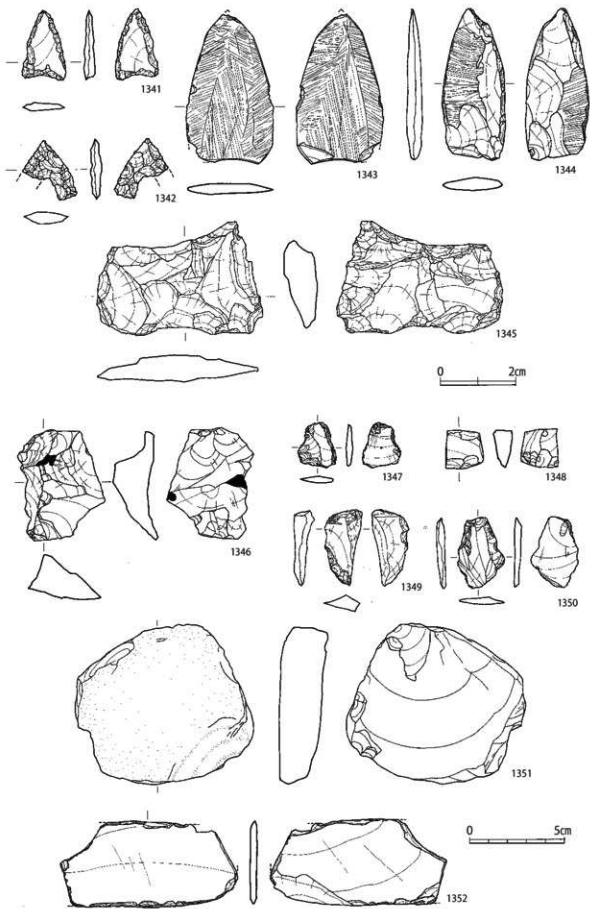
第 377 图 3 区出土物实测图③ (1/3)



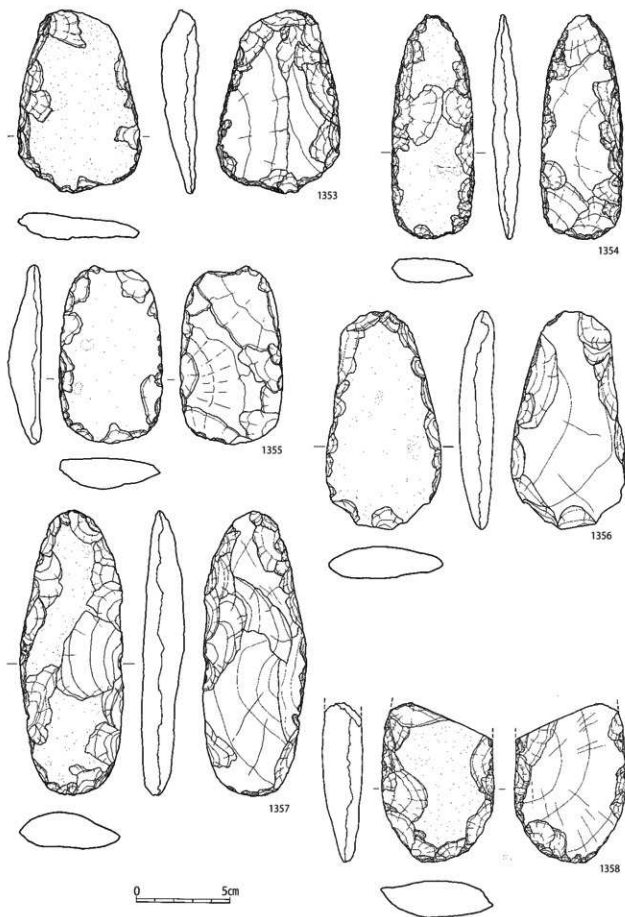
第 378 图 3 区出土文物实测图④ (1/3)



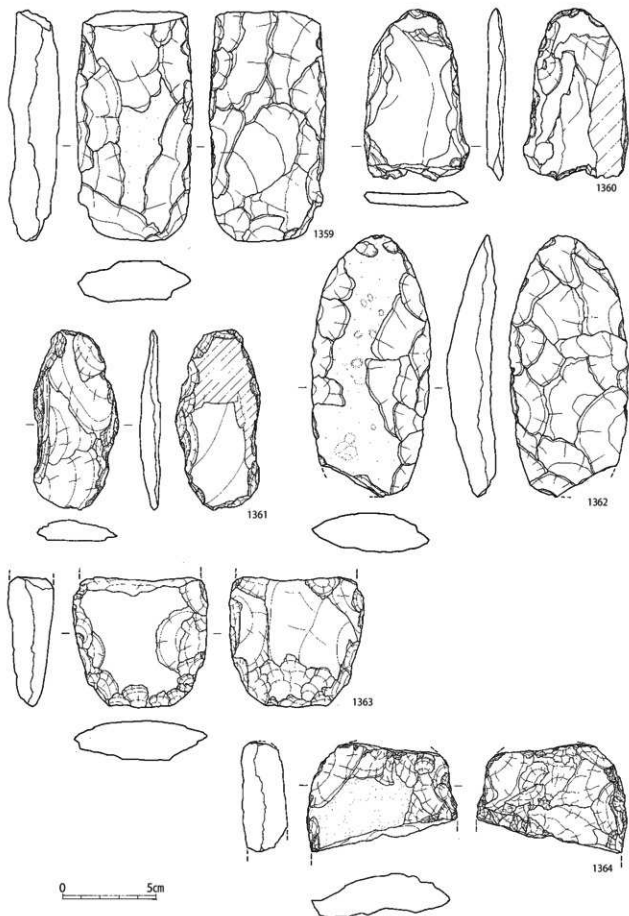
第 379 图 3 区出土文物实测图⑤ (1/3)



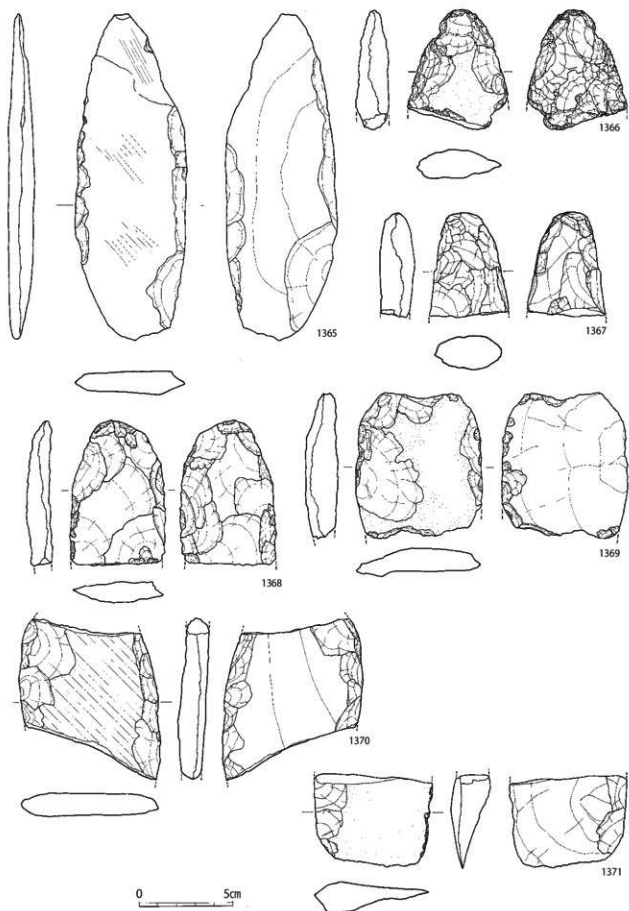
第 380 图 3 区出土遗物实测图⑥ (1/1·1/2)



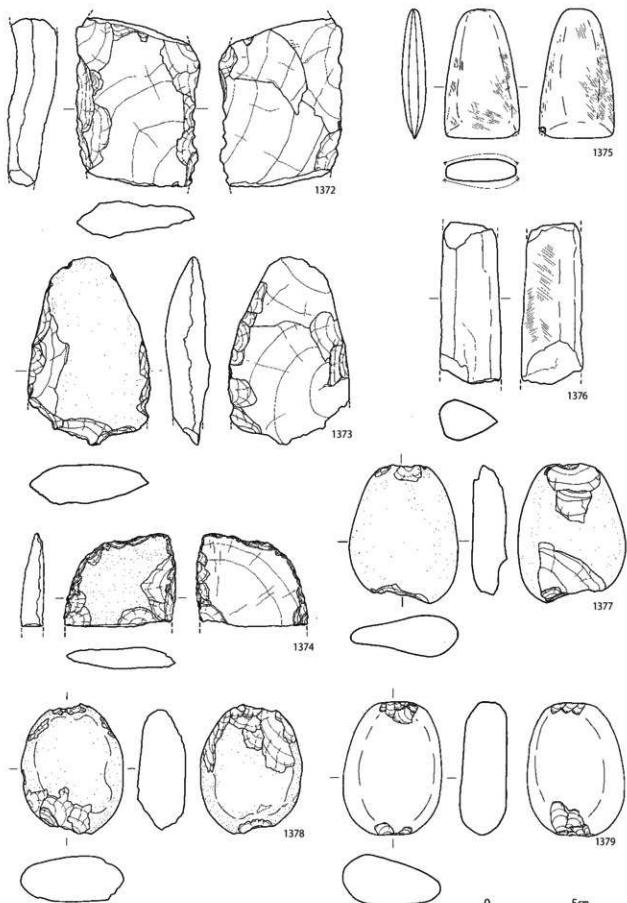
第381图 3区出土遗物实测图⑦(1/2)



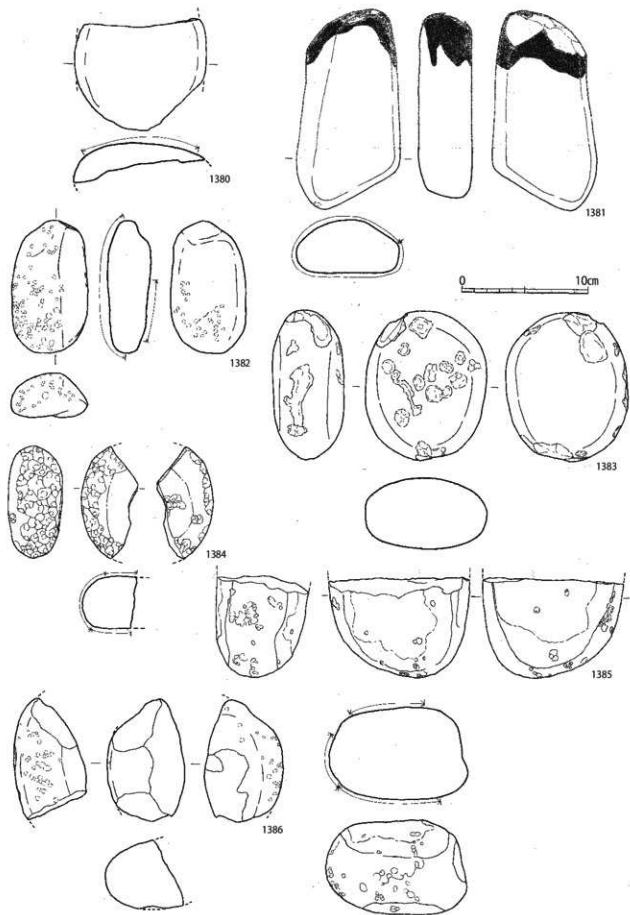
第 382 图 3 区出土遗物实测图⑧ (1/2)



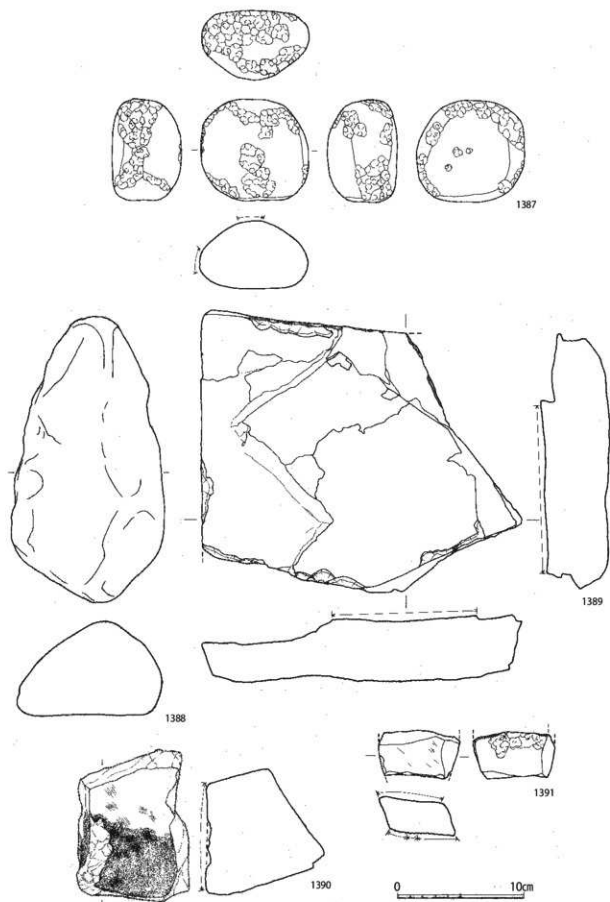
第 383 图 3 区出土遗物实测图⑨ (1/2)



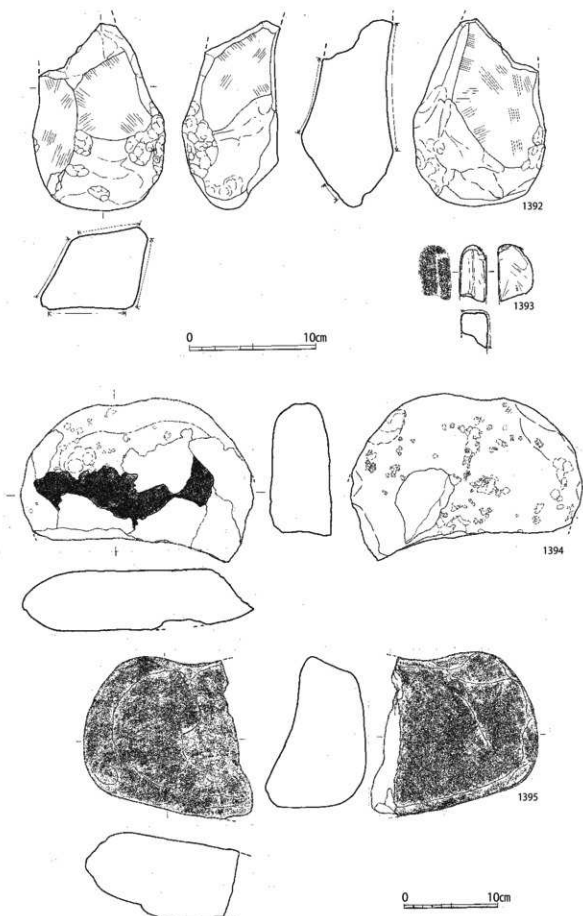
第 384 图 3 区出土遗物实测图⑩ (1/2)



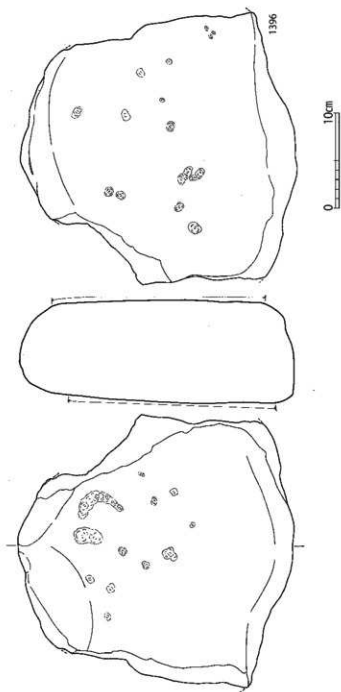
第 385 图 3 区出土遗物实测图① (1/3)



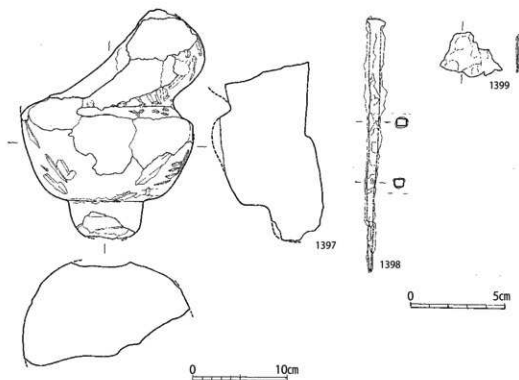
第 386 图 3 区出土物实测图⑫ (1/3)



第 387 图 3 区出土遗物实测图⑬ (1/3 · 1/4)



第 388 图 3 区出土遗物实测图⑭ (1/4)

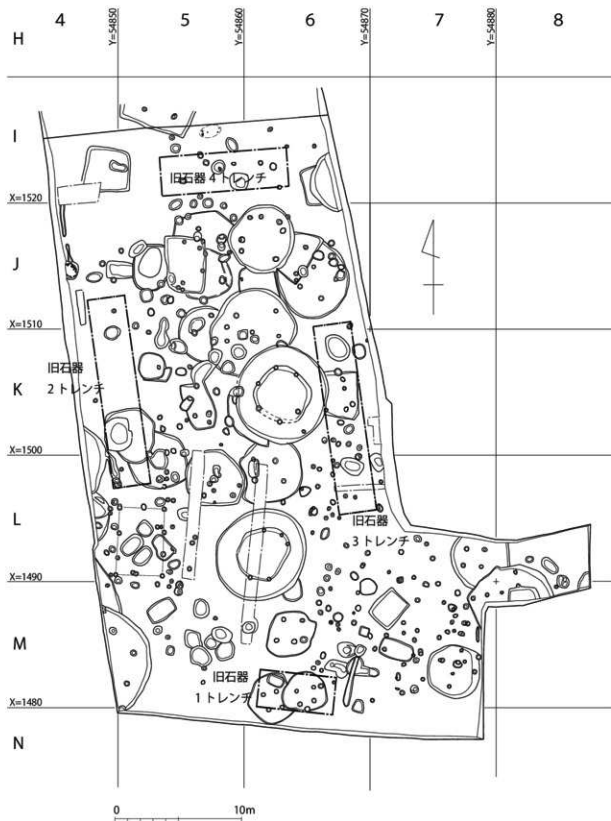


第 389 図 3区出土遺物実測図⑮ (1/4・1/2)

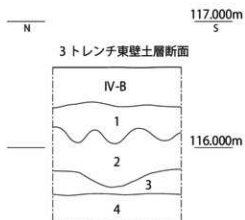
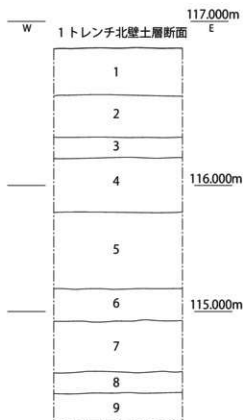
第 8 節 旧石器時代の確認調査

標準土層の第IV層上面の遺構の調査後に、下位層における遺構・遺物の有無を確認する目的で、3区の周囲壁際に4箇所の確認調査グリッドを設定した。調査区は記録作成作業が必要な竪穴建物等の主要遺構の分布する場所を避けて設定した(第390図)。トレンチの規模は、1トレンチが3×6m、2・3トレンチは3×15m、4トレンチは3×10mである。掘削には重機を使用し、堆積層を薄く慎重に剥ぎ取りながら掘り下げ、遺構や遺物の有無を確認する方法をとった。トレンチ1では暗色帯を掘り抜き、その下の黄褐色ローム層に達した時点で掘り下げを終了した。遺構・遺物は全く確認されなかった。これを踏まえ、2～4トレンチでは暗色帯までは下げず、黄褐色ローム層から石器が出るかどうかを中心に確認することとした。結果として、各トレンチから遺構・遺物ともに確認されなかった。

確認調査グリッドの土層を第391図に示す。1は明黄褐色を呈し、粘性がなくサラサラとした火山灰で、約7300年前の鬼界カルデラア噴火によるアカホヤ層(KAh)である。2は標準層序の第VI層で、縄文時代早期に相当する。3は粘性のある暗褐色土で、層厚は15cm前後を測る。4のロームへの漸位層である。4は粘性のある褐色のローム質土で、層厚約40cmを測る。5はにぶい黄褐色を呈するローム層で、層厚は約60cmである。6はにぶい黄褐色の粘性のあるローム質土で、明黄褐色土の微細な粒が混じる。この微細粒は約29000～26000年前の鬼界カルデラ噴火に由来するAT火山灰とみられる。7はいわゆる暗色帯で、粘性の強い黒褐色土である。層厚は約40cmを測る。8は7よりも少し明るく暗褐色を呈する。9は褐色を呈する硬質のハードロームである。



第 390 図 旧石器時代確認調査トレンチ配置図 (1/300)



- IV-B 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、黄褐色土・黒褐色土が斑状に混じる
1. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性なくサラサラの火山灰層 (K-Ah 層、標準層序 V 層)
 2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性強く硬く締まる (標準層序 VI 層)
 3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性あり硬く締まる (漸位層)
 4. 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり硬く締まるローム層
 5. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性あり硬く締まるローム層
 6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あるローム層、明黄褐色 (10YR6/6) の粒子混じる (AT か)
 7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強いローム層 (暗色帯)
 8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強いローム層
 9. 褐色土 (10YR4/4) 粘性強いローム層



第 391 図 旧石器確認トレンチ土層断面 (1/30)

遺物觀察表

第9表 上田原家遺跡(3区) 遺物類表(土器・陶磁器)

調査番号	区画	遺構	種類	口径 (径行幅)	断面 (径行幅)	位置		出土		備考	
						西面	東面	層位	数量		
第11区	172	316, 3K200	縄土器	6.0~6	3.8~4	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	173	316, 3K200	縄土器	6.0~6	4.1~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	174	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	175	316, 3K200	縄土器	7.2~6	7.2~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	176	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	177	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	178	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	179	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	180	316, 3K200, 3K201	縄土器	4.3~6	4.3~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	181	316, 3K200	縄土器	3.7~6	3.7~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	182	316, 3K200	縄土器	2.0~6	2.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	183	316, 3K200	縄土器	2.0~6	2.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
第12区	184	316, 3K200	縄土器	2.1~6	2.1~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	185	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	186	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	187	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	188	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	189	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	190	316, 3K200	縄土器	2.7~6	2.7~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	191	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	192	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	193	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	194	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	第13区	195	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少
196		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
197		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
198		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
199		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
200		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
201		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
202		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
203		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
204		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
205		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
第14区		206	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少
	207	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	208	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	209	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	210	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	211	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	212	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	213	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	214	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	215	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	216	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
	第15区	217	316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少
218		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
219		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
220		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
221		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
222		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
223		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
224		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
225		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
226		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少
227		316, 3K200	縄土器	3.0~6	3.0~6	3.8	3.8	Ⅲ	少	少	少

第9表 上田原東遺跡 (3K) 遺物観察表 (土器・陶磁器)

標本番号	位置	遺構	器種	口径 (底径)	器高 (底径)	原産地	文様・装飾		土質		備考
							外面	内面	外面	内面	
第2308号	799	35C, SA100	縄文土器	5.5, 9.0	6.9, 9.0	島根県・3ヶ村・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	長石 石灰 多
	800	35C, SA100, 直上	縄文土器	13.9, 9.0	13.9, 9.0	3ヶ村・3ヶ村・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	多 少 多
	801	35C, SA100, 直上	縄文土器	13.9, 9.0	13.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	多 少 多
	802	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ村・宇賀町管文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	803	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多	
	804	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	島根・種子屋敷	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	805	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多	
	806	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多	
	807	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多	
	808	35C, SA100	縄文土器	6.7, 9.0	6.7, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多	
第2309号	811	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	812	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	813	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	814	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	815	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	816	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	817	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	818	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	819	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	820	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ村・島根・尾道文	3ヶ	褐色	褐色	褐色	少 少 多
第2310号	821	35C, SA100	縄文土器	2.9, 9.0	2.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	822	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	823	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	824	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	825	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	826	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	827	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	828	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	829	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
	830	35C, SA100	縄文土器	0.0	0.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	多 多 多
第2311号	831	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	832	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	833	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	834	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	835	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	836	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	837	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	838	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	839	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	840	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
第2312号	841	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	842	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	843	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	844	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	845	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	846	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	847	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	848	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	849	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多
	850	35C, SA100	縄文土器	6.9, 9.0	6.9, 9.0	3ヶ	褐色	褐色	褐色	褐色	少 少 多

第9表 上田原遺跡(3区) 遺物観察表(土器・陶磁器)

標記番号	区画	遺構	器種	白磁 (灰白磁)	器体 (底内径)	底径 (底内径)	外面	裏面	内面	色澤			土質			備考
										外面	内面	口内	片貝	鉄石	石灰	
1290	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1291	305	J-7 検出	陶土器		灰鉢	6.40×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	片貝層付着
1292	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	2.40×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1293	305	口縁25	陶土器		灰鉢	2.1×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1294	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	4.6×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	少	少	
1295	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.8×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1296	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	4.0×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1297	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.5×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1298	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	2.6×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1299	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1300	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1301	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	少	少	
1311	305	中丁 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1312	305	中丁 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1313	305	中丁 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1314	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.4×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1315	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	5.1×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多	多	
1316	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	1.8×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多	多	
1317	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	5.7×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1318	305	遺構 葬土	陶土器		不明	不明	不明			不明	不明	不明	少	少	少	
1319	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	6.8×6.6	口方筒の口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多	多	
1320	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	9.0	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1321	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	7.4×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1322	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	8.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1323	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	7.5	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1324	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	8.2×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	多	多	多	
1325	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	10.7×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1326	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	5.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1327	305	J-6 検出	陶土器		灰鉢	4.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1328	305	J-4 検出	陶土器		灰鉢	1.2×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1329	305	口縁	陶土器		灰鉢	8.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1330	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	11.6×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1331	305	東壁	陶土器		灰鉢	3.7	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1332	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	11.6×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1333	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	11.6×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1334	305	遺構 葬土	陶土器		不明	不明	不明			不明	不明	不明	少	少	少	
1335	305	遺構 葬土	陶土器		不明	不明	不明			不明	不明	不明	少	少	少	
1336	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	8.2×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1337	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.0×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1338	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	3.2×6.6	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
1339	305	J-5 検出	陶土器		灰鉢	12.3	口片			黒褐色	黒褐色	黒褐色	少	少	少	

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

棟号番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第217区	738	3区	SH200	礫石・磨石	砂岩	10.1+ α	11.3	7.5	1400.0	
	739	3区	SH200	礫石	砂岩	7.0	6.2	3.5	190.6	
	740	3区	SH200	石鏃	姫島産黒曜石	0.8+ α	1.4	0.2	0.2	
第218区	741	3区	SH200	打製石斧	安山岩	10.1+ α	6.5	1.5	132.3	
	742	3区	SH200	打製石斧	安山岩	6.4+ α	5.8	1.5	64.1	
	743	3区	SH200	横刀型石器	泥岩	6.5	10.1	1.7	120.6	
	744	3区	SH200	磨製石斧	安山岩	7.9	4.4	1.2	62.1	
	745	3区	SH200	石鏃	安山岩	8.0	7.1	2.4	206.7	
	746	3区	SH200	石鏃	砂岩	7.1	6.3	3.2	213.7	礫石の転用
第220区	750	3区	SH276	打製石斧	安山岩	12.8	6.0	1.8	168.0	
第221区	752	3区	SK499	剥片	安山岩	5.8	8.2	1.9	113.2	
	753	3区	SK499	打製石斧	安山岩	5.15+ α	7.1	1.0	29.6	
第225区	782	3区	SH280 (SK280A)	石鏃	金山産 μ 砂付	3.1+ α	2.5	0.3	2.5	未成品
	783	3区	SH280 (SK280A)	打製石斧	安山岩	11.7	5.0	1.6	104.0	
	784	3区	SH280 (SK280A)	横刀型石器	粘板岩	3.5	5.3+ α	1.0	25.0	
	785	3区	SH280 (SK280A)	剥片	姫島産黒曜石	3.6+ α	2.4	1.0	8.2	
	786	3区	SH280 (SK280A)	打欠石鏃	凝灰岩質砂岩	8.0	6.1	1.6	102.8	
	787	3区	SH280 (SK280A)	打欠石鏃	砂岩	7.3	6.0	1.7	102.7	
	788	3区	SH280 (SK280A)	磨石・礫石	安山岩	5.9+ α	8.7	5.0	383.7	
	789	3区	SH280 (SK280A)	礫石	安山岩	7.3	4.3	2.7	161.0	
第227区	790	3区	SH496	打製石鏃	金山産 μ 砂付	1.8	1.7	0.4	1.1	
第229区	794	3区	SH503	砥石か	凝灰岩	8.8+ α	6.6	3.0	154.4	
	795	3区	SH503	磨石・礫石	砂岩	10.3	8.2	4.1	530.0	
第231区	796	3区	SH530	切目石鏃	粘板岩	6.9	4.6	1.9	96.1	
	797	3区	SH530	礫石	砂岩	14.6	7.4	3.1	530.0	
第234区	805	3区	SK100	打製石斧	安山岩	10.7	5.9	1.4	97.4	
	806	3区	SK100	打製石斧	安山岩	12.0	9.4	2.0	243.4	
第236区	808	3区	SK362	磨石・礫石	砂岩	8.9	8.0	3.6	421.1	
	809	3区	SK362	磨石・礫石	砂岩	6.7	6.2	2.9	124.2	
	810	3区	SK362	打製石斧	安山岩	5.8	5.9	2.1	81.4	
第238区	823	3区	SK408	礫石	砂岩	5.4+ α	9.9+ α	5.9+ α	326.0	
	824	3区	SK408	礫石	砂岩	7.9+ α	10.8+ α	5.0	534.8	
	825	3区	SK408	磨石・礫石	砂岩	15.8	9.2+ α	6.3	1360.0	
	826	3区	SK408	砥石	砂岩	20.6+ α	10.8+ α	5.1	1420.0	
第239区	827	3区	SK408	二次加工剥片	姫島産黒曜石	3.25	3.9	1.3	11.3	
	828	3区	SK408	切目石鏃	粘板岩	7.3	2.2	1.3	31.6	
	839	3区	SK250	磨石・礫石	砂岩	10.8	10.3	5.9	1000.0	
	840	3区	SK250	打製石斧	安山岩	11.4	5.6	1.9	159.0	
	841	3区	SK250	打製石斧	安山岩	7.1+ α	5.0+ α	2.7+ α	101.0	
第243区	842	3区	SK250	打製石斧	安山岩	10.0+ α	5.8	1.9	120.0	
	849	3区	SH1	磨石・礫石	砂岩	6.9+ α	9.8	4.8	468.1	
	850	3区	SH1	礫石	砂岩	9.5	10.0+ α	5.6	850.0	
	851	3区	SH1	礫石	安山岩	15.0	13.4	5.3	1590.0	
第245区	852	3区	SH1	剥片	粘板岩	12.4	13.3	3.0	365.9	磨製石鏃素材
	853	3区	SH1	打製石斧	粘板岩	9.0	4.3	1.0	45.8	
	854	3区	SH1	磨製石鏃	粘板岩	4.5	2.0	0.3	5.1	
第246区	855	3区	SH1	磨製石鏃	粘板岩	7.4+ α	3.8	1.2	33.4	未成品
	891	3区	SH2	石鏃	μ 砂付	1.8	1.2	0.2	0.5	
	892	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	2.6	1.7	0.25	1.6	
	893	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	4.2	1.4	0.3	1.9	
	894	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	4.9	1.9	0.4	4.4	
	895	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	2.2+ α	2.1	0.3	1.5	
	896	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	3.2	1.8	0.3	1.9	未成品
	897	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	4.6	2.8	0.7	8.6	未成品

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

神田番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考		
第251区	898	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	4.8 ⁺ α	2.6	0.5	7.0	未成品	
	899	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	5.1	2.6	0.8	9.1	未成品	
	900	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	6.4	2.9	0.7	17.3	未成品	
第252区	901	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	5.4	2.7	0.7	9.1	未製品	
	902	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	5.9	3.0	0.8	15.3	未製品	
	903	3区	SH2	磨製石鏃	粘板岩	8.4	3.0	1.6	46.4	未成品	
第253区	904	3区	SH2	磨製石鏃	千枚岩	4.0	3.4	0.6	12.1	未成品	
	905	3区	SH2	スリノミ	安山岩	9.5	9.0	4.4	320.0		
	906	3区	SH2	磨製石斧	蛇紋岩	10.1	4.0	2.3	152.5		
	907	3区	SH2	磨製石斧	砂岩	13.65	5.35	3.2	381.5		
	908	3区	SH2	石ノミ	蛇紋岩	9.0	5.5	1.9	137.1		
	909	3区	SH2	打製石斧	安山岩	11.7	6.2	1.3	122.9		
	910	3区	SH2	打製石斧	安山岩	13.0	4.8	2.2	140.5		
第254区	911	3区	SH2	打製石斧	安山岩	12.0	6.3	2.3	200.0	被熱あり	
	912	3区	SH2	打製石斧	安山岩	12.5	6.4	2.3	230.0		
	913	3区	SH2	打製石斧	安山岩	7.2 ⁺ α	4.9	1.65	83.3		
第255区	914	3区	SH2	打製石斧	安山岩	11.7	6.7	2.2	246.6		
	915	3区	SH2	打製石斧	安山岩	11.7	6.5	1.5	160.5		
	916	3区	SH2	打製石斧	砂岩	9.2 ⁺ α	8.1	4.0	370.0		
	917	3区	SH2	打製石斧	安山岩	7.8 ⁺ α	8.1 ⁺ α	2.5	166.9		
	918	3区	SH2	石鏃	粘板岩	10.0 ⁺ α	4.9 ⁺ α	3.7 ⁺ α	165.0		
	919	3区	SH2	切目石鏃	粘板岩	6.9	3.2	2.0	66.4		
	920	3区	SH2	石鏃カ	不明	4.1 ⁺ α	3.7	1.9	46.6		
第256区	921	3区	SH2	原石	流紋岩	7.5	3.1	2.1	56.4		
	922	3区	SH2	磨石	砂岩	8.6 ⁺ α	12.1	6.7 ⁺ α	970.0		
	923	3区	SH2	敲石	砂岩	7.8	4.4	3.3	177.7		
	924	3区	SH2	敲石	不明	13.3	10.8	6.3	1400.0		
	925	3区	SH2	敲石	砂岩	7.2	6.2	3.5	200.2		
	926	3区	SH2	敲石	砂岩	9.7	6.7 ⁺ α	4.3	380.0		
	927	3区	SH2	敲石	安山岩	11.8	10.2	6.6	1110.0		
	928	3区	SH2	敲石	凝灰岩質砂岩	6.8 ⁺ α	12.9	4.1	460.0		
	929	3区	SH2	敲石	砂岩	11.8	8.5 ⁺ α	7.3	890.0		
	930	3区	SH2	敲石	安山岩	6.2 ⁺ α	5.3	2.4	120.5		
	931	3区	SH2	敲石	砂岩	7.8 ⁺ α	9.7 ⁺ α	5.0 ⁺ α	520.0		
	932	3区	SH2	敲石	安山岩	15.0	10.4	6.7	1390.0		
	第257区	933	3区	SH2	敲石	砂岩	4.5 ⁺ α	7.9	2.4	151.0	
934		3区	SH2	敲石	砂岩	7.0	5.8	4.2	244.0		
935		3区	SH2	敲石	砂岩	8.1	3.5	2.5	121.8		
936		3区	SH2	敲石	砂岩	4.4 ⁺ α	6.0	2.7	96.8		
937		3区	SH2	敲石	砂岩	9.2 ⁺ α	10.9	7.5	990.0		
938		3区	SH2	敲石	砂岩	5.9 ⁺ α	8.8	3.6	259.8		
939		3区	SH2	敲石	砂岩	18.2 ⁺ α	5.0 ⁺ α	5.0	430.0		
940		3区	SH2	敲石	砂岩	10.3	5.0	3.3	280.0		
第258区		941	3区	SH2	敲石	砂岩	16.0	8.0	6.0	1090.0	
		942	3区	SH2	敲石	砂岩	13.4	5.3	4.0	387.6	
	943	3区	SH2	敲石	砂岩	8.3	3.7	3.8	2130.0		
	944	3区	SH2	敲石	砂岩	5.8	10.1	4.0	330.0		
	945	3区	SH2	磨石・敲石	安山岩	10.8 ⁺ α	8.5	3.4	460.0		
第259区	946	3区	SH2	敲石・磨石	砂岩	8.4 ⁺ α	11.3	6.2	690.0		
	947	3区	SH2	磨石・敲石	砂岩	6.7 ⁺ α	12.6 ⁺ α	5.4	960.0	被熱あり	
	948	3区	SH2	磨石・敲石	砂岩	14.2	9.5	6.3	1300.0		
	949	3区	SH2	磨石・敲石	砂岩	14.2 ⁺ α	8.3 ⁺ α	6.3	950.0		
	950	3区	SH2	砥石	砂岩	13.5	9.9	5.3	1006.0	僅付着	
	951	3区	SH2	磨石・敲石	砂岩	5.3 ⁺ α	9.6	4.8	350.0		

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

神田番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第259区	952	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	4.9	11.8	3.4	323.5	
	953	3区	SH2	蔽石・磨石	砂岩	11.2	9.1	4.4	710.0	
第260区	954	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	7.5+α	11.5	7.5	930.0	
	955	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	11.9	9.85	7.8	1320.0	
	956	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	8.8+α	10.7	5.4	840.0	
	957	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	6.0+α	8.9+α	5.2	380.0	
	958	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	9.0+α	11.5	6.0	930.0	
第261区	959	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	7.0+α	11.3	6.2	660.0	
	960	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	9.1+α	12.6	7.3	1230.0	
	961	3区	SH2	蔽石	砂岩	3.8+α	7.5+α	4.2+α	150.0	
第262区	962	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	12.9	7.2	4.4	620.0	
	963	3区	SH2	蔽石	砂岩	10.0	9.8	6.3	940.0	
	964	3区	SH2	磨石・蔽石	安山岩	13.8	6.8	6.7	990.0	
	965	3区	SH2	蔽石・磨石	砂岩	13.0	11.2	6.3	1280.0	
第263区	966	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	9.0+α	9.6	3.3	460.0	
	967	3区	SH2	蔽石	砂岩	11.3	4.8	4.8	690.0	
	968	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	6.8	9.8	4.6	460.0	
	969	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	7.6+α	12.0	6.1+α	710.0	
第264区	970	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	10.6+α	8.7	4.2	630.0	
	971	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	9.4	8.0	5.2	630.0	
第265区	972	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	15.3	10.4	7.1	1760.0	
	973	3区	SH2	磨石・蔽石	砂岩	10.2	13.9	6.0	1350.0	
	974	3区	SH2	砥石	砂岩	11.9+α	11.4	7.8+α	1130.0	
	975	3区	SH2	砥石	砂岩	8.5	7.6+α	4.9	600.0	
	976	3区	SH2	砥石	砂岩	14.0	8.5	12.0 ^α 12.5 ^α	2110.0	
第266区	977	3区	SH2	砥石小	凝灰岩	6.6	3.7	1.4	30.5	
	978	3区	SH2	砥石	砂岩	10.3+α	13.9+α	7.0	1380.0	
	979	3区	SH2	砥石	砂岩	11.4+α	19.4	5.0	1700.0	
	980	3区	SH2	砥石	砂岩	15.0	1.95	3.4	144.8	
	981	3区	SH2	砥石	凝灰岩	14.2	4.1	4.0	240.0	
	982	3区	SH2	砥石	砂岩	10.8	15.3+α	11.9	2850.0	赤色顔料付着
	983	3区	SH2	砥石	砂岩	7.0+α	12.0+α	5.2	700.0	
第267区	984	3区	SH2	砥石	砂岩	21.3	16.9+α	11.2	4750.0	
	985	3区	SH2	砥石	砂岩	6.6+α	7.0+α	3.1+α	142.1	
	986	3区	SH2	砥石	凝灰岩	12.5+α	12.2	5.5	670.0	
	987	3区	SH2	砥石	砂岩	11.9	6.7	3.7	420.0	
第268区	988	3区	SH2	持ち砥石	安山岩	5.5+α	15.7	5.8	710.0	
	989	3区	SH2	持ち砥石	砂岩	6.3	10.8	4.5	470.0	磨石転用砥石 被熱あり
	990	3区	SH2	石皿	安山岩	18.9	21.3	8.0	4900.0	
第269区	991	3区	SH2	石皿	砂岩	17.6+α	23.5	7.1	4950.0	
	992	3区	SH2	石皿	砂岩	23.2	24.3	8.0	6500.0	被熱あり
	993	3区	SH2	石皿	安山岩	13.9+α	8.7+α	4.0+α	570.0	
	994	3区	SH2	石皿	凝灰岩	20.4	32.2	13.4	11440.0	
	995	3区	SH2	石皿	安山岩	39.1	20.6	8.7	9680.0	
第270区	996	3区	SH2	石皿(砥石)	砂岩	17.6	24.6	7.9	3700.0	
	997	3区	SH2	石皿	安山岩	7.1	17.5	7.2	1180.0	
	998	3区	SH2	石皿	砂岩	14.5+α	22.9	9.6	4420.0	
	999	3区	SH2	石皿	安山岩	12.4+α	28.5	9.4	5020.0	
第271区	1000	3区	SH2	石皿	砂岩	12.0	17.5	5.7	2000.0	
	1001	3区	SH2	石皿	安山岩	13.3+α	31.4+α	8.3	6390.0	被熱あり
	1002	3区	SH2	石皿	砂岩	24.3	21.2	7.7	7730.0	
第272区	1003	3区	SH2	石皿	砂岩	19.7+α	26.4	9.0	6500.0	
	1004	3区	SH2	石皿	砂岩	16.3+α	16.5+α	6.2	2470.0	

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

神田番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第271区	1005	3K	SH2	石皿	安山岩	18.0+ α	21.7+ α	17.4	1150.0	
	1014	3K	SH3	砥石	泥岩	8.6+ α	6.5+ α	2.5+ α	118.2	
第273区	1015	3K	SH3	砥石	砂岩	7.3+ α	6.1+ α	2.6+ α	182.0	
	1016	3K	SH3	砥石	砂岩	3.6+ α	8.0+ α	4.05+ α	187.1	
	1017	3K	SH3	砥石	砂岩	18.2+ α	8.2+ α	6.2+ α	1380.0	
	1018	3K	SH3	横刀型石器	千枚岩	4.6+ α	3.6	0.75	14.7	
	1019	3K	SH3	磨製石鏃	粘板岩	5.25+ α	2.5	0.4	7.0	
	1020	3K	SH3	石皿	砂岩	21.3	21.9	5.3	4310.0	
	1022	3K	SH5	磨石・敲石	砂岩	11.6	9.8	4.1	610.0	
第277区	1024	3K	SH6	磨製石鏃	粘板岩	6.3	3.4	1.6	13.2	未成品
	1045	3K	SH10	磨製石鏃	粘板岩	3.5	2.15	0.25	2.6	
第283区	1046	3K	SH10	磨製石鏃	粘板岩	3.0	1.6	0.2	1.0	未成品
	1047	3K	SH10	磨製石鏃	粘板岩	3.7	1.8	0.5	4.0	未成品
	1048	3K	SH10	磨製石鏃	結晶片岩	5.3	1.7	4.0	4.9	未成品
	1049	3K	SH10	磨製石鏃	粘板岩	3.9	1.7	0.3	2.7	未成品
	1050	3K	SH10	磨製石鏃	粘板岩	2.8+ α	1.95	0.7	3.8	未成品
	1051	3K	SH10	スライパ	チャ	2.7	2.1	8.0	5.2	
	1052	3K	SH10	二次加工剥片	チャ	2.8	1.9	0.4	3.4	
	1053	3K	SH10	打製石斧	安山岩	4.0+ α	5.65	1.0	30.1	
	1054	3K	SH10	打製石斧	粘板岩	8.6+ α	6.3	1.2	81.9	
	1055	3K	SH10	打製石斧	安山岩	5.8+ α	6.9	1.2	61.9	
	1056	3K	SH10	打製石斧	安山岩	9.0+ α	5.4	1.8	126.2	
第284区	1057	3K	SH10	敲石	流紋岩	10.6	6.5	3.6	341.2	
	1058	3K	SH10	砥石か	砂岩	12.05	4.2	2.75	170.1	
	1059	3K	SH10	持ち砥石	流紋岩	8.6	3.2	2.5	101.1	
	1060	3K	SH10	原石	流紋岩	10.5	4.1	2.5	195.8	
	1061	3K	SH10	打欠石鏃	安山岩	6.4	3.9	2.05	3.8	
	1062	3K	SH10	勾玉	滑石か	2.7	1.6	1.2	6.8	
	1070	3K	SH12	敲石	砂岩	11.1	11.2	4.2	850.0	
第286区	1071	3K	SH12	横刀型石器	安山岩	5.0	11.0	1.0	71.9	
	1079	3K	SH28	剥片	腰岳産黒曜石	2.4	1.5	0.4	1.0	
第288区	1080	3K	SH28	磨石・敲石	砂岩	13.9+ α	9.0+ α	5.2+ α	730.0	
	1081	3K	SH28	石皿	安山岩	31.0	29.6	16.4	20000.0	
第292区	1092	3K	SH260	磨石	安山岩	9.0	8.2	4.1	480.0	
	1093	3K	SH260	磨石・敲石	安山岩	16.0	12.0	7.8	2290.0	
第293区	1094	3K	SH260	横刀型石器	凝灰岩	7.0	12.0	2.5	204.6	
	1095	3K	SH260	打製石斧	安山岩	11.8	6.5	1.6	116.6	
第295区	1096	3K	SH268	打製石斧	安山岩	11.2	5.5	1.7	116.9	
	1097	3K	SH268	打製石斧	珩岩	12.3+ α	6.2	1.8	158.2	
	1098	3K	SH268	打製石斧	安山岩	9.2+ α	7.3	1.9	121.2	
	1099	3K	SH268	打製石斧	安山岩	16.2	7.3	2.5	390.9	
第297区	1100	3K	SH268	横刀型石器	安山岩	5.2	8.5	1.5	95.3	
	1106	3K	SH315	磨製石鏃	粘板岩	5.7+ α	2.4+ α	0.6	12.0	未成品
第299区	1107	3K	SH315	磨製石鏃	粘板岩	4.4+ α	2.6	0.4	6.1	未成品
	1114	3K	SH367	磨製石器	千枚岩	3.2+ α	2.7	0.5	6.2	
第301区	1120	3K	SH423	敲石	砂岩	5.1+ α	8.3	4.3	244.5	
	1121	3K	SH423	打製石斧	安山岩	13.4	5.5	1.9	154.0	
	1122	3K	SH423	打製石斧	安山岩	17.9+ α	4.35	1.4	55.2	
第302区	1123	3K	SH423	打製石斧	安山岩	18.9	9.6	6.2	1720.0	未成品
	1124	3K	SH423	横刀型石器	安山岩	10.0	7.3	1.5	104.0	
第303区	1125	3K	SH423	敲石器	砂岩	7.7+ α	5.7	2.4	197.3	
	1126	3K	SH423	打欠石鏃	砂岩	9.4	7.7	2.6	276.9	
	1127	3K	SH423	石皿	砂岩	16.9+ α	18.5+ α	6.4	1900.0	
1128	3K	SH423	石皿	片麻岩	11.6+ α	11.5+ α	5.5	914.2		

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

神田番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第303区	1129	3区 SH423	石皿	凝灰岩	21.9	26.0	13.4	8600.0	
第304区	1130	3区 SH423	石皿	砂岩	30.8+ α	46.2	13.7	23000.0	
第308区	1134	3区 SK55	敲石	砂岩	6.6	6.8+ α	4.1	254.6	
第312区	1136	3区 SK313	打製石斧	安山岩	15.3	8.3	1.6	186.7	
	1137	3区 SK312	打製石斧	安山岩	17.5	10.8	1.7	290.1	
	1138	3区 SK312	横刃型石器	安山岩	13.3	14.7	1.2	197.3	
第314区	1140	3区 SK443	磨製石鏃	粘板岩	4.6	1.7	0.3	3.0	
	1141	3区 SK443	打製石斧	砂岩	12.7	6.55	2.1	194.5	
	1142	3区 SK443	打製石斧	安山岩	8.6+ α	5.4	1.5	89.2	
第316区	1143	3区 SK462	磨石・敲石	砂岩	5.4+ α	10.8+ α	7.3	580.0	
	1144	3区 SK462	打製石鏃	姫島産黒曜石	1.9+ α	1.9	0.4	0.9	
	1145	3区 SK462	磨製石鏃	粘板岩	1.7+ α	1.3	0.2	0.6	
	1146	3区 SK462	剥片	安山岩	6.9+ α	7.8	2.7	146.9	
第322区	1160	3区 SH30	石皿	安山岩	16.9	20.2	6.5	3260.0	
	1161	3区 SH30	砥石	凝灰岩質砂岩	17.95	17.3	9.8	2850.0	
	1168	3区 SH240	敲石	安山岩	3.2+ α	10.1+ α	5.65	237.0	
第324区	1169	3区 SH240	打製石斧	安山岩	8.7	6.0	2.2	151.0	
	1170	3区 SH240	二次加工剥片	金山産 χ 砂岩	3.0	3.3	0.6	6.1	
	1176	3区 SK4	磨石・敲石	安山岩	9.4+ α	10.4+ α	8.1+ α	880.0	被熱あり
第326区	1177	3区 SK4	敲石	安山岩	11.2	13.8	6.1	1690.0	
	1178	3区 SK4	磨製石鏃	粘板岩	3.5+ α	1.2	0.3	1.6	
	1179	3区 SK4	磨製石鏃	粘板岩	3.1+ α	1.3	0.3	1.5	
	1180	3区 SK4	磨製石斧	蛇紋岩	3.7+ α	4.3+ α	0.9+ α	19.9	
	第328区	1181	3区 SK11	横刃型石器	千枚岩	5.6	9.2+ α	2.6	239.7
第334区	1185	3区 S-220	二次加工剥片	安山岩	10.8+ α	13.2	4.1	700.0	表面は風化面
	1186	3区 S-220	打製石斧	安山岩	13.0	6.0	1.7	165.0	
第336区	1189	3区 S-245	打製石斧	安山岩	9.6	5.1	2.2	173.0	
	1190	3区 S-245	石鏃	砂岩	7.6	4.5	2.4	143.2	
	1194	3区 SK300	打製石斧	安山岩	10.4	8.8	2.6	271.5	
第338区	1195	3区 SK300	磨石・敲石	砂岩	15.0	11.5	8.3	2240.0	
	1196	3区 SK300	敲石	砂岩	9.8	7.8+ α	4.9	420.0	
	1197	3区 SK300	石皿	砂岩	15.6	15.5+ α	4.7	1790.0	
	第344区	1200	3区 SK429	打製石斧	安山岩	9.7	5.7	1.3	94.9
第346区	1202	3区 SK441	打製石斧	安山岩	9.5+ α	5.5	2.6	168.6	
第355区	1211	3区 SK27	打製石斧	安山岩	25.8	9.8	6.6	1670.0	
第373区	1220	3区 SP118	敲石	安山岩	4.6+ α	9.9	4.6	240.3	
	1222	3区 SP228	敲石	安山岩	10.0+ α	10.5	7.6	1010.0	
	1224	3区 SP236	打製石斧	安山岩	7.7	6.5	1.6	86.1	
	1225	3区 SP257	敲石	砂岩	7.6	8.2	2.9	248.0	
	1229	3区 SP42	砥石	凝灰岩	4.8	3.0	1.1	12.1	
第374区	1230	3区 SP344	剥片	安山岩	12.8	6.2	2.0	95.5	
	1231	3区 SP415	打製石斧	安山岩	7.1+ α	6.1	1.0	42.9	
第380区	1341	3区 K-5 検出	打製石鏃	金山産 χ 砂岩	1.8	1.2	0.3	0.6	
	1342	3区 L-5 検出	打製石鏃	χ 砂岩	1.6	1.4+ α	0.3	0.5	
	1343	3区 確認調査トナ	磨製石鏃	粘板岩	3.9+ α	2.3	0.3	3.2	
	1344	3区 排土	磨製石鏃	片岩	4.0	1.65	0.35	3.1	未成品
	1345	3区 J-5 検出	楔形石器	金山産 χ 砂岩	3.0	4.4	0.9	10.2	
	1346	3区 欠番遺構	剥片	流紋岩	5.9	4.6	1.9	47.7	旧石器
	1347	3区 確認調査トナ	二次加工剥片	姫島産黒曜石	2.4	2.0	0.35	2.0	
	1348	3区 欠番遺構	二次加工剥片	χ 砂岩	2.0	2.0	1.0	5.6	
	1349	3区 東壁	二次加工剥片	姫島産黒曜石	4.0	2.0	0.9	4.1	
	1350	3区 D 検出	剥片	姫島産黒曜石	3.75	2.45	0.35	3.3	
	1351	3区 表土	剥片	安山岩	8.4	9.4	2.6	288.3	
	1352	3区 L-7 検出	横刃型石器	千枚岩	4.5+ α	9.3	0.35	26.1	

第10表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(石器)

検出番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第381区	1353	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	9.6	6.5	1.9	107.7	
	1354	3区	J-6 検出	打製石斧	安山岩	11.7	4.4	1.5	90.4	
	1355	3区	表土	打製石斧	安山岩	9.4	5.4	1.7	95.9	
	1356	3区	南壁土層	打製石斧	安山岩	11.4	6.05	1.7	163.1	
	1357	3区	表土	打製石斧	安山岩	15.0	5.3	1.8	227.7	
第382区	1358	3区	J-6 検出	打製石斧	安山岩	8.4+ α	5.9	2.1	135.7	
	1359	3区	表土	打製石斧	安山岩	12.1	6.2	2.7	264.4	
	1360	3区	欠番遺構	打製石斧	千枚岩	9.0+ α	5.5	0.9	60.4	
	1361	3区	D 検出	打製石斧	千枚岩	9.5	4.5	1.1	58.4	
	1362	3区	表土	打製石斧	安山岩	13.7+ α	6.3	2.6	234.8	
	1363	3区	K-5 検出	打製石斧	安山岩	6.9	7.2	2.5	151.5	
第383区	1364	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	5.8+ α	8.0	2.5	127.0	
	1365	3区	表土	磨製石鏃	片岩	8.55	2.9	0.6	22.3	未成品
	1366	3区	SH28付近 検出	打製石斧	安山岩	6.2+ α	5.3+ α	1.8	55.7	
	1367	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	5.9	4.1	1.85	51.8	
	1368	3区	L-5 検出	打製石斧	安山岩	7.7	5.2	1.4	64.6	
	1369	3区	K-5 検出	打製石斧	安山岩	7.7	6.7	1.7	137.2	
	1370	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	8.5+ α	7.2	1.25	109.3	
第384区	1371	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	4.9	6.2	1.7	51.9	
	1372	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	8.8+ α	6.5	1.8	171.1	
	1373	3区	I-5 検出	打製石斧	安山岩	9.9+ α	6.4	2.1	162.2	
	1374	3区	J-6 検出	打製石斧	安山岩	4.9+ α	5.9	1.2	42.5	
	1375	3区	表土	石ノミ	蛇紋岩か	6.75	4.0	1.2	49.6	
	1376	3区	I-5 検出	石刀?	千枚岩	8.5+ α	3.2	2.2	99.2	
	1377	3区	J-5 検出	打欠石鏃	砂岩	7.3	5.7	2.2	117.9	
	1378	3区	西壁	石鏃	安山岩	6.9	5.4	2.4	130.5	
	1379	3区	I-4 検出	打欠石鏃	安山岩	7.0	5.2	2.6	146.7	
	第385区	1380	3区	I-5 検出	磨石	砂岩	8.9+ α	10.4+ α	2.3+ α	261.2
1381		3区	欠番遺構	磨石・敲石	安山岩	15.7	8.15	4.2	910.0	
1382		3区	I-5 検出	敲石	砂岩	10.4	6.0	3.5	308.5	
1383		3区	東壁	敲石	砂岩	11.7	9.6	5.6	920.0	
1384		3区	表土	磨石・敲石	砂岩	8.8	4.4+ α	4.15	2072.0	
1385		3区	表土	磨石・敲石	砂岩	7.9+ α	11.2	7.4	876.7	
第386区	1386	3区	I-5 検出	敲石	砂岩	9.8+ α	6.2	5.2	331.6	
	1387	3区	表土	敲石	砂岩	8.0	8.5	5.3	550.0	
	1388	3区	表土	原石	流紋岩	22.5	12.1	7.5	2600.0	
	1389	3区	表土	砥石	砂岩	22.3+ α	25.3+ α	4.9	3800.0	
	1390	3区	表土	砥石	凝灰岩質砂岩	12.0	8.8	9.2	840.0	
第387区	1391	3区	欠番遺構	砥石	砂岩	3.7+ α	6.4	3.0	104.4	
	1392	3区	表土	砥石	砂岩	14.7+ α	10.5	7.2	1130.0	
	1393	3区	J 検出	持ち砥石	砂岩	4.45+ α	2.1	2.75	18.0	
	1394	3区	L-7・8 表土	石皿	安山岩	17.4+ α	24.7+ α	6.2	3600.0	
第388区	1395	3区	表土	石皿	安山岩	17.6	17.65+ α	10.65	3920.0	被熱あり
	1396	3区	欠番遺構	石皿	不明	29.1	28.7	10.8	1530.0	
第389区	1397	3区	西側 表土	五輪塔	凝灰岩	24.4+ α	19.3+ α	11.2+ α	2500.0	空風輪

第11表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(土製品)

挿入番号	区域	遺構	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第245図	848	3区	SH1	土錘	土	4.4	1.4	1.3	6.3	穿孔0.3
第250図	888	3区	SH2	半円形状土製品	土器	4.5	3.5	1.0	20.8	弥生土器の再加工品
	890	3区	SH2	土玉	土	2.5+ α	2.0	0.6	6.9	
第286図	1068	3区	SH12	半円形状土製品	土器	4.0	2.7	1.0	14.6	
	1069	3区	SH12	半円形状土製品	土器	4.4	3.3	1.1	20.0	
第288図	1078	3区	SH28	土錘	土	2.9+ α	1.0	1.0	3.9	穿孔:0.2~0.3

第12表 上田原東遺跡(3区) 遺物観察表(金属製品)

挿入番号	区域	遺構	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第271図	1006	3区	SH2	刀子	鉄	5.0+ α	2.0	0.5	4.7	
	1007	3区	SH2	棒状鉄製品	鉄	3.4+ α	1.2	0.7	4.2	
	1008	3区	SH2	刀子	鉄	5.0+ α	2.3	0.7	5.8	
第284図	1063	3区	SH10	刃物?	鉄	3.7+ α	3.6+ α	0.4	26.1	
第297図	1108	3区	SH315	板状鉄斧	鉄	6.7+ α	6.0	1.3	137.5	
第332図	1184	3区	SK210	不明鉄製品	鉄	2.3+ α	2.6+ α	0.6	9.0	
第389図	1398	3区	表土	釘	鉄	13.55	1.25	0.55	17.1	
	1399	3区	表土	板状銅製品	銅	2.4+ α	3.2+ α	0.2	0.8	

豊後大野市所在

上田原東遺跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書②—
（第2分冊）

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第28集

2024年3月29日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0100 大分県大分市牧緑町1-61
☎ 097-552-0077

印刷 株式会社プリメディア
〒874-0923 大分県別府市新港町1番13号
☎ 0977-23-3288 FAX 0977-24-2794